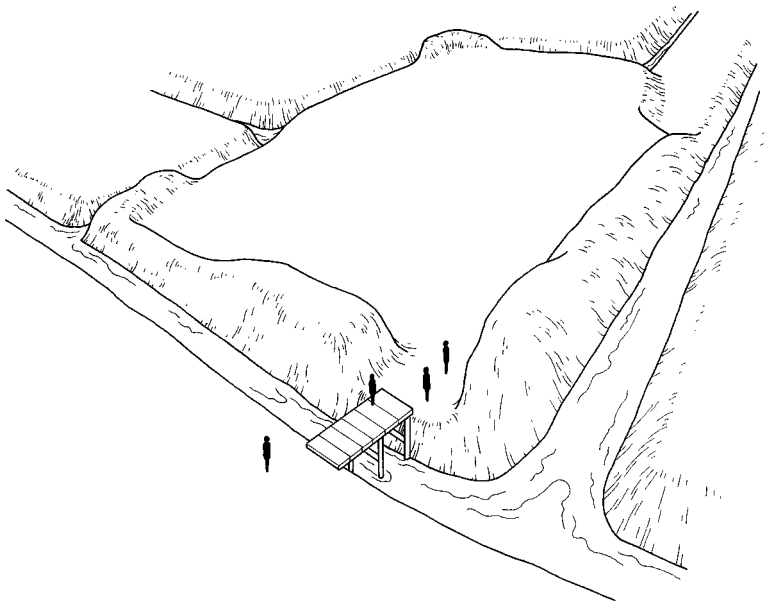
長岡京跡右京第790次発掘調査報告

開田城跡・開田城ノ内遺跡



2005

財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京跡右京第790次発掘調査報告

開田城跡・開田城ノ内遺跡

2005

財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター

（1）調査地全景（南東から）

（2）南辺堀ＳＤ05一括出土土師器皿

序　　文

長岡京市では「住みつづけたい　みどりと歴史のまち　長岡京」をめざして街づくりに取り組んでおります。

市内には古墳や城館跡などが、構造物として現在に残されている箇所もまだたくさんあります。その中の一つである「開田城跡」は、阪急長岡天神駅に近接する繁華街の中で、これまで多くの人たちによって守られてきた重要な遺跡です。

そこにマンション建設の計画が持ち上がり、関係者、研究者、市民を含めた話し合いの末、現存する土塁を保存し、公園として整備する等の対策が講じられるとともに、開田城の復原模型を作成し、広く市民に公開することとなりました。

発掘調査では、土塁の構築法や堀の規模、配置、城館内の施設などの開田城の構造はもとより、城館以前の長岡京跡や、開田城ノ内遺跡に関する調査を行い、多くの成果を挙げております。

当センターでは、これらの調査成果を周辺での成果と合わせることによって、開田城跡をはじめとする市街地内の遺跡の全容解明に向けて努力しているところです。

最後になりましたが、調査の実施・整理にあたり、ご指導、ご協力いただきました関係機関、関係者の方々に厚くお礼申し上げますとともに、今後もなお一層のご支援を賜りますよう、お願い申しあげます。

平成１７年６月

財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター

理事長　　芦　田　富　男

凡　　例

1．本書は、共同住宅建設にともなう長岡京市天神一丁目313－1・313－4での長岡京跡右京第790次調査（開田城跡第６次調査）の概要報告である。現地調査は、2003年10月６日から2004年２月13日まで実施した。調査面積は、約1393.7㎡になった。

2．調査は、長岡京市の指導のもとに、（財）長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は、同センター調査係総括主査岩ｃ誠が担当した。

3．調査の対象になった遺跡は、長岡京跡右京六条二坊十六町・六条三坊一町、開田城跡、開田城ノ内遺跡である。

4．長岡京跡の調査次数は、右京域と左京域に分けて調査件数を通算したものである。調査地区名は、基本的に前半は奈良文化財研究所による遺跡分類表示、後半は京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』（1977年）収録の旧大字小字名をもとにした地区割りに従った。

5．長岡京の条坊名称は、山中章「古代条坊論」『考古学研究』第38巻第４号の復原に従った。

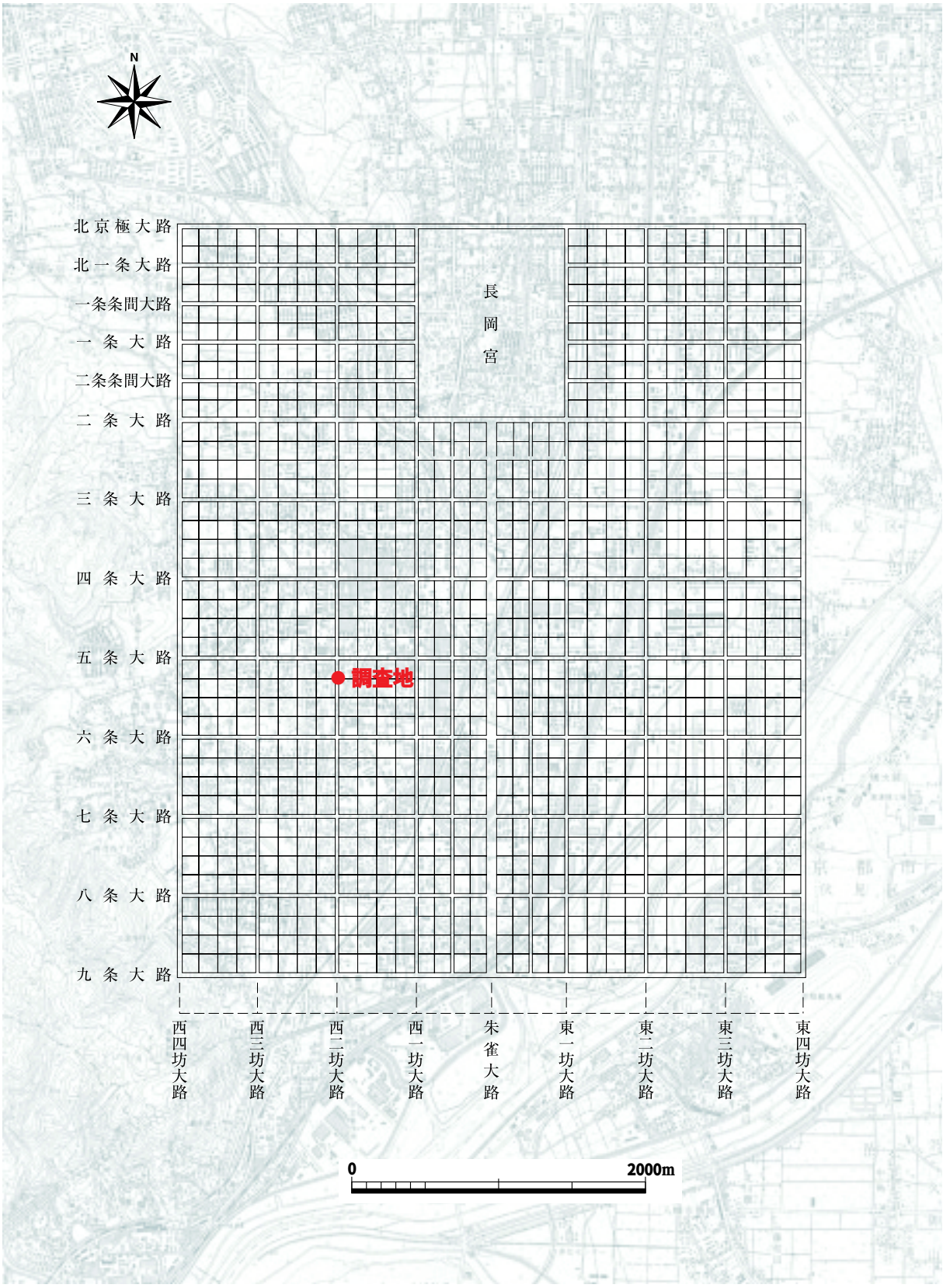
6．本文の（注）に示した長岡京に関する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第２集（1985年）に従って略記した。

7．本書挿図の土層の色名は、基本的に『新版標準土色帳』（1977年版）を参考にした。

8．現地調査において、空中写真測量およびレーザー測量を株式会社かんこうに依頼した。遺物写真は、（財）京都市埋蔵文化財研究所に撮影を依頼した。

9．本書は、岩ｃが執筆担当し、本書の編集は、岩ｃと調査係総括主査山本輝雄が行った。

＊表紙カット　大正11年から昭和40年頃の開田城跡鳥瞰図



第１図　長岡京と調査地の位置（1/40000）

本　文　目　次

序　　文 …… i
凡　　例 …… ii
第１章　はじめに …… 1
　1　調査経過 …… 1
　2　今までの開田城跡調査成果 …… 2
第２章　検出遺構 …… 4
　1　A調査区 …… 4
　2　B調査区 …… 5
　3　C調査区 …… 12
　4　D調査区 …… 15
　5　E調査区 …… 16
　6　F調査区 …… 20
　7　G調査区 …… 28
第３章　出土遺物 …… 35
　1　土器・瓦類 …… 35
　2　石器・石製品類 …… 49
　3　金属製品類 …… 53
第４章　ま　と　め …… 56
　1　開田城について …… 56
　2　長岡京跡について …… 59
　3　開田城ノ内遺跡について …… 59

図　版　目　次

巻頭図版（１）調査地全景（南東から）
（２）南辺堀ＳＤ05一括出土土師器皿

図版 １　（１）開田城調査全景（合成空中写真）
（２）調査地全景（南東から）
図版 ２　（１）Ａ調査区全景（南から）
（２）Ｂ調査区全景（北から）
図版 ３　（１）井戸ＳＥ09（北から）
（２）井戸ＳＥ09石組み（北西から）
図版 ４　（１）井戸ＳＥ09石造物出土状況（南東から）
（２）土坑ＳＫ18（北西から）
図版 ５　（１）焼土坑ＳＫ13－Ｂ焼土面（北から）
（２）焼土坑ＳＫ13－Ｂ貼り床面（北から）
図版 ６　（１）掘立柱建物ＳＢ62（東から）
（２）掘立柱建物ＳＢ64（北から）
図版 ７　（１）土坑ＳＫ12（北から）
（２）土坑ＳＫ12断面（東から）
図版 ８　（１）Ｃ調査区と南辺土塁ＳＡ67（南西から）
（２）南辺土塁ＳＡ67と南辺堀ＳＤ05断面（西から）
図版 ９　（１）南辺土塁ＳＡ67（南西から）
（２）南辺土塁ＳＡ67断面（北から）
図版 10　（１）Ｄ調査区と西辺土塁ＳＡ70南端（東から）
（２）Ｅ調査区全景（南西から）
図版 11　（１）Ｅ調査区全景（北東から）
（２）竪穴住居ＳＨ47（北から）
図版 12　（１）Ｄ・Ｆ調査区東半部（北東から）
（２）西辺土塁裾の溝ＳＤ122（北から）
図版 13　（１）西辺土塁ＳＡ70調査前全景（南東から）
（２）Ｄ・Ｆ調査区全景（南東から）
図版 14　（１）土坑ＳＫ73集石状況（南東から）
（２）Ｆ調査区全景（西から）
図版 15　（１）西辺土塁ＳＡ70調査前の残存状況（南から）
（２）西辺土塁ＳＡ70全景（南から）
図版 16　（１）西辺土塁ＳＡ70調査前の残存状況（南西から）
（２）西辺土塁ＳＡ70（南西から）

図版 17　（１）Ｆ調査区北端の西辺土塁ＳＡ70横断面（南から）
（２）Ｆ調査区北端の西辺堀ＳＤ43断面（南から）
図版 18　（１）Ｆ調査区北端の西辺土塁ＳＡ70と西辺堀ＳＤ43の断面（南から）
（２）西辺土塁ＳＡ70断ち割り状況と西半部横断面
図版 19　（１）西辺土塁ＳＡ70東半部横断面
（２）西辺土塁ＳＡ70縦断面
図版 20　（１）西辺土塁下層遺構（北から）
（２）西辺土塁中層遺構（１－北から、２－北から、３－南東から）
図版 21　（１）Ｇ調査区全景（東から）
（２）Ｇ調査区中層全景（南東から）
図版 22　Ｇ調査区下層完掘全景（南東から）
図版 23　（１）北辺堀ＳＤ161（北東から）
（２）西辺土塁ＳＡ70北端断面（北から）
図版 24　（１）南辺堀ＳＤ05出土土師器皿
（２）土坑ＳＫ48出土一括土器
図版 25　白磁皿、土師器小型壺、土師器皿
図版 26　瓦器鉢・椀、土師器椀・皿・杯
図版 27　須恵器、弥生土器
図版 28　（１）軒瓦、緑釉陶器
（２）金属器、石器類
図版 29　砥石・石造物

挿　図　目　次

第１図　長岡京と調査地の位置（1/40,000）…… iii
第２図　発掘調査地位置図（1/5000）…… 1
第３図　Ａ調査区平面図（1/200）…… 4
第４図　Ａ調査区周辺遺構図（1/250）…… 4
第５図　Ｂ調査区平面図（1/200）…… 5
第６図　Ｂ調査区土層図（1/100）…… 6
第７図　井戸ＳＥ09実測図（1/50）…… 7
第８図　土坑ＳＫ12実測図（1/50）…… 8
第９図　焼土坑ＳＫ13－Ｂ実測図（1/50）…… 8
第10図　掘立柱建物ＳＢ62実測図（1/100）…… 9
第11図　掘立柱建物ＳＢ64実測図（1/100）…… 10
第12図　Ｃ調査区平面図（1/200）…… 12
第13図　Ｃ調査区土層図（1/100）…… 13
第14図　南辺土塁断面図（1/100）…… 14
第15図　Ｄ調査区平面図（1/200）…… 15
第16図　Ｅ調査区平面図（1/200）…… 16
第17図　Ｅ調査区土層図（1/100）…… 17
第18図　土坑ＳＫ48実測図（1/20）…… 18
第19図　Ｆ調査区開田城期平面図（1/200）…… 21
第20図　西辺土塁ＳＡ70断面図（1/100）…… 23
第21図　Ｆ調査区遺構変遷図－１（1/400）…… 24
第22図　Ｆ調査区遺構変遷図－２（1/400）…… 25
第23図　掘立柱建物ＳＢ160（1/100）…… 26
第24図　柵ＳＡ168実測図（1/100）…… 27
第25図　柵ＳＡ159実測図（1/100）…… 27
第26図　Ｇ調査区の平面土層変化（1/200）…… 28
第27図　Ｇ調査区土層図（1/100）…… 29
第28図　Ｇ調査区土塁構築土以下の堆積（1/100）…… 30
第29図　Ｇ調査区と北辺土塁（1/250）…… 31
第30図　Ｇ調査区開田城期遺構図（1/200）…… 32
第31図　Ｇ調査区遺構変遷図（1/200）…… 33
第32図　開田城期前後の土器実測図（1/4）…… 36

第33図　平安～鎌倉時代の土器・瓦実測図（1/4）…… 39
第34図　西辺堀ＳＤ43出土土器実測図（1/4）…… 40
第35図　長岡京期前後の土器・瓦実測図（1/4）…… 43
第36図　飛鳥～奈良時代の土器実測図（1/4）…… 45
第37図　古墳時代の土器実測図（1/4）…… 47
第38図　弥生時代の土器実測図（1/4）…… 48
第39図　石器・石製品実測図（1/2）…… 50
第40図　石製品実測図（1/4）…… 51
第41図　石造物実測図（1/8）…… 52
第42図　金属製品実測図（1/2）…… 54
第43図　開田城の調査区配置図（1/1000）…… 58
第44図　西辺土塁調査前地形図（1/100）…… 61・62
第45図　Ｂ調査区検出遺構図（1/100）…… 63・64

付　表　目　次

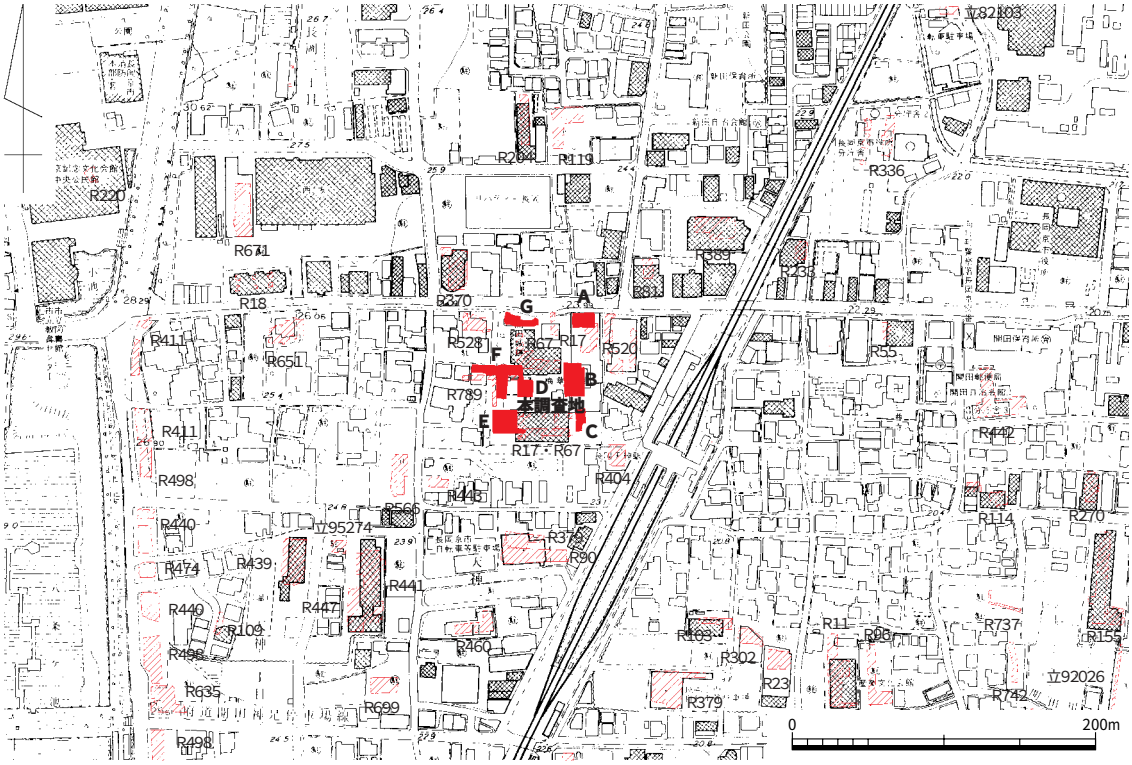
付表－１　報告書抄録 …… 58

第１章　は じ め に

１　調査経過

調査対象地は、阪急長岡天神駅の西約40mにある。調査前の地表面標高は、約25.5mで、低位段丘Ⅰ層に立地する。調査対象地のほぼ中央は、北緯34度55分22秒、東経135度41分41秒の経緯度にある。当調査対象地は、1946年７月段階では、南西部に数棟の家屋があるものの、大部分が鬱蒼とした竹林で、南西隣接地と南辺は水田であった。この景観が一変するのは、昭和後期の1978年からである。以後度重なる開発で、現状（第２図）に至った。

当調査対象地は、長岡京跡右京六条二坊十六町～三坊一町および西二坊大路（第１図）や、開田城跡の他、開田城ノ内遺跡の範囲内にある。また、条里地割りの復元では、六条長井里二十坪の大半を占める。特に開田城については、1965年頃まで、西辺と北辺および東辺北端、南辺東端に土塁が残存していた。北辺土塁は、幅約７m、高さ約2m、長さ約57mの残存状況で、西辺土塁から約３mの途切れがある。この途切れは、調査対象地の南西部に所在した宅地への進入路になっていた。なお、調査前に見られた北辺土塁東端から約20m位置の、幅約５mにわたる途切れは、1972年までに新設された出入り口である。西辺土塁は、幅約７m、最大高約２m、長さ約49mの残存状況で、残存北端部には、約３m四方の範囲で高さ約2.5mと一段高くなっていた。調査前まで、この高まりの南西部に、小さな祠が祀られていた。東辺土塁は、北端から約20mまで、



第２図　発掘調査地位置図（1/5000）

幅約７m、高さ約0.8mが残存していた。南辺土塁は、東端から約10mまで、幅約６m、高さ約1.6mの残存状況であった。このような土塁の遺存・配置関係から、開田城は、四周を堀と土塁で囲まれた約90m四方規模とされている。今回の調査対象地は、開田城館のほぼ全域である。

調査は、ＡからＧまでの７調査区を設定し、当初各調査区の合計約1140㎡として始めた。しかし、検出遺構の追求が必要になったため、関係組織と協議し、必要に応じて部分的な拡張を実施した。その結果、約1393.7㎡の調査になった（図版１）。現地調査は、2003年10月６日に着手した。調査の進行に伴い、開田城跡関係の成果を中心に、2004年１月８日に報道発表、10日に現地説明会を実施した。その後、開田城西辺土塁と下層遺構の調査を進め、２月13日に現地調査を終了した。遺構平面図や断面図などの詳細図は、基本的に国土座標第Ⅵ系を用いたＧＰＳ測量基準点をもとに、人手により実測した他、航空写真測量とレーザー測量を併用した。航空写真は、Ａ・Ｂ・Ｃ調査区を10月31日に、Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇ調査区を１月７日に撮影し、レーザー測量は西辺土塁の残存部について、11月５日に実施した。

２　今までの開田城跡調査成果

今回の調査対象地および近隣地域では、過去５回の調査が実施され、開田城跡をはじめとした調査成果が積み重ねられている。以下にその成果を顧み、当調査報告の糧としたい（第２図）。

（１）長岡京跡右京第17次調査[(注1)]（開田城跡第１次調査）

1978年12月から'79年２月まで実施。南辺部と、北東隅での調査。約212.3㎡。

南部の調査は、３m四方の坪掘り６箇所（１Ｇ～６Ｇ）の約54㎡と、幅約３mで南北長約11mの長方形の南西部に約1.5m四方の張り出しを設けた溝掘り調査区（８Ｇ）の約35.25㎡で、合計約89.3㎡。幅約９m、深さ約1.2mの南辺堀を検出。

北東隅の調査は、コの字形に配置された調査区（北から第Ⅰトレンチ約45.5㎡、第Ⅱトレンチ約37.4㎡、第Ⅲトレンチ約36㎡）の北西部に幅約１mの張り出し（第Ⅳトレンチ約４㎡）を設けた調査区で、合計約123㎡。北東隅の土塁屈曲部を検出。東辺土塁の城館内側で、土塁裾に設けられた掘立柱構造の柵と考えられる柱列を検出。土塁盛土下で、下層遺構を検出。

（２）長岡京跡右京第67・71次調査[(2)]（開田城跡第２次調査）

1981年２月から同年４月まで実施。年度をまたぐ調査のため、長岡京跡調査次数が２つある。調査は、南部（第１トレンチ）と、北部（第２トレンチ）、北辺中央部（第３トレンチ）の３箇所で実施。約451㎡（右京第17次調査重複面積含む）。

南部の第１トレンチ調査は、第１次調査の南部調査区に一部重なる位置で、逆７の字形に設定。約139.2㎡。南辺堀を再確認。調査区西部で、南に折れ曲がる可能性。南に延びる堀は、幅約４m、深さ約１mの規模。

北部の第２トレンチ調査は、開田城跡の南北中軸より西半部、東西中軸より北半部の位置に、Ｌ字形に近い形態に設定された約262.5㎡の調査区。溝や土坑・柱穴群などを検出。各遺構の時期は不明とはいえ、城館内施設に関わる遺構も含まれているものと想定。長岡京跡西二坊大路西

側溝や弥生時代後期の溝なども検出。

北辺中央部の第３トレンチ調査は、残存北辺土塁を横断する位置で、南北約14.5mの細長い、約50㎡の調査区。北辺土塁の構築状況を掌握するとともに、城館内の土塁裾には、幅約1.7m、深さ約0.5mの溝が設置されていた可能性。北辺土塁は、幅約6.2m、残存高約1.7mの規模と判明。土塁盛土下からは、鎌倉時代の遺構を検出。

（３）長岡京跡右京第520次調査[3]（開田城跡第３次調査）

1996年４月から同年７月まで実施。開田城の北東隣接地での調査。開田城の東隣接位置に２箇所の調査区（北調査区は第２トレンチ、南調査区は第３トレンチ）と、さらに東に１箇所の調査区（第１トレンチ）の３箇所で調査。約317㎡。

第１トレンチでは、南端部で東西方向の堀の北肩部分を検出。この堀より北に、柱穴を検出するが、時期不明。

第２トレンチでは、開田城北辺堀の東延長南肩と、東辺堀の東肩を検出。Ｔ字形に掘られていて、北辺堀が東に延びていくことが明確に。北辺東延長堀は、深さ約1.4m。東辺堀は、幅３m以上で、深さ約1.5m。

第３トレンチでは、第１トレンチ南端で検出された堀につながる東西方向の堀を検出。幅約５m、深さ約1.5m。この堀は、北辺堀南肩から南約３m間をおいて、北辺堀に平行する堀で、第２トレンチで検出された開田城東辺堀にＴ字形に取り付くのは確実。

この調査で、北東隣接地に堀で区画された外郭施設の存在が明らかになり、複郭構造の城館であったと考えるのが有力。また北辺堀に平行する堀の堆積に、堀の南側からの土塁崩落層と考えられる土層が見つかり、この北東部の堀で区画された施設の南に、さらに何らかの区画がある可能性も考えられる。

（４）長岡京跡右京第528次調査[4]（開田城跡第４次調査）

1996年６月から同年７月まで実施。開田城北西の隣接地における調査。約158㎡。西調査区と東調査区を設定。東調査区の一部を東に拡張し、開田城西辺堀西肩部と考えられる落ち込みを検出。これより西側には、奈良時代などの掘立柱建物などが検出されたが、開田城跡関係の遺構はなく、西外郭施設はなかった。

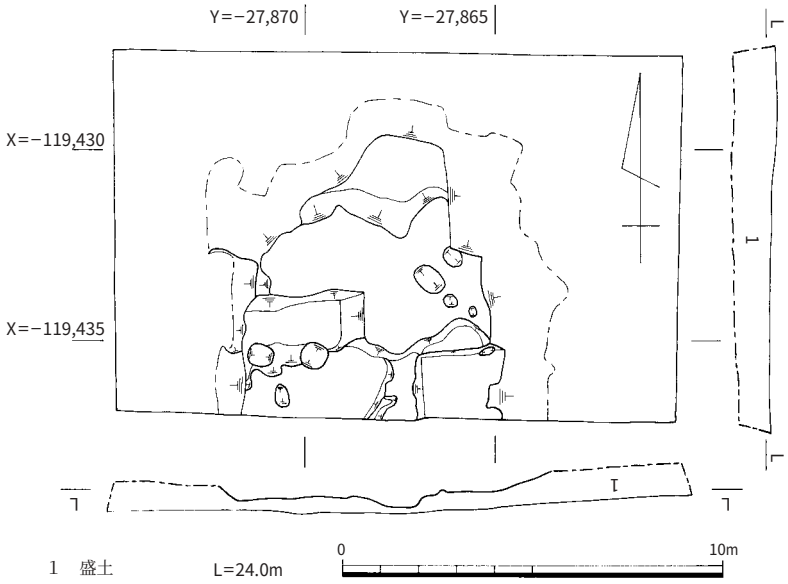
（５）長岡京跡右京第789次調査[5]（開田城跡第５次調査）

2003年10月～同年11月まで実施。開田城西辺中央部の調査で、Ｔ字形の調査区。約163㎡。西辺堀の規模は、幅約８m、深さ約1.2m。西辺堀は、残存する西辺土塁南端より南に延びていることも明確に。西辺土塁は、幅約6.5m、高さ約1.8m。西辺土塁の東裾（城館内側）に西辺土塁に平行する溝を検出。この溝は、幅約0.6m、深さ約0.3mで、右京第67次調査第３トレンチでの北辺土塁南裾で検出された溝に繋がる可能性。これにより、西辺土塁の規模を推定。西辺堀より西側での検出遺構に、開田城関連のものは無し。他に、鎌倉時代の井戸や柱穴、長岡京跡西二坊大路西側溝、古墳～奈良時代頃の掘立柱建物、弥生時代の竪穴住居などを重複して検出。

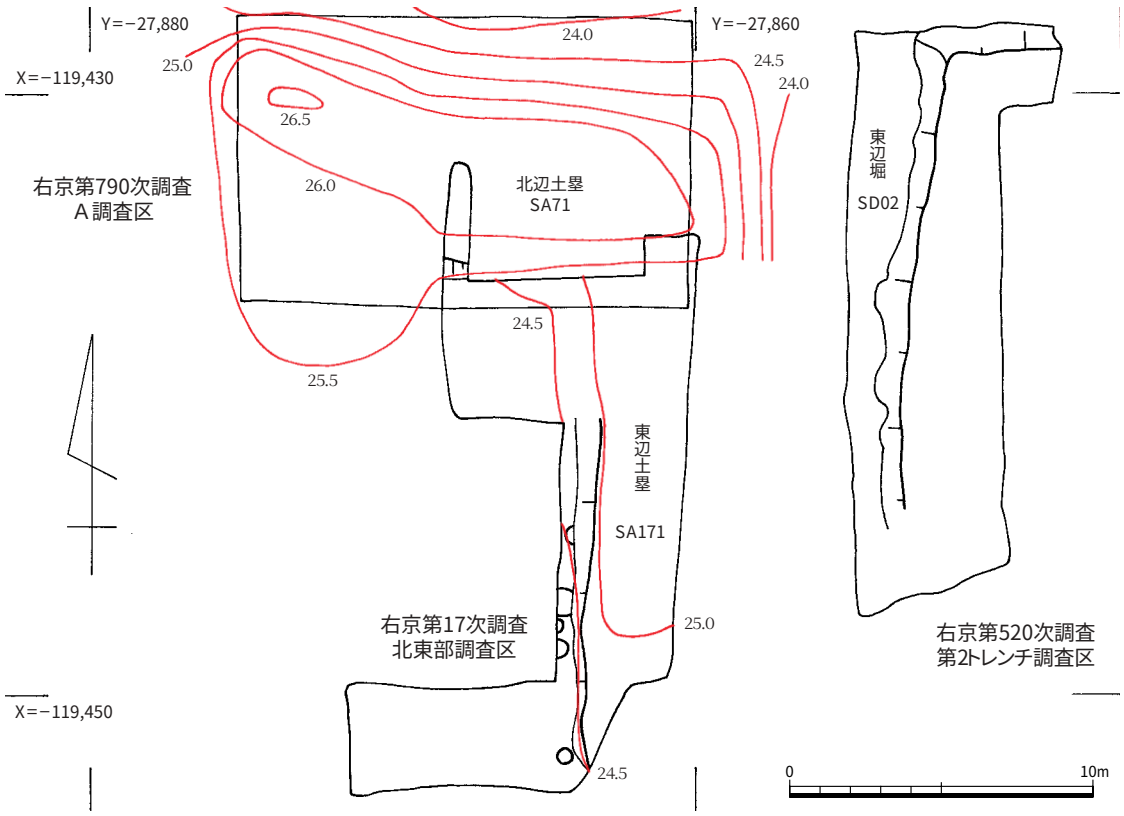
第２章　検　出　遺　構

１　Ａ調査区

当調査区は、対象地の北東隅に設定した。当調査区は、東西15m、南北9.6mの約144㎡で、2003年10月７日から11月６日まで実施した。当調査区は、開田城跡の北東隅に位置し、北辺土塁から東辺土塁への屈曲部である。今回の調査では、激しい撹乱を受け、遺構は検出できなかった（第３図、図版２(1)）。当調査位置と、長岡京跡右京第17・520次調査、および1979年まで遺存した北辺土塁ＳＡ71と東辺土塁ＳＡ171との位置関係は第４図に示した。



第３図　Ａ調査区平面図（1/200）



第４図　Ａ調査区周辺遺構図（1/250）

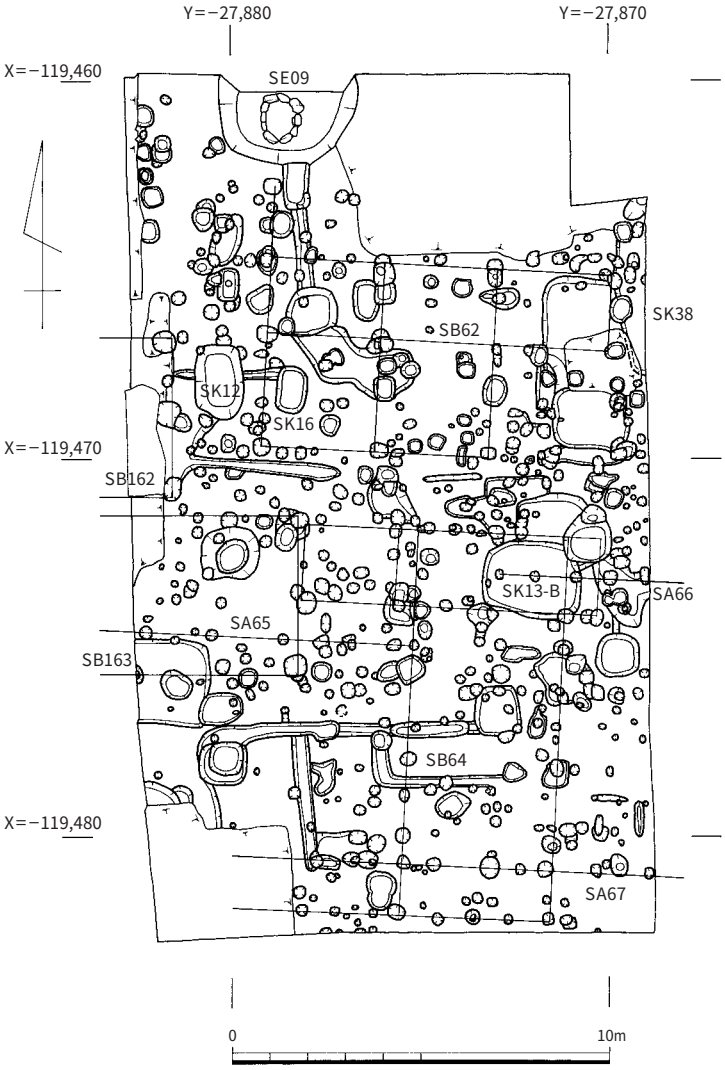
２　Ｂ調査区

当調査区は、開田城跡の東半中央部に設定した。調査は、当初東西12m、南北16mの調査区を設定し、2003年10月８日から着手した。調査の進行に伴い、調査区南辺の遺構群の規模や、東辺の特殊遺構などについて追求する必要が生じ、10月27日に、南に約７m、東に撹乱部を除いて約2m拡張した。その結果、合わせて304.9㎡の調査となった（第５図、図版２(2)）。調査は、2004年１月20日まで実施した。

（1）土層堆積状況

当調査区の遺構検出面は、平均標高約24.5mで、北東（約24.75m）から南西（約24.35m）にわずかな傾斜をもつ。調査時の地表面標高は、約25.3mを測る。

土層　土層は、遺構検出面から基本的に５層の堆積が見られた（第６図）。その間に、部分的に薄い堆積が見られた。遺構検出面を覆う褐灰色シルト層は、厚さ約10～20㎝で、江戸時代の遺物を含む。この層は柔らかく、畑作耕土と考えられる。この上には、厚さ約10～20㎝の明黄褐色砂礫（シルト混じり）層が被る。遺物は出土しなかったが、1889年から1936年の地図に見られる竹藪の客土と考えられる。またこの層は、遺構検出面を構成する段丘礫層およびそれを覆うシルト層の混じりと思われ、開田城を囲む土塁盛土を崩して敷かれたものと考えられる。この層の上には、厚さ10㎝程度の黄褐色シルト層が部分的に見られた。この層も、基本的に直下の堆積層と同様の起因による堆積と考えられる。この上の堆積は、厚さ約15～20㎝の暗灰黄色シルト層で、部分的に厚さ約10㎝程度の黒褐色シルト層が被る。この上には、厚さ30㎝程度の厚い粘質土層が覆う。この層は、黄褐色・黒褐色・浅黄色の薄い粘質土が、重層している。これらも、竹藪客土と考えられる。さらに



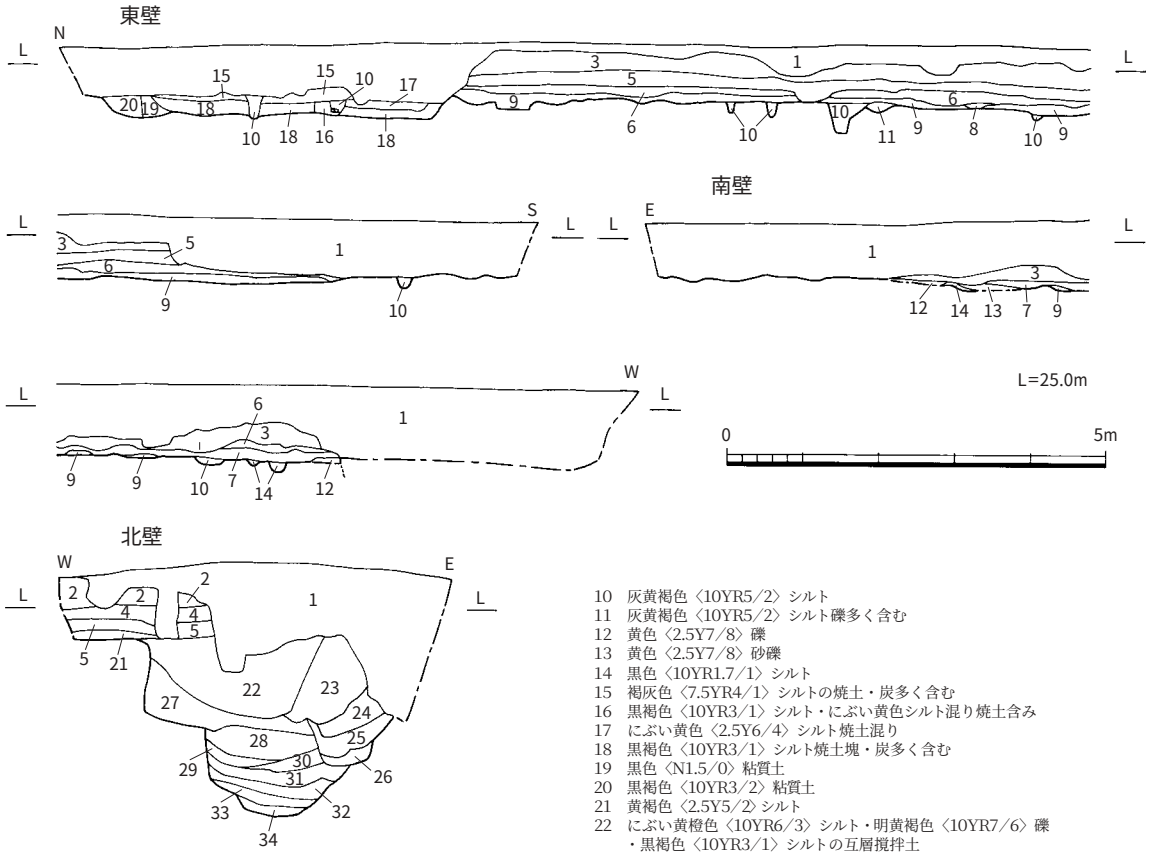
第５図　Ｂ調査区平面図（1/200）

上には、厚さ約10～20㎝の灰黄色シルト層２層が乗る。この２層は、1959年の航空写真に見られる畑作耕土と考えられる。これより上は、調査前の既存施設解体後の整地層で覆われていた。

（２）検出遺構

検出遺構には、井戸や土坑の他数多くの柱穴があり（第５図、図版２(2)）、柱穴群には掘立柱建物や柵として捉えられる配置関係にあるものもある。

井戸ＳＥ09　直径約3.8mの円形井戸で、深さ約2.5mを測る（第７図、図版３(1)～４(1)）。井戸側は石組み構造で、掘形の南寄りに検出した。石組みは、1～２段の残存状況で、自然石の他、花崗岩や凝灰岩の石造物も組み込まれていた。石組みには、チャートが多く用いられ、砂岩や粘板岩も使われていた。井戸側は、南北約１m、東西約0.7mの楕円形平面であったが、土圧による変形と思われ、本来は直径約0.8m前後と考えられる。また、井戸側抜き取り坑により、平面形が一回り大きくなっており、石組み以下の掘形形状から、本来は直径２m前後の円形掘形であったと思われる。井戸内埋土は、基本的に掘形内の埋め土、石組み内堆積、井戸側抜き取り坑内の埋め土の３層に分けられる。掘形の埋め土は、下から５層目までを確認できたが、これより上

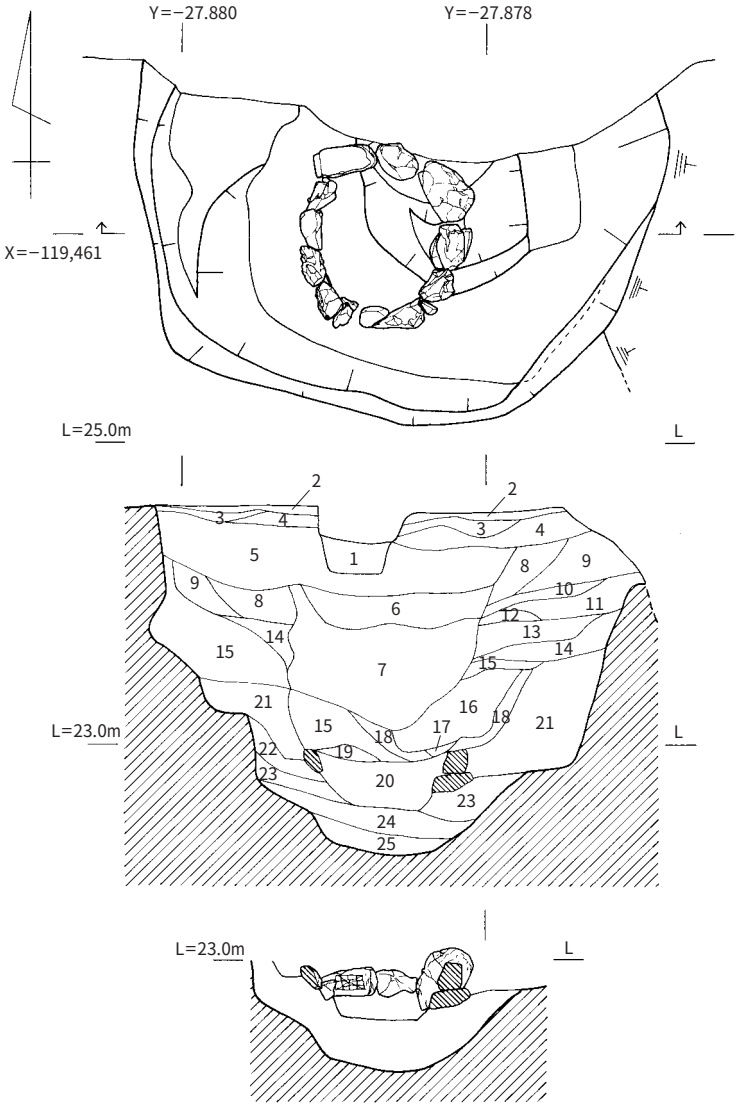


1　盛土・撹乱
2　灰黄色〈2.5Y6／1〉シルト
3　黄橙色〈10YR7／8〉粘質土・黒褐色〈7.5YR3／2〉粘質土・浅黄色〈2.5Y7／4〉粘質土の重層
4　黒褐色〈10YR3／2〉シルト
5　暗灰黄色〈2.5Y4／2〉シルト
6　明黄褐色〈2.5Y7／6〉砂礫シルト混り
7　褐色〈10YR4／4〉シルト礫混り
8　褐灰色〈7.5YR4／1〉シルト・明黄褐色〈2.5Y7／6〉砂礫シルト混り
9　褐灰色〈7YR4／1〉シルト
10　灰黄褐色〈10YR5／2〉シルト
11　灰黄褐色〈10YR5／2〉シルト礫多く含む
12　黄色〈2.5Y7／8〉礫
13　黄色〈2.5Y7／8〉砂礫
14　黒色〈10YR1.7／1〉シルト
15　褐灰色〈7.5YR4／1〉シルトの焼土・炭多く含む
16　黒褐色〈10YR3／1〉シルト・にぶい黄色シルト混り焼土含み
17　にぶい黄色〈2.5Y6／4〉シルト焼土混り
18　黒褐色〈10YR3／1〉シルト焼土塊・炭多く含む
19　黒色〈N1.5／0〉粘質土
20　黒褐色〈10YR3／2〉粘質土
21　黄褐色〈2.5Y5／2〉シルト
22　にぶい黄橙色〈10YR6／3〉シルト・明黄褐色〈10YR7／6〉礫・黒褐色〈10YR3／1〉シルトの互層撹拌土
23　褐灰色〈5YR5／1〉シルト・明黄褐色〈10YR7／6〉シルトの互層礫含み
24　褐灰色〈10YR5／1〉シルト
25　褐灰色〈10YR6／1〉礫
26　浅黄色〈2.5Y7／4〉粗砂礫含み
27　灰黄褐色〈10YR5／2〉砂礫
28　明赤褐色〈5YR5／8〉砂礫・明オリーブ灰色〈2.5GY6／1〉砂礫
29　黒褐色〈7.5YR3／1〉砂礫
30　灰白色〈5GY8／1〉砂礫
31　明緑灰色〈10GY8／1〉砂礫
32　橙色〈7.5YR6／6〉砂礫
33　明青灰色〈10BG7／1〉砂礫
34　明赤褐色〈5YR5／8〉砂礫

第６図　B調査区土層図（1/100）

は、井戸側抜き取り坑により削平されていた。そのうち、最も上層の褐灰色砂礫層は、最大の厚さが約70㎝と厚い。以下の４層は、石組み最下段以下に置かれたもので、10～30㎝と薄い。井戸側内堆積は、褐灰色砂礫の１層であった。井戸側抜き取り坑は、断面観察で３回にわたって掘られたと考えられる。最初は北西部を主に、次に南部を主に、最後に北東部を主に抜き取られたと考えられる。各坑内堆積を比較すると、最後の坑を埋め戻した土層が、最も厚い数層からなっており、他の坑内の埋め土は、5～10㎝前後の薄い埋め土を数層挟む特徴をもつ。出土遺物は微量であったが、15世紀末から16世紀前半と考えられ、開田城の時期に機能していたと思われる。

土坑ＳＫ12　土坑ＳＫ12は、東西幅約1.3m、南北長約2mの長方形掘形で、深さ約0.9mの深い掘り込みである（第８図、図版７(1)・(2)）。底は、ほぼ水平な平坦面である。埋土は３層ある。最下層は、灰黄褐色砂で、厚さ約10㎝と薄い。中層は、四周に厚さ約10㎝の堆積が見られるもので、最下層より粒子の粗い砂層である。上層は厚さ約70



1　灰黄褐色〈10YR5/2〉シルト・アスファルト混り
2　浅黄橙色〈7.5YR8/3〉シルト・黒褐色粘質土混り
3　黄橙色〈10YR8/6〉灰黄褐色シルト混り
4　黒色〈10YR2/1〉粘質土・黄橙色シルト混り
5　にぶい黄橙色〈10YR6/3〉シルト・明黄褐色〈10YR7/6〉礫・黒褐色〈10YR3/1〉シルトの互層撹拌土
6　灰黄褐色〈10YR5/2〉砂礫
7　明赤褐色〈5YR5/8〉砂礫・明オリーブ灰色〈2.5GY6/1〉砂礫
8　褐灰色〈7.5YR5/1〉シルト
9　にぶい黄橙色〈10YR6/4〉砂礫
10　灰褐色〈5YR6/2〉シルト
11　にぶい黄褐色〈10YR5/3〉粗砂
12　灰色〈10Y5/2〉粘質シルト
13　にぶい褐色〈7.5YR6/3〉粗砂
14　灰色〈10Y5/1〉粘質シルト
15　淡黒褐色〈7.5YR3/2〉砂礫
16　黒褐色〈7.5YR3/2〉砂礫
17　にぶい黄褐色〈10YR5/3〉礫
18　灰色〈10Y5/1〉粘質土
19　暗青灰色〈5B4/1〉粘土
20　褐灰色〈7.5YR5/1〉砂礫・シルト混り
21　褐灰色〈7.5YR4/1〉砂礫
22　明緑灰色〈10GY8/1〉砂礫
23　橙色〈7.5YR6/6〉砂礫
24　明青灰色〈10BG7/1〉砂礫
25　明赤褐色〈5YR5/8〉砂礫

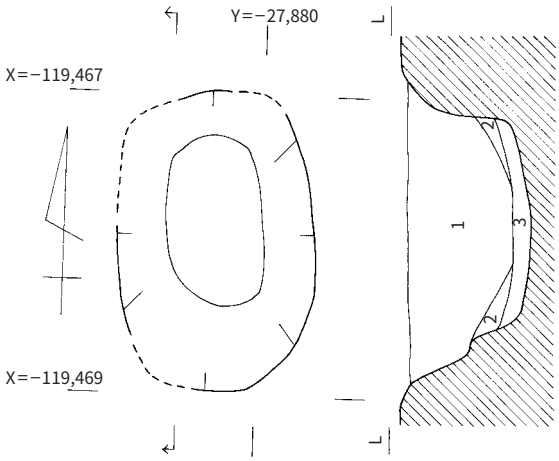
0　3m

第７図　井戸ＳＥ09実測図（1/50）

cmの厚い灰黄褐色土で、当土坑の機能が停止した後に埋め戻された土層と考えられる。出土遺物がほとんど無く、時期確定はできなかった。

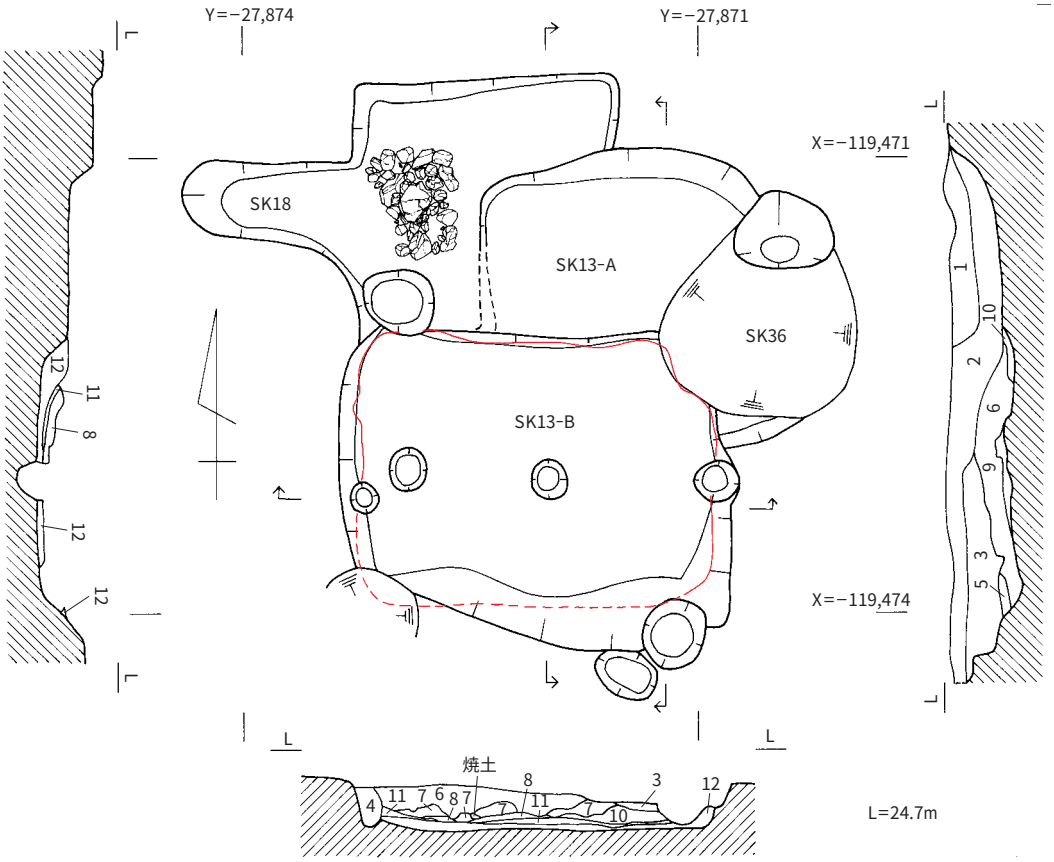
土坑ＳＫ16　土坑ＳＫ16は、土坑ＳＫ12の東約0.9mの位置に並んで検出した掘り込みである。規模は、東西幅約0.8m、南北長約1.2mの長方形掘形で、深さは、約0.25mを測る。形態は、土坑ＳＫ12を規模縮小したものに酷似する。この２基の土坑は、形態や位置関係から、互いに関係し合う機能があったものと考えられる。

焼土坑ＳＫ13－Ｂ　南北幅約２m、東西長約2.6m、深さ約0.3mの長方形掘形をもつ掘り込みである（第９図、図版５(1)・(2)）。北東部の一部は、隣接して検出した深さ約0.5mの円形土



1　灰黄褐色〈10YR4/2〉砂混り土　3　灰黄褐色〈10YR5/2〉砂
2　灰黄褐色〈10YR4/2〉粗砂

第８図　土坑ＳＫ12実測図（1/50）

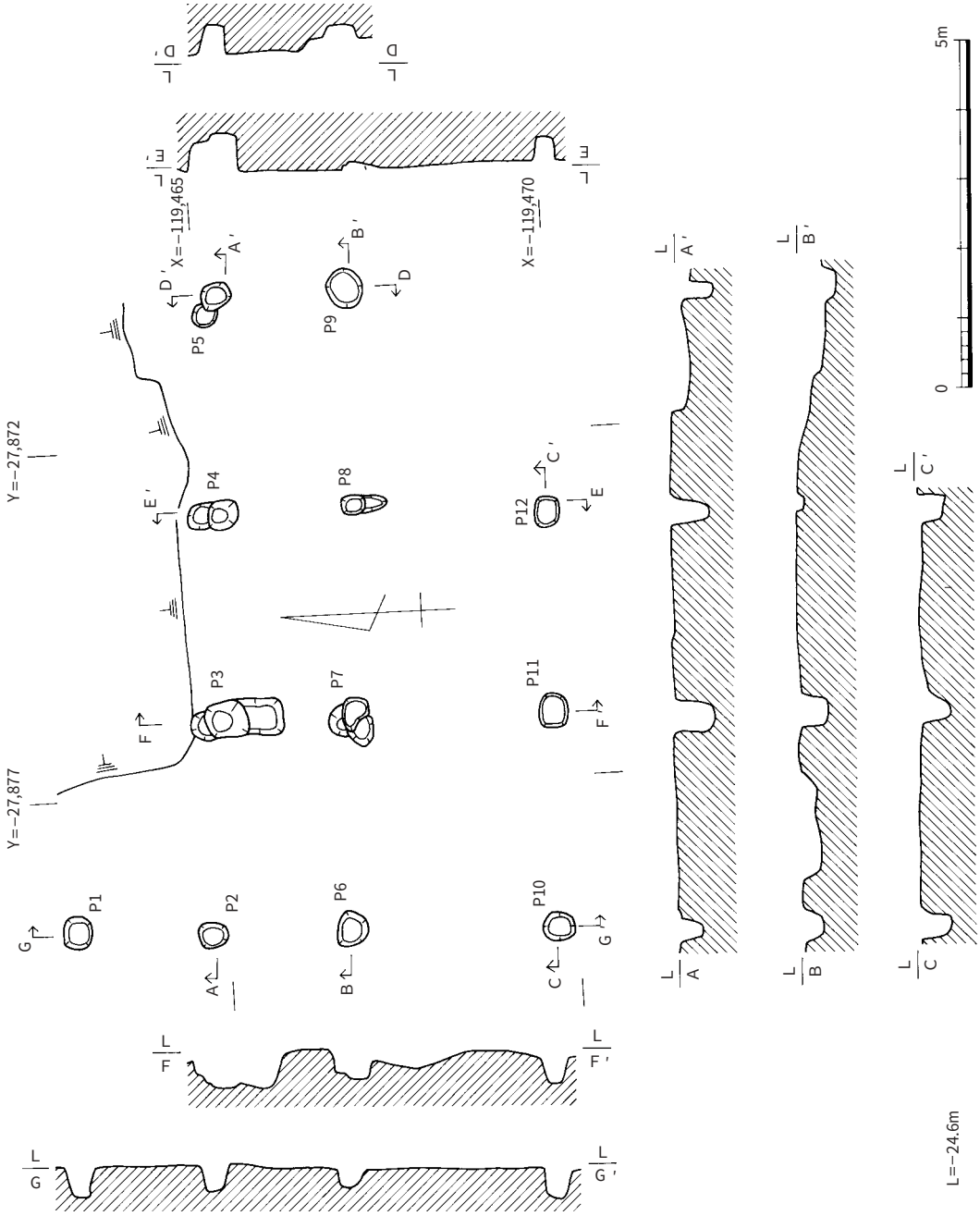


1　暗灰黄色〈2.5Y4/2〉シルト
2　褐色〈10YR4/4〉シルト礫混り
3　灰黄色〈5Y6/2〉粗砂
4　暗灰黄色〈2.5Y5/2〉シルト淡黄色シルト焼土混り
5　黒褐色〈10YR3/1〉シルト
6　黒褐色〈10YR3/1〉シルト赤橙色焼土黒色炭混り
7　にぶい黄色〈2.5Y6/4〉シルト
8　暗赤褐色〈2.5YR3/2〉焼土
9　暗赤褐色〈2.5YR3/2〉焼土混り　黒褐色〈10YR3/1〉シルト含み
10　赤橙色焼土
11　黒色〈N1.5/0〉炭
12　にぶい黄橙色〈10YR6/3〉シルト小石含み

0　3m

第９図　焼土坑ＳＫ13－Ｂ実測図（1/50）

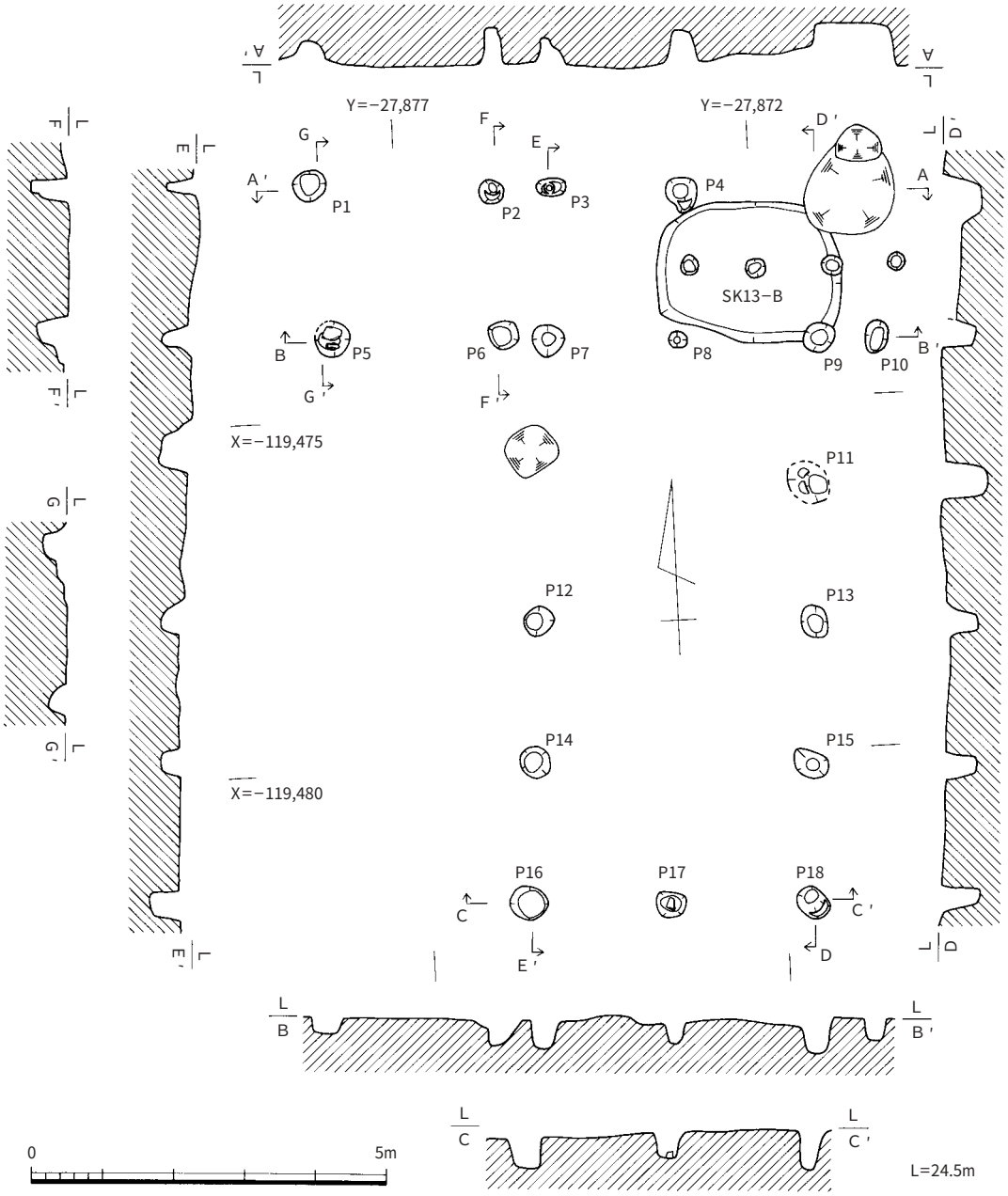
坑ＳＫ36に撹乱され、北辺部は、上面を深さ約0.2mの浅い土坑ＳＫ13－Ａに削られている。土坑ＳＫ13－Ａの北西隅には、拳大以上の石を並べ敷かれていた（図版４(2)）。またこの浅い土坑の西辺から、溝状に西に張り出す深さ約0.1mの土坑ＳＫ18が取り付く（図版４(2)）。土坑ＳＫ18の西端近くからは、土師器皿の完形品が１点出土した。焼土坑ＳＫ13－Ｂ内には、にぶい黄橙色シルトが全体に薄く貼られていた。この層は、土坑底面での厚さは２㎝から５㎝で、縁辺部で厚さを増し、側面（周縁部）では約20㎝の厚さになっていた。この層は、本来白の強い色調の粘質シルトであったと思われ、熱を受けて橙色化し、硬く締まっていた。このように、黄橙色シルトを化粧土状に貼られた土坑内には、６層の堆積が見られた。最下層は、底面に薄く堆積した黒色の炭・灰層である。約２㎝の厚さであった。その上には、熱を受けて、暗赤褐色や赤橙色に変色



第10図　掘立柱建物ＳＢ62実測図（1/100）

した焼け土が面をなして覆っていた。その上には、にぶい黄色シルトや灰黄色粗砂が部分的に堆積していた。最上層は、須佐入りの焼け土塊がぎっしりと入った黒褐色シルトの炭混じり層で、最大約20㎝の厚さで埋め尽くされていた。出土遺物は、小片が僅かしかなかったが、土師器皿の小片から、15世紀末から16世紀前半と判断した。従って、開田城の時期と考えている。須佐入りの焼け土塊をカマド壁とすれば、掘立柱建物ＳＢ64に絡む屋内設置カマドと考えられる。カマドの機能は、煮炊用と風呂の２説が想起できるが、両者とも根拠を欠く。ここでは、一般的な煮炊用カマドの可能性を支持したい。

掘立柱建物ＳＢ62　井戸ＳＥ09の南で検出した掘立柱建物で、南北３間、東西３間分を確認した（第10図、図版６(1)）。建物の南北軸は、北で東に約３度の振れ角をもつ。柱間は、北から２



第11図　掘立柱建物ＳＢ64実測図（1/100）

間分は約２m等間で配置され、南１間と東西方向の柱間は約３m等間になっている。北東部は、深い撹乱抗で削平されていた。北西端柱穴は、井戸ＳＥ09掘形から約0.4mと近い位置にある。

掘立柱建物ＳＢ64　掘立柱建物ＳＢ62の約２m南で検出した（第11図、図版６(2)）。南北５間、東西２間の南北棟である。柱間は、梁・桁とも約２m等間である。棟方向は、北で東に約３度の振れ角をもつ。この建物の北１間には、間柱が設置されている。この間柱で区割りされた北東隅の１間四方の中には、焼土坑ＳＫ13－Ｂが設置されている。またこの建物の北１間分は、西に約３m、東に約１mの張り出しがあった可能性がある。その内の西への張り出し部には、西辺柱列から約0.6mの位置に間柱がおかれている。東への張り出しは、焼土坑ＳＫ13－Ｂに伴う庇の可能性がある。当建物の母屋西辺を北に延長すると、掘立柱建物ＳＢ62の西から２列目の南北柱列から東約１mの位置になり、当建物の東辺北延長は、掘立柱建物ＳＢ62東辺の西約１mの位置になる。この配置関係から、両建物が、計画的に配置された同時期併存の施設であると考えられる。

柵ＳＡ65　東西４間分を検出した柱列である。東端は、掘立柱建物ＳＢ64の西辺で、その北端から南約３m位置（北端から1.5間の位置）にある。柱間は、約1.8m等間になっている。方向は、西で北に約３度振れている。

柵ＳＡ66　焼土坑ＳＫ13－Ｂから東に延びる柱列で、４間分を検出した。土坑と重なり合う柱穴は、土坑を掘り込んでおり、この柵の方が新しい。柱間は約１m等間で、西で北に約３度の振れ角をもつ。

柵ＳＡ67　掘立柱建物ＳＢ64の南部に直行する柱列である。柱穴に重なりがないため、前後関係は明確でない。柱間は、約1.5m等間で、５間分検出した。柱列の向きは、西で北に約３度振れている。

土坑ＳＫ38　Ｂ調査区北東部で検出した落ち込みで、深さ約30cmある。南北約４mの西肩を検出したが、東は調査区外に広がり、規模は明らかでない。埋土には焼け土が多く含まれていたが、焼土坑のような化粧土状の貼り土はなかった。開田城館内の諸施設解体に伴うものかと考えられる。

掘立柱建物ＳＢ162・163　国土座標にそった東西棟２棟である。柱間は、約2.1m等間である。柱穴埋土は黒色粘質土で、色調や土質が他の中世遺構と異なる。両建物間は狭く、同時期併存とは捉えにくい。出土遺物が無く、時期の確定はできないが、柱筋が国土座標方向であることから、長岡京期の建物跡と考えられる。右京六条二坊十六町宅地内の二時期にわたる施設と考えられる。

その他の遺構　これらの他、江戸時代の溝群（ＳＤ10・11・19・29・30・31など）や円形または隅円方形の土坑群（ＳＫ24・25・34・36・37など）、鎌倉時代の柱穴群（多くは直径50cm前後以下の円形柱穴）などがある。また一辺1.5mを超える長方形土坑（ＳＫ13－Ａ・14Ａ・14Ｂ・15・33など）は、柱穴群や焼土坑より新しいが、江戸時代までは降らない段階に位置付けられる。開田城期の所産かどうかは明らかでないが、後出と考えておきたい。当調査区北西隅で検出した一辺50cm前後の隅円方形掘形を持つ柱穴群（Ｐ140・141・147など）は、黒色粘質土を埋土としており、長岡京期以前のものが含まれている可能性がある。

3　C調査区

当調査区は、開田城跡の南東部に設定した。調査区は、当初東西幅約5.4m、南北長約16mを設定して、2003年10月８日から実施した。調査の進行に伴い、南辺堀と現存する南辺土塁の関係を調査する必要が生じ、10月27日に、調査区東辺の一部を拡張した。その結果、合わせて約88.2㎡の調査となった（第12図、図版８(1)・(2)）。調査は、10月31日まで実施した。

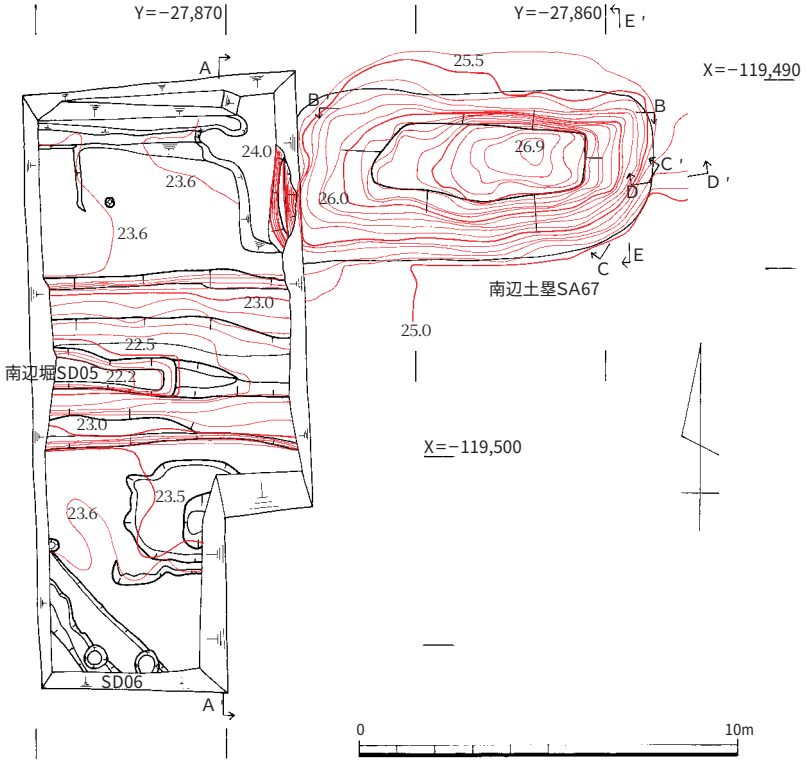
（１）土層堆積状況

当調査区の遺構検出標高は、約23.6mで、調査時の地表面標高は約25.2mであった。当調査区の遺構検出面は、Ｂ調査区の遺構検出面標高と比較すれば、約１m低い。

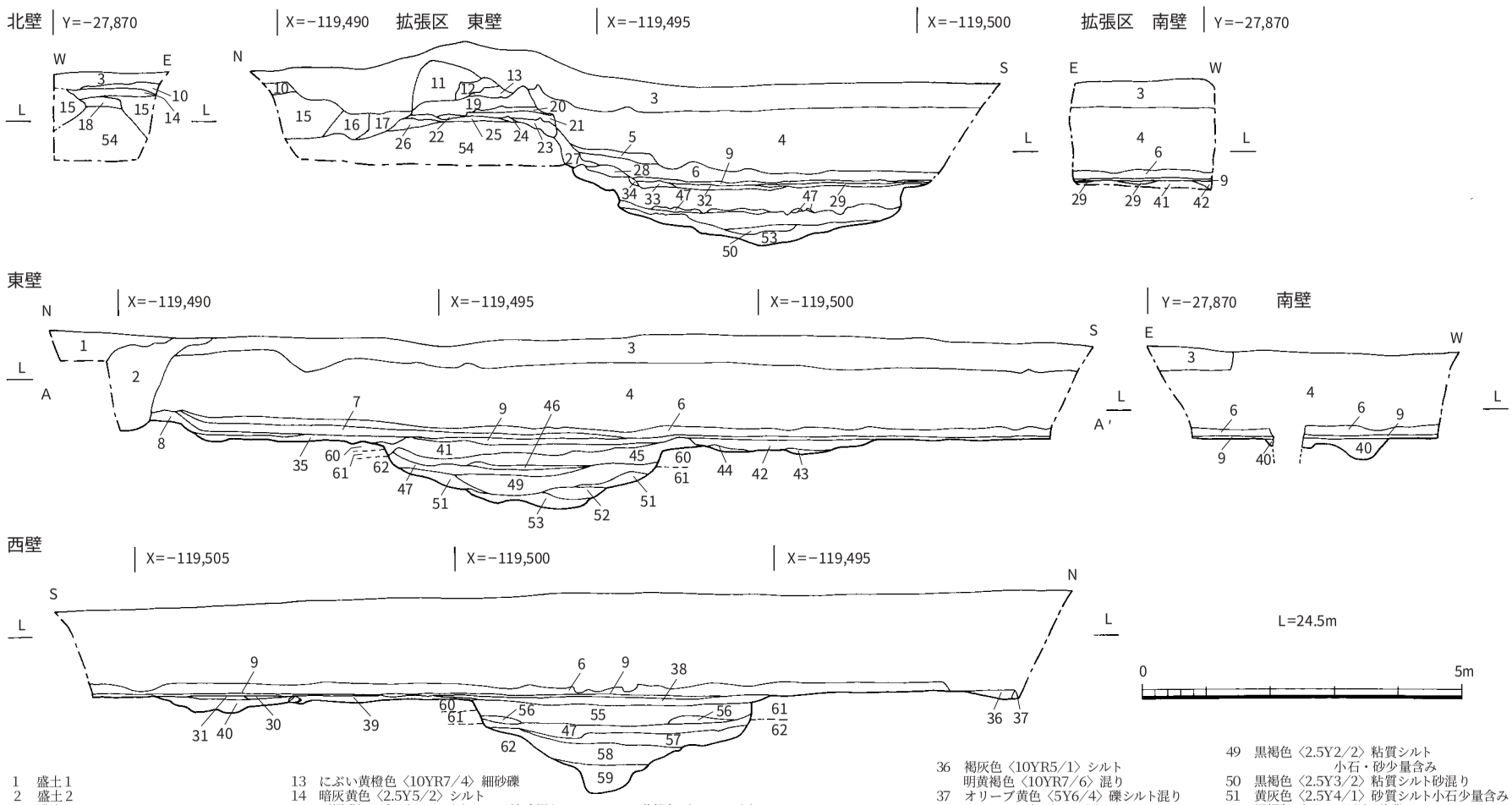
土層　当調査区の土層は、大きく分けて、現代造成盛土、水田関連堆積土、土塁盛土、土塁下の旧表土、遺構埋土に区分できる（第13図）。地表面を構成する盛土は、基本的に２層あり、上層（第３層）は調査前の整地層、下層（第４層）は1979年の造成土である。その下には第４層を造成する前の水田耕作土（第６～８層）がある。この水田は、明治以前の開墾によるもので、開田城南辺土塁を段丘礫層ごと削り下げて開削している。水田耕土下には、薄い層の堆積（第９・29・38層）があり、これらを除去した段階で、遺構が検出できた。各遺構の土層は、第13図をもとに、遺構ごとに記す。

（２）検出遺構

南辺堀ＳＤ05　南北幅約4.5m、深さ約0.8mの規模で、西に向かって深くなる。検出範囲のほぼ中央部で、幅約１m、深さ約0.5mの溝状に深くなり、この深まりは、西に幅を増す。その結果、調査区西端の堀の深さは、約1.4mを測る。埋土は、大きく３層に分けられる。上層（第41・45・55層）からは、江戸時代の遺物が出土した。上層としたこれら３層は、いずれも撹拌された土層で、人工的な埋め土と考えられる。中層は、第46～51・56層で、主に粘質のあるシルト堆積であった。下層堆積は、第52・53・57・58層の砂



第12図　C調査区平面図（1/200）



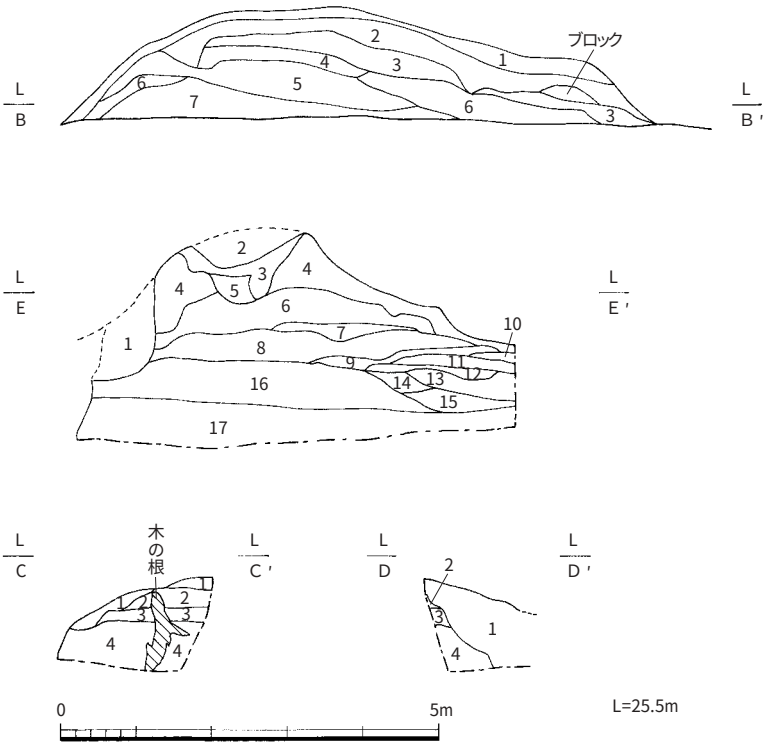
1　盛土１
2　盛土２
3　盛土３
4　盛土４
5　黒色〈7.5Y2/1〉シルト（旧耕土）
6　旧耕土１青黒色〈5B2/1〉シルト
　　灰色〈N4/0〉シルト
7　旧耕土２灰色〈N4/0〉シルト小石含み
8　旧耕土３灰色〈N5/0〉シルト
9　暗オリーブ色〈5Y4/4〉シルト
10　にぶい橙色〈7.5Y6/4〉シルト
　　黄橙色〈10YR7/8〉シルト混り
11　（撹乱）褐灰色〈7.5Y4/1〉砂礫
12　にぶい黄橙色〈10YR7/4〉砂礫
13　にぶい黄橙色〈10YR7/4〉細砂礫
14　暗灰黄色〈2.5Y5/2〉シルト
15　（撹乱）灰色〈7.5Y4/1〉シルト漆喰混り
16　（撹乱）オリーブ黒色〈5GY2/1〉
　　黒褐色〈7.5YR3/2〉シルト
17　（撹乱）暗青灰色〈5B4/1〉シルト
18　褐灰色〈7.5YR4/1〉シルト
19　にぶい黄橙色〈10YR6/4〉シルト礫多く含む
20　明黄褐色〈10YR7/6〉シルト
　　暗褐色〈10YR3/4〉シルト混り
21　暗褐色〈10YR3/4〉シルト
22　明褐色〈7.5Y5/6〉シルト
23　淡黄色〈7.5Y8/3〉シルト石含み
24　明黄褐色〈10YR7/6〉砂礫
25　黄橙色〈10YR7/8〉シルト
26　黄色〈2.5Y8/8〉砂質シルト
27　オリーブ黒色〈5Y3/1〉シルト
28　褐灰色〈10YR5/1〉シルト礫含み
29　黄褐色〈2.5Y5/3〉シルト
30　灰オリーブ色砂〈5Y6/2〉シルト混り
31　灰色細砂礫〈5Y6/1〉シルト
32　暗灰黄色〈2.5Y4/2〉シルト礫混り
33　暗灰黄色〈2.5Y5/2〉シルト
34　灰黄色〈2.5Y6/2〉シルト礫含み
35　灰色〈N5/0〉シルト黄色〈2.5Y8/6〉シルト
　　オリーブ黄色〈7.5Y6/3〉シルト混り
36　褐灰色〈10YR5/1〉シルト
　　明黄褐色〈10YR7/6〉混り
37　オリーブ黄色〈5Y6/4〉礫シルト混り
38　灰オリーブ色〈5Y5/2〉シルト
39　褐灰色〈10YR5/1〉シルト
　　明黄褐色〈10YR7/6〉混り
40　褐灰色〈10YR5/1〉砂シルト混り
41　褐灰色〈10YR4/1〉シルト礫含み
42　オリーブ黒色〈10Y3/2〉砂礫
43　浅黄色〈5Y7/4〉細砂
44　暗灰黄色〈2.5Y5/2〉シルト
45　オリーブ黒色〈7.5Y3/2〉シルト礫含み
46　黒褐色〈2.5Y3/2〉シルト細礫少量含み
47　灰色〈5Y5/1〉粘質シルト
48　黒褐色〈2.5Y3/2〉粘質シルト
49　黒褐色〈2.5Y2/2〉粘質シルト
　　小石・砂少量含み
50　黒褐色〈2.5Y3/2〉粘質シルト砂混り
51　黄灰色〈2.5Y4/1〉砂質シルト小石少量含み
52　黒褐色〈10YR3/1〉砂礫
53　褐灰色〈10YR4/1〉砂礫シルト含み
54　黄色〈5Y7/8〉礫
55　褐灰色〈7.5YR4/1〉明黄褐色シルト混り
56　黄灰色〈2.5Y4/1〉シルト
57　黄灰色〈2.5Y5/1〉砂
　　シルト礫含み
58　灰色〈5Y5/1〉砂礫
59　灰色〈7.5Y4/1〉粘土砂シルトラミナ
60　明黄褐色〈2.5Y6/8〉シルト（地山）
61　黄色〈5Y7/8〉礫（地山）
62　明青灰色〈5B7/1〉砂（地山）

第13図　C調査区土層図（1/100）

礫または砂層で、流水の影響が見られる。また西半部に見られた溝状の深まりには、粘土・砂・シルトがラミナ状に堆積し、緩やかな流れと澱んだ状態が繰り返された状況がうかがえる。また調査区東壁付近では、上層堆積上に南辺土塁からの崩落土（第27・28・32～34層）が、堀の北肩に堆積していた。

南辺土塁ＳＡ67　当土塁は、南北幅約５m、東西長約9mの残存状況で、北斜面は1981年に削平を受けている（図版９(1)・(2)）。また東端斜面は、今回の開発で基底部を削平された。これらの削平に伴う調査の記録は、第14図に示した。この図と、Ｃ調査区東断面にかかった残存土塁西端部土層との比較から、この土塁構築以前の旧地表面が、標高約24.8mで、Ｂ調査区の遺構検出面より高いことが明らかになった。従って、多くの遺構を検出したＢ調査区でさえ、かなり削平を受けていると言え、Ｃ調査区においては、１m以上の削平を受けていると察せられる。旧地表面を構成する土層は、厚さ約10～20cmの第13図第21層と、第14図第８層である。この層より上には、段丘礫の黄色系礫層を盛って、土塁を構築している。構築状況は、土塁西端では、南の堀側に厚く、北の城館内側に薄く、北に降る傾斜をもたせて積まれている様子がうかがえる。また土塁北斜面の削平に伴う断面観察では、東辺堀側に厚く、西に傾斜している状況がうかがえる。この残存土塁が、ちょうど東辺土塁と西辺土塁のコーナー部分にあたることと、良く合致する。堀を掘削した段丘礫を、城館内側に掘り上げ、それを城館内側に引きのばしては積み上げる行程が察せられる。南辺土塁西端は、Ｃ調査区内で階段状に途切れていた。これは、水田開墾による削平に起因してる。

その他の遺構　他に、溝や土坑、柱穴などを検出した。いずれも、開田城期より古い。



Ｂ断面
1　表土（黒褐色腐食質）
2　褐色砂質（小石含み）
3　黄褐色砂礫（φ１～２cm石）
4　黄褐色砂礫（φ５cm石少し含み）
5　茶褐色砂礫（φ１～10cm石多量含み）
6　褐色砂礫（φ１～２cm石）
7　褐色砂礫（φ１～10cm石）

Ｅ断面
1　撹乱
2　撹乱一灰黄褐色〈10YR4/2〉シルト小石含み
3　暗灰黄色〈2.5Y5/2〉シルト小石含み
4　灰黄褐色〈10YR5/2〉砂礫
5　明褐灰色〈5G7/1〉礫
6　にぶい黄橙色〈10YR7/4〉シルト小石含み
7　灰黄褐色〈10YR4/2〉シルト小石含み
8　黒褐色〈7.5YR3/2〉シルト小石含み
9　褐灰色〈7.5YR4/2〉シルト小石含み
10　にぶい橙色〈7.5YR6/4〉シルト
11　明黄褐色〈10YR7/6〉砂礫
12　明黄褐色〈2.5Y7/6〉シルト
13　にぶい黄橙色〈10YR6/3〉砂礫
14　淡黄色〈2.5Y8/3〉シルト
15　にぶい赤褐色〈5YR5/4〉砂礫
16　褐色〈7.5YR4/3〉砂礫
17　浅黄色〈5Y7/4〉砂礫粗砂シルトラミナ
　　暗赤褐色〈5YR3/6〉鉄分含み

Ｃ・Ｄ断面
1　盛土・表土・撹乱
2　にぶい黄橙色〈10YR7/4〉シルト
3　灰褐色〈7.5YR4/2〉シルト（旧表土）
4　黄橙色〈10YR7/8〉砂礫（地山層）

第14図　南辺土塁断面図（1/100）

４　D調査区

当調査区は、開田城跡の西半中央部に設定した。当調査区は、当初東西９m幅、南北長12mの調査区を設定して2003年11月４日から実施した。ところが、調査区西辺の幅約２m分以外は大きく撹乱の受けていた。調査は、この撹乱部分を放棄して西辺を主においた。この部分の調査進行にともない、中世のみならず、長岡京期や弥生時代についての遺構も重複して検出したため、さらに西側への拡張調査を12月11日に行い、右京第789次調査の東端に接続した。その結果、合計約164㎡の調査となった。調査は、2004年１月23日まで実施した。

（１）土層堆積状況

当調査区の遺構検出面標高は、約24.4mで、調査時の地表面標高は、約25mであった。遺構検出面標高を、B調査区と比較すると、約0.1m低いが、大きな差ではない。

土層　当調査区の堆積は、右京第789次調査の基本土層と変わらない。現地表面を構成するのは、調査前の施設解体時の整地層で、その下に２層からなる近・現代の畑作耕土と考えられる堆積がある。畑作土は、1959年の航空写真に写る畑と察せられる。

（２）検出遺構

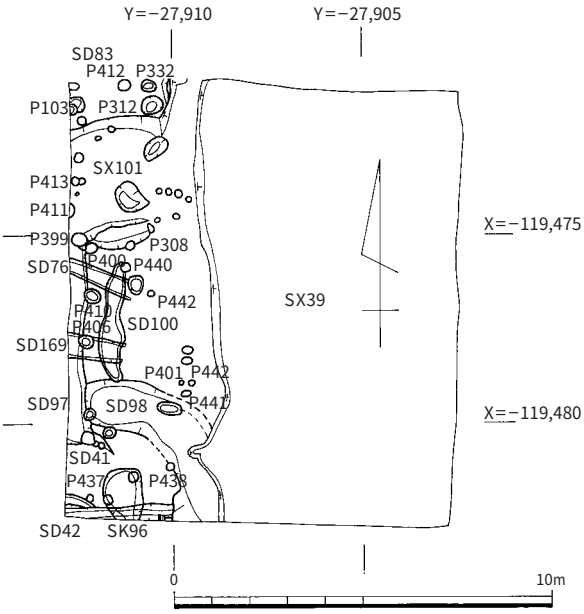
検出遺構には、柱穴や溝、土坑などがある（第15図、図版10(1)・12(1)・13(2)）。

柱穴群　柱穴は、時期の決め手となる遺物を出土するものは少なく、所属時期は明らかにできなかったものが多い。そのうち、柱穴Ｐ442からは、平安時代の黒色土器が出土した。

溝群　溝には、北西－南東方向に向くもの、東西方向に向くもの、南北方向に向くもの、曲線を描くものがある。

東西方向の溝ＳＤ42は、幅約0.5m、深さ約0.4mで、Ｆ調査区南東端の溝ＳＤ84に繋がると考えられる。溝ＳＤ76などの北西－南東方向の溝は、平安～鎌倉時代と考えられる。南北方向の溝には、溝ＳＤ83がある。この溝は、幅約３m深さ約0.3mで、部分的な土坑状の深まり（土坑ＳＫ101）や溝状の深まり（溝ＳＤ41・97・100）がある。この溝は、北で、右京第789次調査溝ＳＤ03、右京67次の第２トレンチ調査溝ＳＤ6733、当調査Ｇ調査区溝ＳＤ132に繋がるものと考えられる。当溝は、出土遺物と検出位置の国土座標から、西二坊大路西側溝と考えられる。弧を描く溝ＳＤ98は、幅約1.3m、深さ約0.2mで、弥生時代後期の所産である。

土坑　土坑ＳＫ96は、東西0.5m、南北約0.7m、深さ約0.2mの楕円形で、飛鳥時代後期から奈良時代の所産である。



第15図　D調査区平面図（1/200）

5　E調査区

当調査区は、開田城の南西隅に設定した。当調査区は、当初東西20m、南北12mの長方形に設定し、2003年11月６日から開始した。調査の進行と共に、右京第67次第１トレンチ調査区の検出遺構との位置関係や、西辺堀の南部などが問題となったため、12月22日に当調査区南辺を拡張した。その結果、調査面積は299㎡となった。当調査区は、2004年１月21日まで実施した。

（1）土層堆積状況

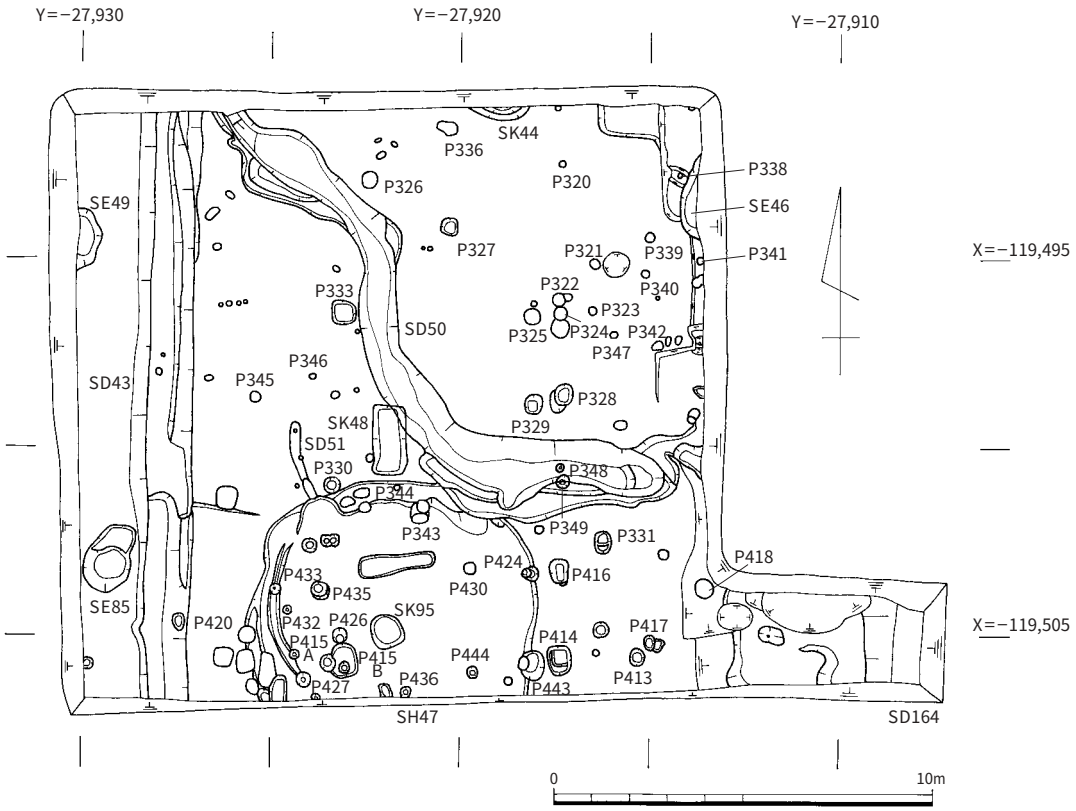
当調査区の遺構検出面標高は、23.9mで、調査時の地表面標高は、約23.9mであった。当調査区の遺構検出面標高は、C調査区に比べて、約0.3m高い。しかしD調査区に比べて、約0.5m低く、南辺土塁構築前の旧地表面と比較した場合、1m前後の削平を受けていると考えられる。

土層　当調査区内の土層堆積（第17図）は、C調査区の状況と類似していた。すなわち、現地表面を構成する土層は、新旧の宅地造成盛土で、その下に旧水田耕作土と水田に絡む薄い堆積が見られ、これらを除去した面が遺構検出面をなしていた。異質に感じられる部分は、遺構検出面を構成する土層で、当調査区には段丘礫は見られず、全面が青灰色系のシルト層であった点である。

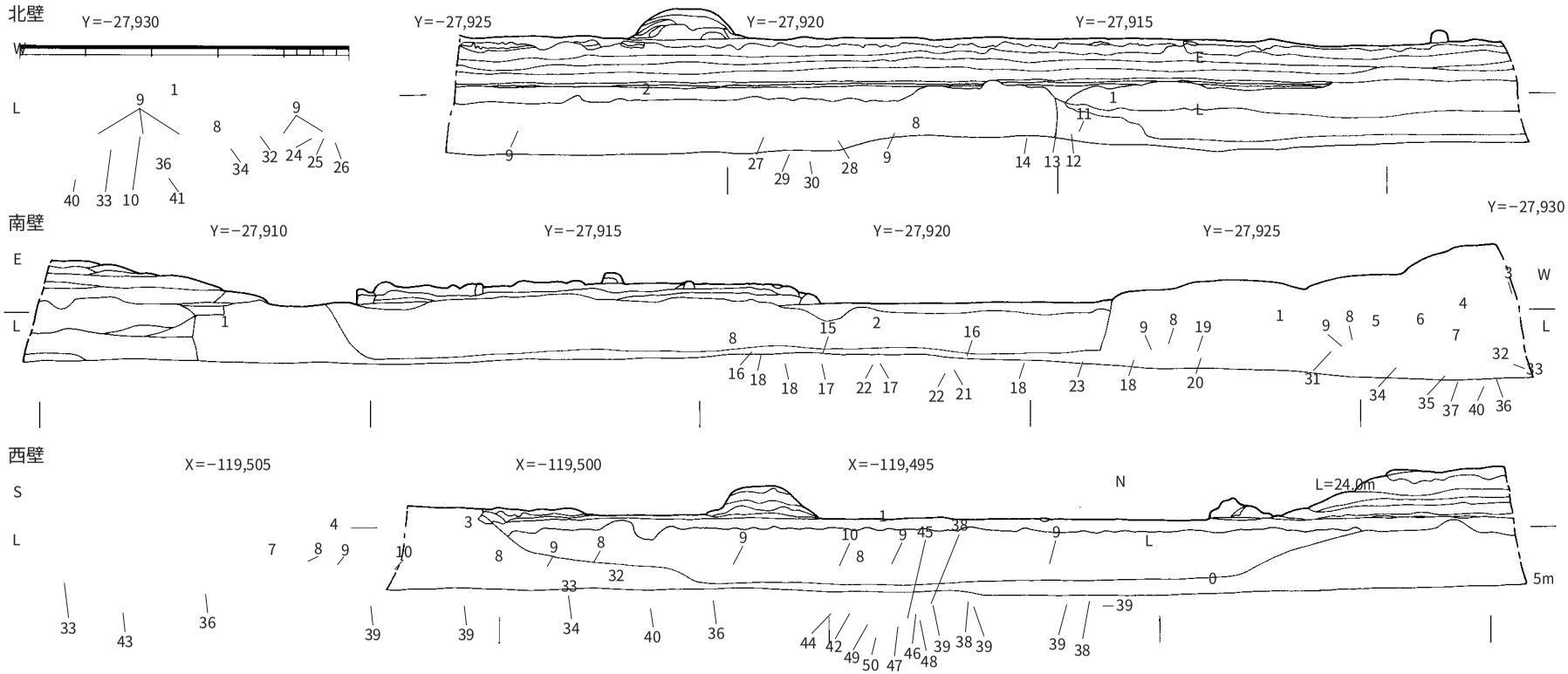
（2）検出遺構

当調査区から検出した遺構には、西辺堀、柱穴、井戸、土坑、溝、流路、竪穴住居などがある（第16図、図版10(2)・11）。

西辺堀ＳＤ43　南北方向に東肩を検出した。方向は、北で東に約２度振れている。西肩は調査



第16図　E調査区平面図（1/200）



第17図　E調査区土層図（1/100）

1　盛土１
2　盛土２
3　現畑作耕土
4　旧耕土１
5　撹乱土
6　旧耕土２
7　撹乱盛土
8　旧耕土３
9　暗オリーブ色〈5Y4/4〉シルト
10　灰オリーブ色〈5Y5/2〉シルト
11　明オリーブ灰色〈2.5G7/1〉シルト
12　明オリーブ灰色〈2.5GY7/1〉シルト・黄褐色〈2.5Y5/4〉シルト混り
13　黄褐色〈2.5Y5/3〉シルト・浅黄色〈5Y7/4〉シルト混り
14　黄灰色〈2.5Y5/1〉シルト
15　褐灰色〈7.5YR6/1〉砂質シルト
16　褐灰色〈7.5YR4/1〉砂質シルト
17　灰オリーブ色〈7.5Y6/2〉砂礫シルト混り
18　灰色〈5Y6/1〉砂・オリーブ黄色〈7.5Y6/3〉粘土・オリーブ黄色〈7.5Y6/3〉シルト混り
19　褐灰色〈7.5YR4/1〉砂質シルト
20　灰白色〈N7/0〉砂質シルト
21　灰色〈10Y6/1〉シルト
22　褐灰色〈5YR5/1〉砂
23　灰色〈N5/0〉シルト
24　灰黄褐色〈10YR4/2〉砂礫
25　褐灰色〈10YR5/1〉砂
26　暗灰黄色〈2.5Y5/2〉砂礫粘質シルト混り
27　黒褐色〈10YR3/1〉粘質シルト
28　灰色〈7.5Y6/1〉砂質シルト
29　黄灰色〈2.5Y5/1〉粘土細砂ラミナ
30　灰色〈5Y5/1〉粘土
31　黄灰色〈2.5Y5/1〉シルト
32　褐灰色〈10YR6/1〉シルト
33　褐灰色〈10YR5/1〉粘質シルト
34　灰褐色〈7.5YR5/2〉シルト・明黄褐色黄灰色粘土混り
35　褐灰色〈10YR6/1〉砂
36　明黄褐色〈10YR7/6〉粘質土・褐灰色〈10YR6/1〉シルト混り・黄灰色〈2.5Y6/1〉粘土混り
37　褐灰色〈10YR6/1〉砂・黄灰色〈2.5Y6/1〉粘土混り
38　紫灰色〈5P6/1〉粘土
39　灰白色〈5Y8/1〉細砂・腐植物含む明黄褐色〈10YR7/6〉混り
40　黄灰色〈2.5Y6/1〉粘土
41　灰色〈N5/0〉細砂礫
42　灰色〈10Y6/1〉細砂礫含み
43　暗青灰色〈5PB4/1〉砂質シルト小石含み
44　灰色〈10Y6/1〉細砂礫含み・暗青灰色〈5PB4/1〉砂質シルト混り
45　明緑灰色〈10GY8/1〉粘土
46　暗青灰色〈5B4/1〉砂質シルト
47　灰黄色〈2.5Y6/2〉砂質シルト小石含み
48　明青褐色〈5YR5/8〉砂礫
49　明青灰色〈5B7/1〉粘土
50　明青灰色〈5B7/1〉粘土・明赤褐色〈5YR5/8〉砂礫ラミナ

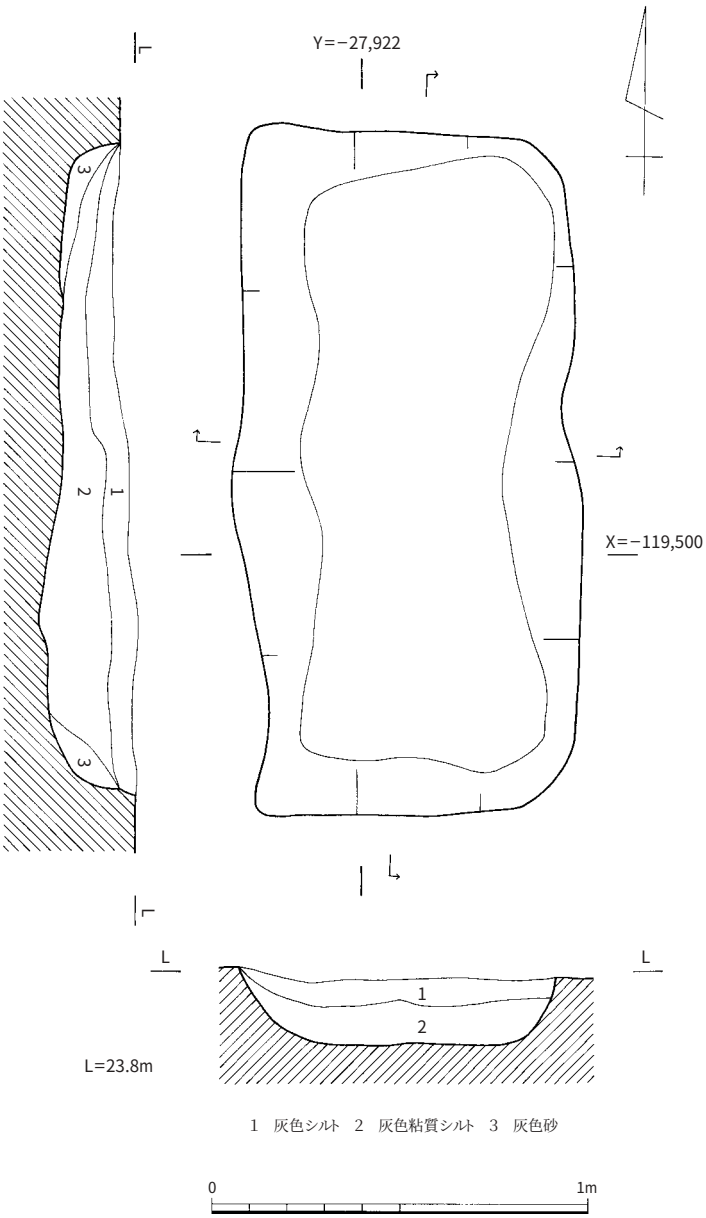
区外にある。当堀は、Ｃ調査区検出の南辺堀を西に延ばした接続予想の位置でも途切れたり、屈曲せず、まっすぐ南進する。深さは、約0.6mの残存状況である。埋土は、基本的に５層からなり、東肩付近に２層前後の部分的間層堆積がある。この堆積状況は、右京第789次調査の西辺堀ＳＤ01と変わらない。つまり、上から３層は落ち着いた水平堆積のシルト層で、各層間の面に乱れがない。しかし、撹拌された土層で、埋め土と考えられる。これらより下の２層は、自然堆積と考えられる。最下層は粘土層で、澱んだ状況での水中堆積と考えられる。この層の上面には、上の層への舞い上がりや、上の層からの沈み込みが見られ、かなり乱れている。Ｃ調査区の南辺堀ＳＤ05になかったこの土層の乱れを、人や動物が西辺堀に進入した形跡とすれば、堀の維持管理や用途を考える上で、貴重な手掛かりとなる。この２層の上下および間には、部分的に砂や砂礫の堆積が見られ、一時的な流水状態が幾度かあったことが知られる。

堀ＳＤ164　南辺堀が南に屈曲して南下する、南北方向の堀である。右京第67次第１トレンチ調査区の西端南部で検出された。幅約４m、深さ約１mを測る。

土坑ＳＫ48　幅約１m、長さ約1.8m、深さ約0.２mの長方形土坑で、長軸は、西辺堀ＳＤ43同様、北で東に約２度振れている（第18図）。埋土は２層に分けられ、下層から土師器皿や瓦器鉢が出土した。出土土師器皿から16世紀と考えられる。当遺構の形状は、墓壙と類似する。出土遺物と、軸方位から、時期は開田城期と合うが、開田城の機能期の城館内に、埋葬施設は考えられない。城館廃絶後の所産と考えたい。

井戸ＳＥ49　西辺堀ＳＤ43底面で検出した井戸で、西半部は調査区外にある。直径約1.5m、深さ約0.5mの残存状況である。井戸側等の施設はなかった。埋土は、井戸底の堆積４層が残っていた。出土遺物は少なく、時期決定の根拠は少ないが、西辺堀内出土瓦器などから、鎌倉時代と考えられる。

井戸ＳＥ85　西辺堀の底面で検出



第18図　土坑ＳＫ48実測図（1/20）

した井戸で、直径約１m、深さ約0.5mの残存状況であった。埋土は、灰色系の粘土やシルトの井戸底堆積のみで、井戸側などの施設はなかった。出土遺物から、鎌倉時代の所産と判断した。

井戸ＳＥ46　右京第67次第１トレンチ調査区で検出された井戸ＳＥ6710の西肩部分と考えられる落ち込みである。直径2m前後、深さ約1.5m前後の規模で残存していたものと考えられる。井戸内の施設は見つかっておらず、井戸側構造などは明らかでない。出土遺物は明らかでないが、鎌倉時代の所産と考えられる。

柱穴群　柱穴群は、円形の掘形をもつ１群と、隅円方形の掘形をもつ１群に分けられる。前者の１群は、竪穴住居ＳＨ47に関係する柱穴を除いて、ほとんどが鎌倉時代の所産と考えられる。開田城期と考えられる明確な柱穴は、判別できなかった。これらは、建物や柵としてのまとまりを掌握できなかった。出土遺物は少なく、各柱穴の時期の決め手はないに等しいが、柱穴Ｐ348・349から炉壁片が出土したことは注目できる。後者の１群には、長岡京期の土師器皿が出土する柱穴Ｐ327などがあり、長岡京期のものが含まれている。明確の建物や柵としてのまとまりは見出せなかったが、Ｐ325・327・329・333・344・415Ｂ・424・443と付した柱穴を結ぶと、南北方向の棟をもつ５間×２間の掘立柱建物に復元できる可能性がある。他に、柱穴Ｐ324・328・416・414を結ぶ直線も、南北方向であり、柵や建物になるかも知れない。

竪穴住居ＳＨ47　当遺構は、最大径約7.5mの円形住居である（図版11(2)）。深さ約0.2mで、埋土は大きく２層に分けられるが、遺構検出面を構成する土層との境がきわめて見分けにくいものであった。当遺構のほぼ中央には、直径約２mの範囲に炭や灰の堆積が薄く見られ、その中央あたりから、当住居にともなう中央炉ＳＫ95を検出した。中央炉ＳＫ95は、直径約0.9mの円形で、深さ約0.4mを測る。周壁溝は、西側縁辺で２～３重の同心円上にのみ検出したが、埋土の土質・色調変化が見分けにくかったため、大部分では明確でなかった。主柱穴は、４～５本と考えられるが、明確な柱穴Ｐ430・444以外の位置関係は明らかにできなかった。出土土器から、弥生時代後期の所産と考えられる。

溝ＳＤ51　この溝は、西側に弓なりに弧を描く溝である。幅約0.3m、深さ約0.1mの規模をもつ。形態・規模・埋土が、竪穴住居ＳＨ47の周壁溝に酷似していることから、竪穴住居の一部であった可能性がある。出土遺物はほとんど無いが、竪穴住居ＳＨ47との諸特徴の類似から、弥生時代後期と考えられる。

流路ＳＤ50　当調査区を、北西から南東に蛇行しながら流れる流路である。遺構内堆積は、砂と砂礫で埋め尽くされていた。深さは、検出した北西端で約0.2mで、約１m南下したところで段落ちして深さ約0.7mとなり、南東部の西へ向かう部分では、深さ約１mとなる。竪穴住居ＳＨ47との重なりから、弥生時代後期の住居より古い段階に埋め尽くされていたことが分かる。またこの流路は、古い段階に竪穴住居ＳＨ47から東方に大きく広がっていたようで、土坑ＳＫ48から南東には、砂とシルトの堆積が広がっていた。流路ＳＤ50の古い段階の最終堆積となる砂やシルトは、調査区東南端で検出した南北堀ＳＤ146の西肩を構成していた。このように、当流路と他の遺構との重なりから、弥生時代後期以前と言えるが、時期の確定はできなかった。

６　Ｆ調査区

当調査区は、開田城跡の西辺中央部で、残存西辺土塁南端部を含む位置に設定した。当調査区は、当初北に東西23.8m、南北5.5mと、南に南北10m、東西14mの計約270.9㎡の調査区を計画した。しかし、開田城西辺土塁の北部について保存されることを受け、調査区を一部変更して、2003年12月10日から実施した。当調査区はＤ調査区の北西角と接続させると共に、右京第789次調査の東西調査区北辺と、南北調査区東辺に連続させるように設定した。また右京第67次第２トレンチ調査区の南西隅とも連続させた。その結果、合計約282.9㎡の調査になった。調査は、2004年２月10日まで実施した。

（１）土層堆積状況

当調査区は、残存西辺土塁部分を除き、遺構検出面標高約24.5mで、調査時の地表面標高約25mであった。遺構検出面標高は、Ｂ調査区と同じである。

土層　当調査区の土層は、右京第789次調査およびＤ調査区と基本的に変わらない。ただ、調査区北東部が、調査前の施設解体にともなう大規模な撹乱が所在し、その部分には、遺構検出面を構成する土層の上位まで、整地盛土になっていた。また西辺土塁上は、厚さ約0.1m足らずの薄い表土に覆われているだけであった。西辺土塁構築土層の下には、基本的に２層前後の堆積があり、各層の上面から、中世の溝群などを検出した。また最下層を除去した面からは、鎌倉時代以前の遺構群を検出した。

（２）検出遺構

当調査区から検出した遺構には、調査時まで残存していた開田城期の西辺土塁（第44図、図版13(1)・15(1)・16(1)）、や西辺堀・溝（第19図）、長岡京期の西一坊大路西側溝や建物・溝、開田城ノ内遺跡に関する鎌倉時代の井戸・柱穴、飛鳥～奈良時代の建物跡などがある（第21・22図、図版12(1)・14(2)・20）。

西辺土塁ＳＡ70　西辺土塁は、調査時点で南北約50mが残存した。右京第789次調査の土塁ＳＸ02は、当調査区内に取り込まれている。この西辺土塁の、南端から北に約19mの範囲を調査した（図版15）。土塁構築直前の旧表土上面を基準とした場合、調査区の北端では、高さ約1.4m、幅約5.5mの残存状況で、調査区内では最も残存状況が良かった（図版17(1)）。この西辺土塁の城館内側東裾には、当土塁に平行して設置されたと思われる溝ＳＤ122がある（図版12(2)）。城館外側西裾には、西辺堀ＳＤ43がある（図版16(2)）。土塁の盛土は、基本的に２層からなり、各層はさらに細分できる（第20図、図版18・19）。下層は、基本的に柔らかく、黒色または灰黄色系の土色で、旧表土上に盛られた旧表土の撹拌土および弥生時代以後の堆積土が撹拌された土層である。上層は、基本的に粘質の強い土質または砂礫質の黄色系土色で、段丘堆積層およびそれを覆っていた緩扇状地堆積を主とした撹拌土であった。この土塁盛土層準は、ちょうど土層の逆転となっており、西辺堀の掘削土を盛り上げているものと理解できる。土塁盛り土の手法は、堀から掘り上げた土を、掘り側に厚く、城館内側に薄くなるように、城館内側に向かって穏やかな傾

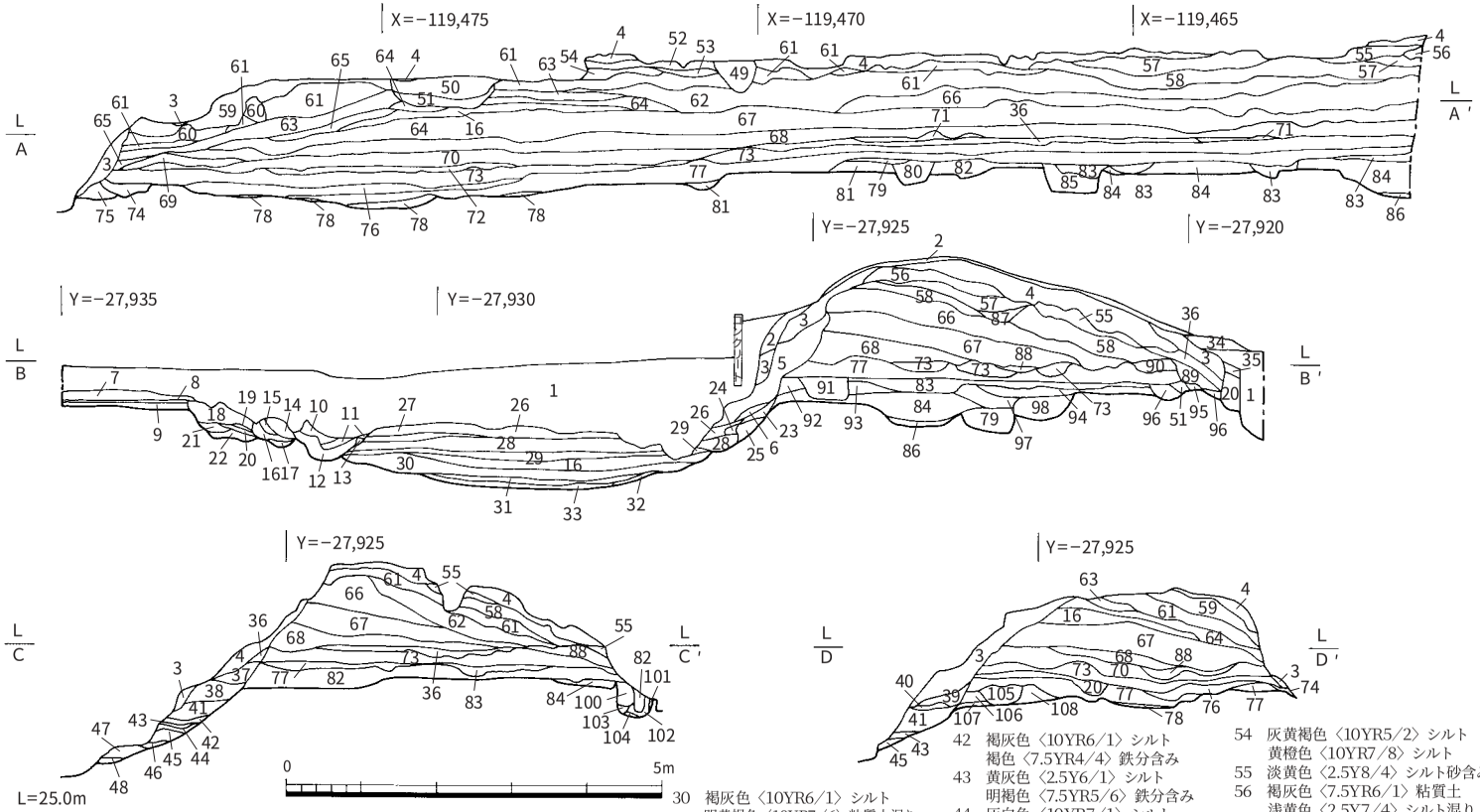
第19図　Ｆ調査区開田城期平面図（1/200）

斜面になるように引き延ばすように整地し、再び堀掘削土を積み上げている。この作業工程は、下層で約３回、上層で約５～６回まで観察できる。縦断面からは、この作業工程が少なくても調査区内で途切れることなく、一連の作業として一気に構築された様子がうかがえる。また南端部では、上層に砂礫層があり、Ｅ調査区検出流路ＳＤ50上流の堆積を堀の掘削で掘り上げている状況が、合理的に理解できる。また、この砂礫層を含む上下４層は、縦断面で北から南に傾斜していた。この土塁盛土の変化は、西辺土塁の盛り土作業単位の現れで、これより南に西辺堀ＳＤ43に沿って延びていた土塁の先後関係と捉えるのか、または西辺土塁の南端に近いことの現れで、これより南にはさほど長く延びていなかったと捉えるのか、判断できなかった。後者とすれば、西辺土塁南端は、長く延ばしたとしても、南辺土塁の西延長部に推定できるＥ調査区北端までと考えるのが理に叶うと思われる。もしそこで東に曲がって数mで止まるとすれば、Ｅ調査区で検出した西辺堀ＳＤ43と南辺堀が南に屈曲した堀ＳＤ164の間が南出入り口となり、現存した西辺土塁南端が、土塁構築時の南端位置に近いとすれば、西側に出入り口があった可能性が浮かび上がる。いずれにしろ、南辺堀が西辺堀に直接接続せず、南西隅が堀によって張り出しが設けられている状況との、合理的な解釈が必要である。西辺土塁構築の盛土下には、基本的に２層前後の堆積があり、各層の上面から、下層遺構を検出した。

西辺堀ＳＤ43　西辺土塁に沿って、西側に併走する堀である。この堀は、右京第789次調査の西側堀ＳＤ01と同じ堀で、残存西辺土塁南端よりさらに南下し、Ｅ調査区を貫いて、さらに南進する。堀内堆積（図版17(2)）は、基本的に右京第789次調査西辺堀ＳＤ01やＥ調査区検出西辺堀の状況と変わらない。すなわち、大きく分けて、堀内の水中堆積層、自然堆積層、水田耕作土、現代造成盛土の４層に区分でき、それぞれはさらに細分できる。現代造成盛土を除いて、上から５層は、水田耕土および水田に関わる整地層と考えられ、その内の最も上層は、1959年前後まで見られる水田と考えられる。西辺堀の西肩付近と東辺に見られる細い溝ＳＤ77～ＳＤ90は、これらの水田のための用水路と考えられる。西辺土塁の西斜面から連続する西辺堀の東肩部には、土塁崩落土の下に、良く締まった土層が、テラス状に存在した。この遺構は、５～６層からなる。その各層は、堀内堆積の水田関連土層と類似する土質・土色であった。また、堀上層遺構の水田東辺に掘られた溝ＳＤ77に沿って見られる。従って、テラス状のこの遺構は、一見、土塁の西斜面に築かれた犬走りに見えるが、西辺堀が掘削され、西辺土塁が構築された後の所産であること、西辺土塁構築土とは連続しないこと、溝ＳＤ77の東肩にあること、構成土層が水田関連土層と類似していることなどから、西辺堀上層の水田にともなう遺存土塁裾の通路（畦）と考えられる。

溝ＳＤ122　当溝は、西辺土塁東裾に掘られた配水施設と考えられる溝である（図版12(2)）。右京第789次調査で検出された溝の南北に連続する状況を確認した。幅約0.7m、深さ約0.3mを測る。当溝は、右京第789次調査で検出された際に、右京第67次第３調査区で検出された、北辺土塁南裾の、幅約1.7m、深さ約0.4mの溝につながる可能性が指摘されている。おそらくこの指摘は正しく、土塁および城館内の配水施設の機能があったと考えられる。

井戸ＳＥ86　右京第789次調査で検出された、鎌倉時代の井戸ＳＥ05である。埋土は、数層の

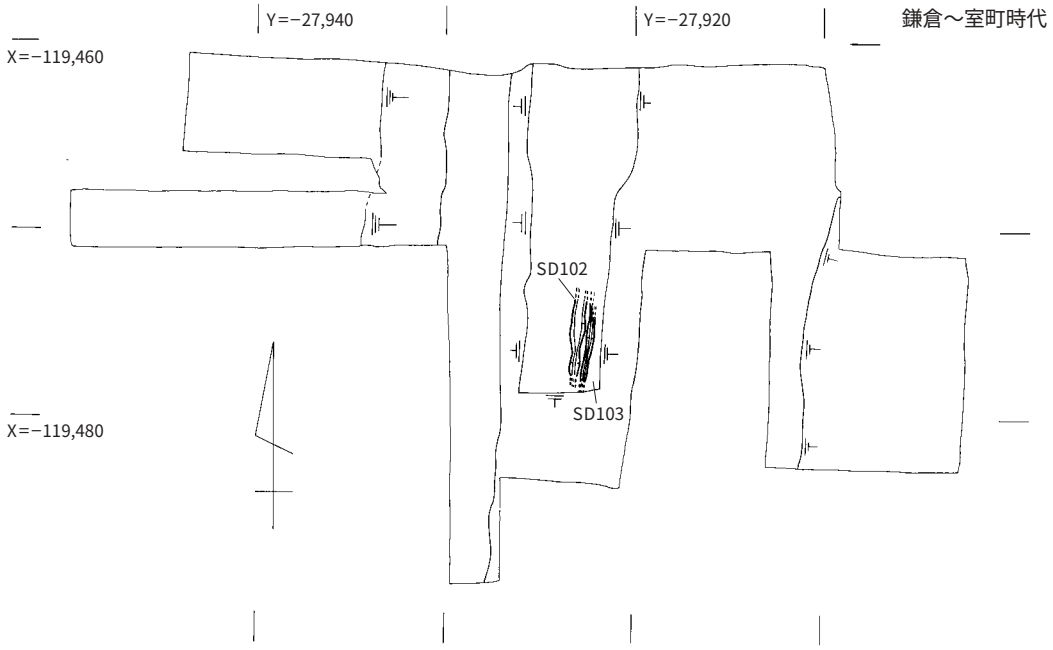


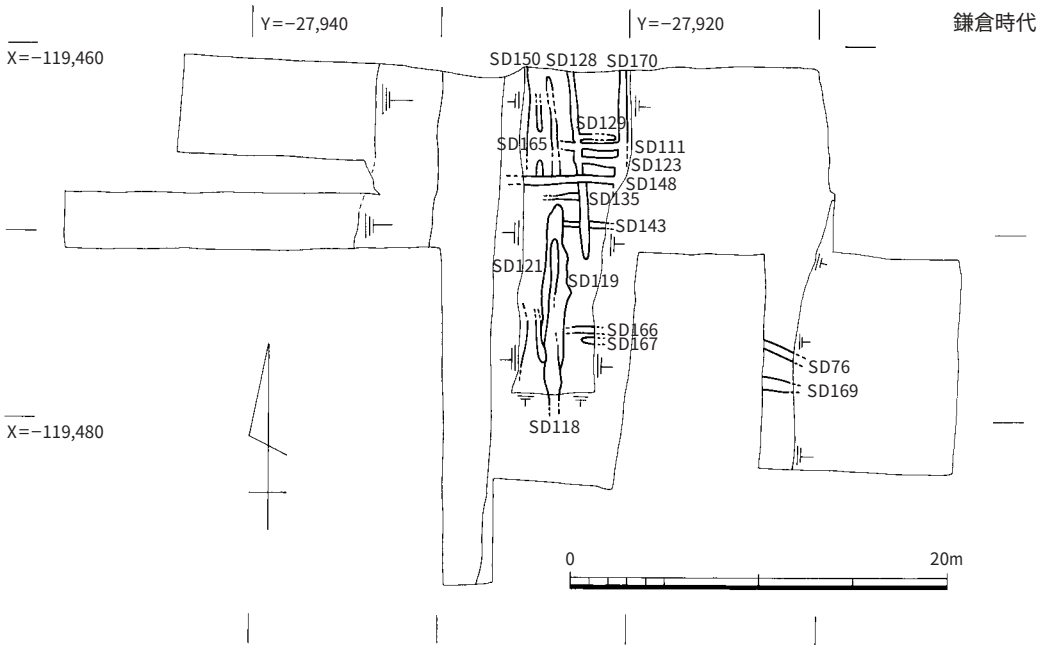
第20図　西辺土塁ＳＡ70断面図（1/100）

1　盛土
2　表土　現表土　黒色〈7.5Y2/1〉シルト
3　表土　灰黄褐色〈10YR5/2〉シルト
4　表土　黄橙色〈10YR8/6〉シルト小石多く含み
　黄褐色〈10YR8/8〉粘質シルト混り
5　黄褐色〈10YR5/2〉シルト
6　黄灰色〈2.5Y4/1〉シルト
7　旧耕土　灰色〈5Y5/1〉シルト
8　灰白色〈7.5Y3/2〉シルト
9　黒褐色〈10YR3/1〉シルト礫混り
10　暗灰黄色〈2.5Y5/2〉シルト
11　灰色〈10Y4/1〉粘土炭含み
12　灰色〈7.5Y5/1〉シルト（桟瓦含み）炭含み
13　黄灰色〈2.5Y5/1〉シルト小石含み
14　にぶい褐色〈7.5YR5/3〉シルト
15　灰白色〈10Y7/1〉シルト
16　灰黄褐色〈10YR6/2〉シルト
17　明褐灰色〈7.5YR7/1〉シルト粘質
18　灰黄褐色〈10YR5/2〉シルト小石含み
19　淡黄色〈2.5Y8/4〉シルト
20　灰黄色〈2.5Y6/2〉シルト
21　灰黄褐色〈10YR4/2〉
　明黄褐色〈10YR6/8〉粘質土混り
22　褐灰色〈10YR6/1〉シルト
　明黄褐色〈10YR6/8〉粘質土混り
23　にぶい黄色〈2.5Y6/8〉シルト
24　浅黄橙色〈10YR8/4〉シルト
25　黄橙色〈10YR8/6〉シルト
26　灰色〈5Y6/1〉シルト小石・炭混り
27　黄灰色〈2.5Y6/1〉シルト
　明黄褐色〈10YR7/6〉砂礫混り
28　褐灰色〈10YR6/1〉シルト小石混り
29　明褐灰色〈7.5YR7/2〉シルト
　にぶい赤褐色〈5YR4/4〉鉄分含み
30　褐灰色〈10YR6/1〉シルト
　明黄褐色〈10YR7/6〉粘質土混り
31　灰白色〈2.5YR7/1〉シルト
　青灰色〈5PB6/1〉粘質土
　・明黄褐色〈10YR7/6〉粘質土混り
32　青灰色〈5PB5/1〉砂礫
33　青灰色〈5PB6/1〉粘土
34　暗灰色〈N3/0〉シルト腐植土
35　灰黄色〈2.5Y7/2〉シルト
　暗灰色〈N3/0〉シルト混り
36　にぶい黄橙色〈10YR7/4〉シルト
37　にぶい黄橙色〈10YR7/4〉シルト
　灰黄褐色〈10YR5/2〉粘質シルト混り
38　灰黄褐色〈10YR4/2〉シルト
39　黄褐色〈2.5Y5/3〉シルト
40　灰黄色〈2.5Y7/2〉シルト
　黄橙色〈10YR7/8〉鉄分含み
41　にぶい黄橙色〈10YR7/2〉粘質シルト
　明黄橙色〈10YR6/8〉鉄分含み
42　褐灰色〈10YR6/1〉シルト
　褐色〈7.5YR4/4〉鉄分含み
43　黄灰色〈2.5Y6/1〉シルト
　明褐色〈7.5YR5/6〉鉄分含み
44　灰白色〈10YR7/1〉シルト
45　褐灰色〈7.5YR6/1〉シルト
46　灰黄褐色〈10YR6/2〉シルト
　にぶい黄橙色〈10YR5/3〉鉄分含み
47　灰色〈5Y6/1〉砂
　黄褐色〈10YR5/6〉鉄分含み
48　黄灰色〈2.5Y6/1〉細砂
　橙色〈7.5YR6/8〉鉄分含み
49　浅黄色〈2.5Y7/3〉シルト
　褐灰色〈5YR6/1〉混り
50　浅黄色〈2.5Y7/4〉シルト小石混り
51　浅黄色〈2.5Y7/3〉シルト
52　灰白色〈2.5Y8/2〉粘土
　黄橙色〈10YR7/8〉粘土
　・灰黄褐色〈10YR5/2〉シルト混り
53　にぶい黄褐色〈10YR5/3〉シルト
　黄橙色〈10YR7/8〉粘土混り
　・褐灰色〈10YR6/1〉シルト混り
54　灰黄褐色〈10YR5/2〉シルト
　黄橙色〈10YR7/8〉シルト
55　淡黄色〈2.5Y8/4〉シルト砂含み
56　褐灰色〈7.5YR6/1〉粘質土
　浅黄色〈2.5Y7/4〉シルト混り
57　黄色〈2.5Y8/8〉粘質シルト
　褐灰色〈7.5YR4/2〉粘質シルト
　・にぶい黄橙色〈10YR6/4〉シルト混り
58　黄色〈2.5Y8/6〉粘質シルト
　灰褐色〈7.5YR4/2〉粘質シルト
　・にぶい黄橙色〈10YR6/4〉シルト混り
59　にぶい黄色〈2.5Y6/4〉シルト
60　にぶい黄色〈2.5Y6/3〉シルト
　褐灰色〈7.5YR5/1〉粘質シルト混り
61　褐灰色〈5YR4/1〉粘質シルト
62　にぶい黄橙色〈10YR7/3〉シルト
　明黄褐色〈10YR7/6〉粘土
　・灰黄褐色〈10YR4/2〉シルト混り
63　浅黄色〈2.5Y7/4〉砂礫
　褐灰色〈5YR4/1〉粘質シルト混り
64　灰黄色〈2.5Y7/2〉シルト
65　灰黄色〈2.5Y7/2〉砂質シルト
66　褐灰色〈10YR4/1〉シルト
　にぶい黄橙色〈10YR7/3〉シルト
　・黒褐色〈10YR3/1〉粘質シルト混り
67　灰黄褐色〈10RY4/2〉シルト
　浅黄色〈2.5Y7/3〉混り
68　黒褐色〈7.5YR3/1〉シルト
　灰黄色〈2.5Y7/2〉シルト混り
69　灰黄色〈2.5Y7/2〉シルト
　黒褐色〈7.5YR3/1〉シルト混り
70　灰黄色〈2.5Y7/2〉シルト
71　橙色〈7.5YR6/6〉シルト
72　にぶい黄橙色〈10YR7/2〉シルト
73　黒褐色〈10YR3/1〉粘質シルト
74　黒褐色〈5YR3/1〉砂
75　明赤褐色〈5YR3/2〉粗砂
76　黒褐色〈7.5YR3/1〉粘質土
　褐灰色〈5YR6/1〉シルト混り
77　灰白色〈10YR7/1〉粘土
　にぶい赤褐色〈5YR4/4〉鉄分含み
78　明褐灰色〈7.5YR7/1〉粘土
　橙色〈7.5YR6/8〉鉄分含み
79　黄灰色〈2.5Y6/1〉シルト
80　褐灰色〈10YR4/1〉シルト
81　褐灰色〈7.5YR4/1〉シルト
82　黒褐色〈7.5YR3/1〉粘質シルト
83　黒褐色〈7.5YR3/2〉シルト
84　黒色〈7.5YR2/1〉粘質シルト
85　灰褐色〈7.5YR4/2〉シルト
　黄色〈2.5Y8/6〉粘質シルト混り
86　にぶい褐色〈7.5YR5/3〉粘質土
87　明黄褐色〈2.5Y7/6〉粘質シルト
　黒褐色〈2.5Y3/1〉シルト混り
88　青灰色〈5PB6/1〉シルト
　～灰白色〈10Y7/1〉シルト
89　灰黄褐色〈10YR4/2〉シルト
90　淡黄色〈2.5Y8/3〉砂
　浅黄色〈2.5Y7/4〉砂ラミナ
91　暗灰黄色〈2.5Y4/2〉シルト
92　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉シルト
93　黒褐色〈7.5YR2/2〉粘質土
94　黒褐色〈10YR3/1〉粘質土
95　黄灰褐色〈2.5Y5/2〉シルト
96　灰黄褐色〈10YR5/2〉シルト
97　明黄褐色〈10YR7/6〉粘質シルト
　褐灰色〈10YR5/1〉粘質土混り
98　黒褐色〈2.5Y3/1〉粘質土
99　灰黄褐色〈10YR4/2〉粘質土
100　黒褐色〈10YR3/2〉粘質シルト
101　にぶい黄橙色〈10YR7/2〉粘質シルト
102　黒色〈2.5Y2/1〉粘質シルト
103　橙色〈7.5YR6/8〉粘質土
104　黄橙色〈10YR6/8〉粘質土
105　黒色〈N2/0〉シルト
　暗灰黄色〈2.5Y4/2〉シルト混り
106　暗灰黄色〈2.5Y4/2〉砂質シルト
　黒色〈N2/0〉シルト混り
107　地山　灰白色シルト〈10YR8/1〉
　にぶい赤褐色鉄分含み
108　地山　灰黄色〈2.5Y6/2〉砂質シルト

薄い堆積からなる上層と、30㎝以上の厚さが数層重なる下層に分けられる。遺物は、下層から出土する場合が多かった。これらの状況は、右京第789次調査と基本的に変わらない。深さ約1.5mまで掘り下げたが、下層の堆積が、軟弱なシルトであったため、以下の掘り下げは断念した。井戸側などの構造は、明らかにできなかった。

鎌倉～室町時代の溝群　西辺土塁ＳＡ70構築土を除去した段階で、旧表土と考えられる土層上面から検出した溝群である（第21図、図版20(2)）。溝ＳＤ102は、幅約0.4m、深さ約0.1m、溝ＳＤ103は、幅約0.3m、深さ約0.1mで、両溝は約0.3mの間隔をあけて平行する位置関係にある。北で東に約７度傾く方向に延びる。開田城土塁構築以前の畑の尾根溝と考えられる。

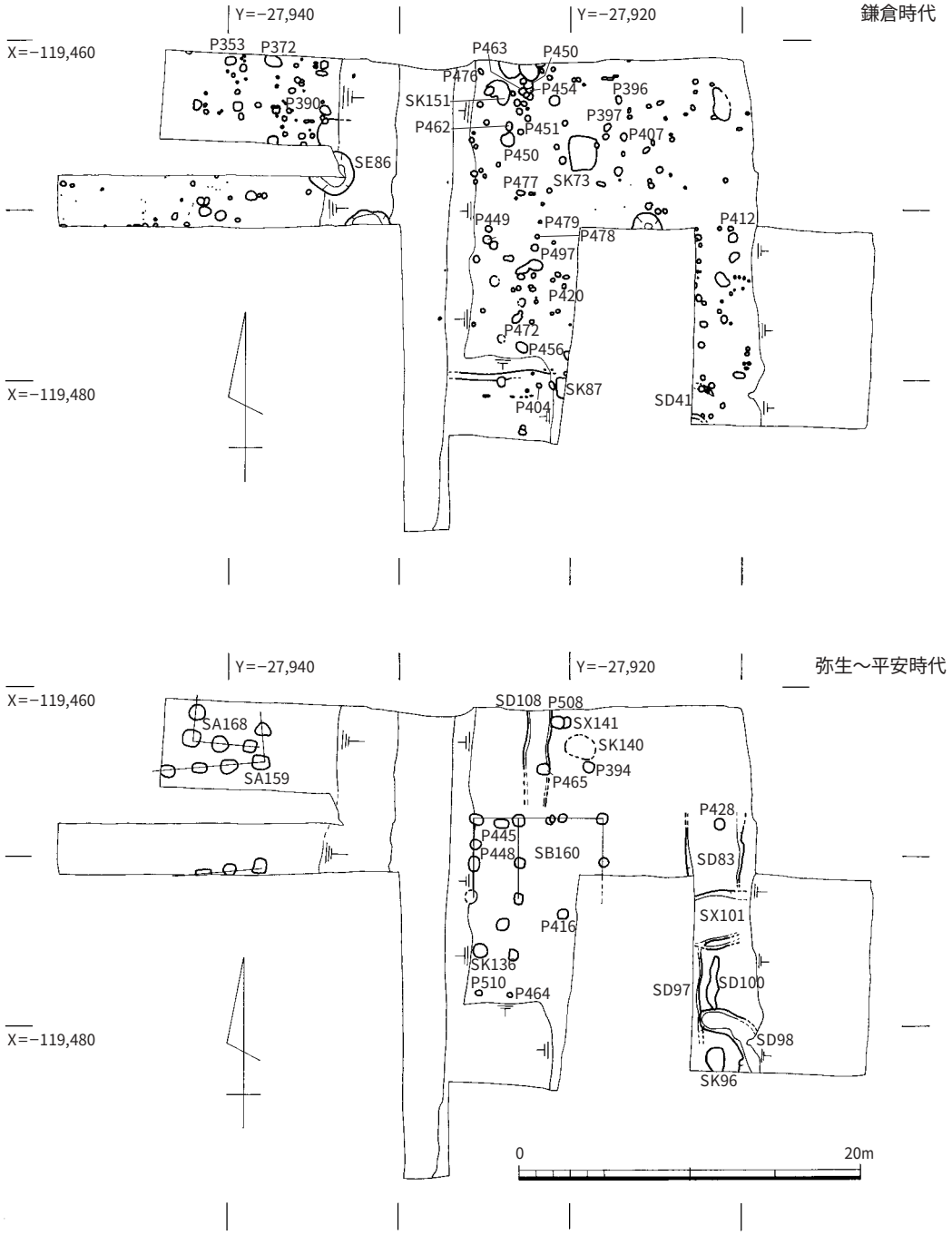




第21図　Ｆ調査区遺構変遷図－１（1/400）

溝ＳＤ102・103が掘り込まれた土層を除去した段階で、再び溝群を検出した。この溝群には、南北方向に向く溝ＳＤ170・128・118・165と、東西方向に向く溝ＳＤ124・111・123・117・135・143・166・167がある。前者は、北で西に約５度の方向にあるものが多いが、後者は、国土座標の東西に向くものが多い。両溝群の前後関係は、埋土が酷似していたため、判別できなかった。各溝からの出土遺物は、ほとんどが土師器皿と瓦器椀で、14世紀以後と考えられる。これらの溝群を掘りきった段階で、次に述べる柱穴群を検出した。その柱穴群には、15世紀と考えられるものが含まれていることから、柱穴群より新しい時期としたい。

鎌倉～室町時代の柱穴群　円形掘形をもつ柱穴群（第22図上）は、埋土の色調・土質に共通性



第22図　Ｆ調査区遺構変遷図－２（1/400）

があり、出土遺物から、13世紀から15世紀の所産と考えられる。西辺土塁下層やそれ以東のＤ調査区を含む範囲と、西辺堀より西の範囲に数多く検出した。直径約0.2mのものから、直径約0.6mを超えるものまであるが、建物や柵としてのまとまりを把握することができなかった。

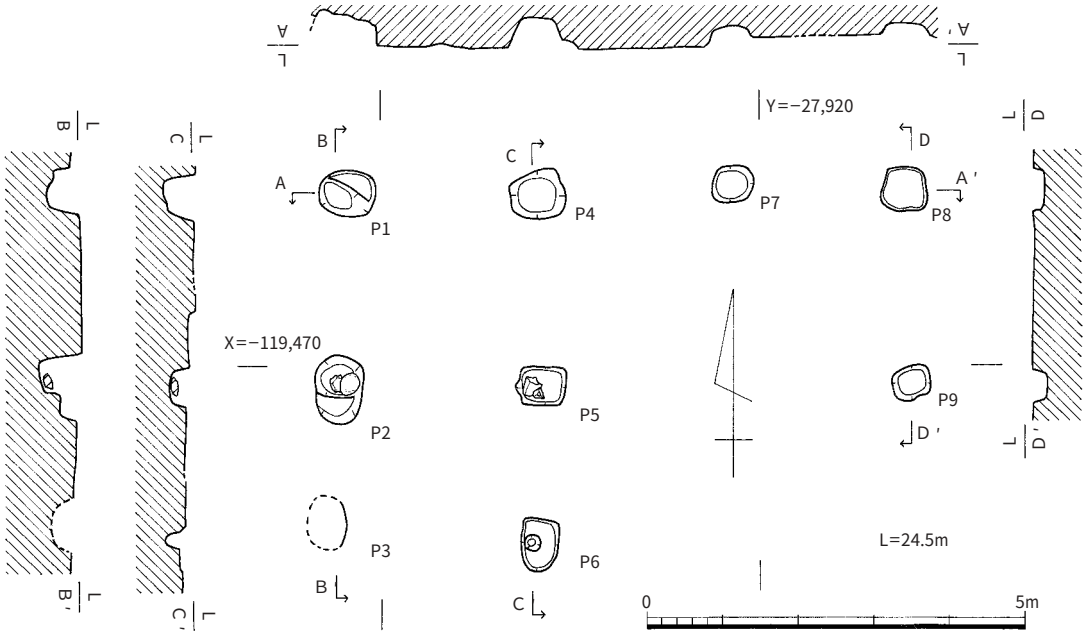
土坑ＳＫ73　西辺土塁東裾で検出した長方形土坑である（図版14(1)）。東西約1.5m、南北約２m、深さ約0.3mを測る。遺構内には、拳大から20㎝角程度の礫が集積したいた。西辺土塁東裾に平行して配置された溝ＳＤ122との重なる部分は、集石が見られなかった。

西二坊大路西側溝ＳＤ83　幅約３m、深さ約0.3mの南北溝である。Ｆ調査区東南隅で検出した。長岡京跡右京第789次調査溝ＳＤ03の一部で、Ｄ調査区とＧ調査区に延びていく。

溝ＳＤ108　幅約1.5m、深さ約0.2mの南北溝である。西辺土塁下層で検出した。西一坊大路西側溝ＳＤ83から西約８mの位置にある。西辺土塁下層のＦ調査区北端から南約5.5mの長さまで検出したが、以南は削平を受け、消滅していた。長岡京期の土器を多く含むが、鎌倉時代の土器も少量出土した。

掘立柱建物ＳＢ160　国土座標軸方向の長岡京期柱列である。西辺土塁下層から検出した。柱間は、東西列・南北列とも2.4m等間である（第23図、図版20(1)）。柱穴は、一辺約0.6～0.7m四方の隅円方形掘形をもつものが多い。東西３間、南北２間の範囲を検出した。南北の範囲は、２間と考えられる。しかし、西は、開田城西辺堀により削平され、東は攪乱抗や中世井戸により、どこまで延びていたか確定できない。また、検出した柱穴配置状況からは、総柱の倉庫と考えることができるが、２間四方の母屋に庇が付く構造や、検出した西辺柱列を別棟の東辺柱列と考えることも可能である。Ｐ６には、直径約0.2mの柱痕が検出できた。Ｐ２・Ｐ５などには、柱抜き取り跡から、人頭大の石や瓦が出土した。

土坑ＳＫ141　西辺土塁下層で検出した長方形土坑である。南北約0.5m、東西約0.8m、深さ約0.4mを測る。埋土上位から、土師器甕の口縁部が出土した。性格は明らかでないが、柱穴の可



第23図　掘立柱建物ＳＢ160実測図（1/100）

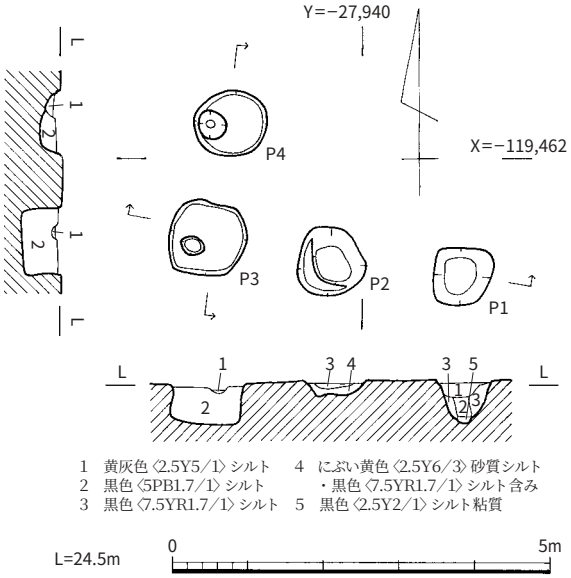
能性もある。

柵ＳＡ159　調査区西端（第25図、図版14(2)）で検出した柱列で、西で南に約５°の方向に３間分検出した。柱間は、約1.8m等間に配置されている。東端柱穴から北に折れ曲がって建物になる可能性がある。同方向の柱列は、右京第789次調査検出柱穴Ｐ７・８・11の列びに見られる。柱間も、今回検出した柵ＳＡ159と同じである。いずれの柱列も、各柱穴は、１辺約0.8m前後の大きな隅円方形掘形をもち、柱痕は、直径約0.2mのものが多い。

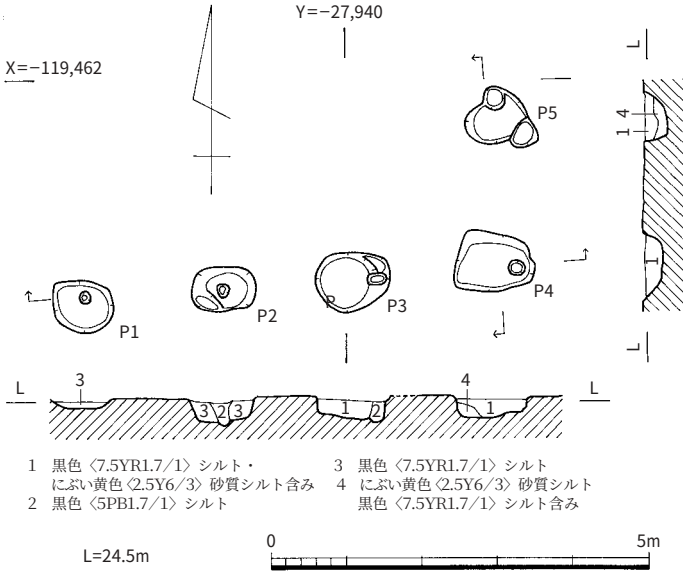
柵ＳＡ168　柵ＳＡ159の北に接して（第24図、図版14(2)）、Ｌ字形に配置された柱列として捉えたものである。柱間は、1.8m等間で、南北１間以上、東西２間の並びに構成されている。北で東に約５°の方向を向く。各柱穴は、柵ＳＡ159などに類似し、一辺約0.8m前後の大きな隅円方形掘形をもつ。柱痕には、直径約0.2mのものがある。

土坑ＳＫ143　南北約2m、東西約1.5m、深さ約0.2mの、不整形な落ち込みである。西辺土塁下層から検出した。竪穴住居の削平を受けたものとも考えられるが、カマドを推定する焼け土もなく、明確でない。

その他　以上の遺構群には、弥生時代の遺物の混入が見られた。特に、土塁構築土中に多く見られた。この状況からは、古墳時代以後の各時期に置いて、弥生時代遺構の削平があったことが知られる。特に、鎌倉時代の集落遺構群に伴う整地・掘削や、開田城西辺堀掘削と共に西辺土塁を構築する際や、城館内の整地工事において、かなり削平が進んだものと考えられる。弥生時代の遺構は、Ｄ調査区やＥ調査区の他、長岡京跡右京第789次調査において、竪穴住居をはじめ、溝や土坑などの検出があり、当Ｆ調査区内にも集落関連遺構が存在した可能性が高い。また、古墳時代から平安時代についても、遺構検出密度は希薄であったが、弥生時代の状況と同様に考えることができる。これら各時代の遺構が、西辺土塁下や西辺堀より西側、周辺部の調査成果を含めると、北辺堀より北に高い密度で検出されている状況からもうかがえる。



第24図　柵ＳＡ168実測図（1/100）



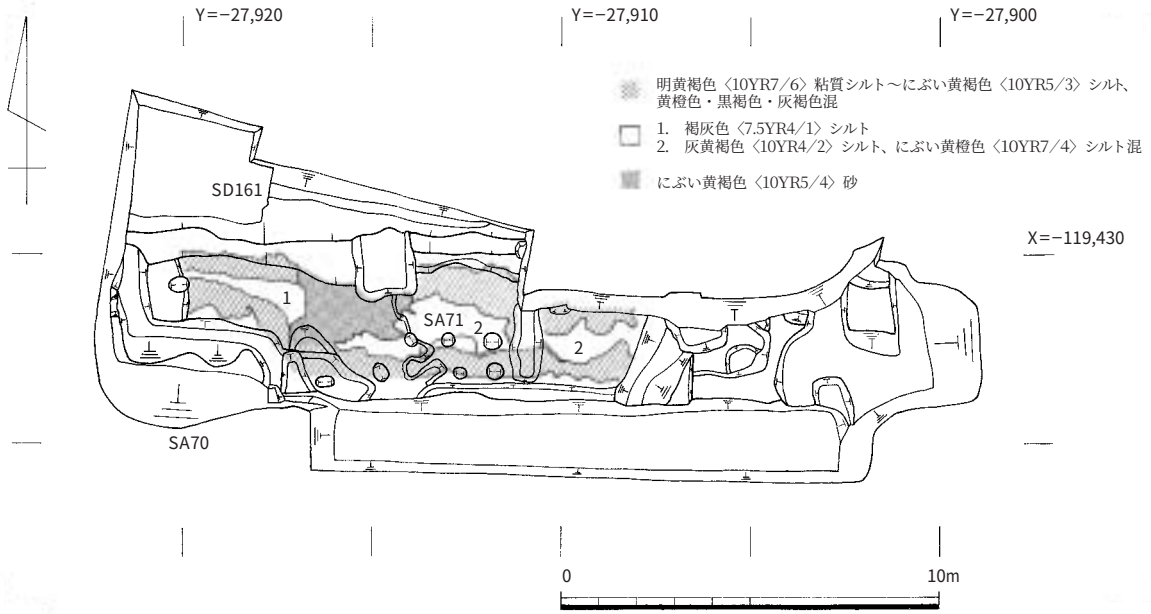
第25図　柵ＳＡ159実測図（1/100）

7　G調査区

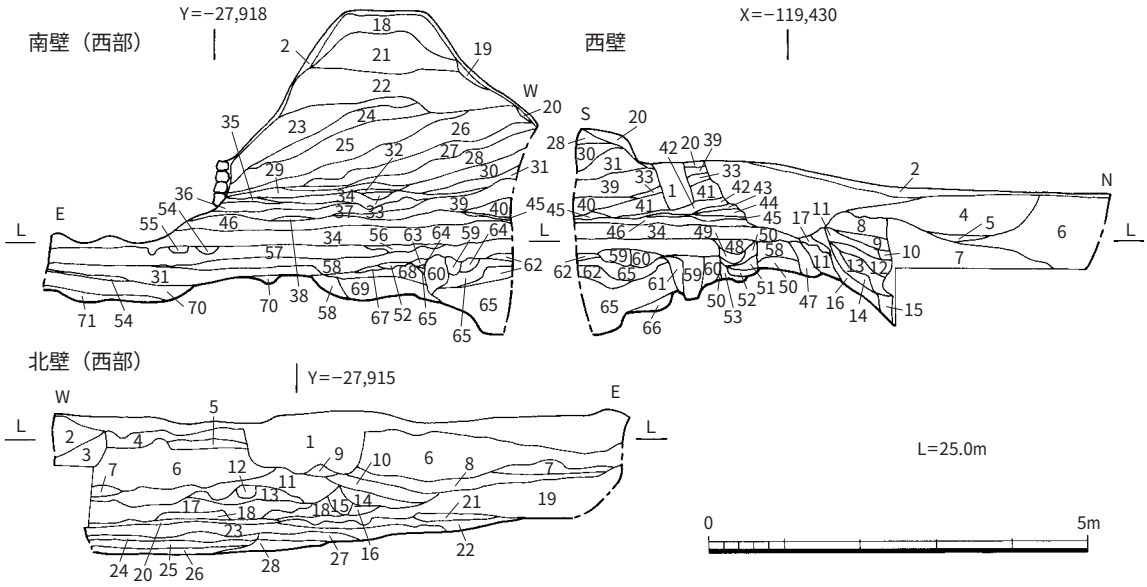
当調査区は、開田城跡の北西隅の、西辺土塁北端部と北辺土塁西端部にあたる位置に設定した。当調査区は、東西21m、南北8.9mの範囲を、現存西辺土塁北端に接するように、変則的な形状に計画した。しかし、計画位置の北西部に道路がかかることや、北辺部にバス停留所がかかるなどの制約をうけ、最終的な調査面積は、約110.7㎡となった。調査は、2003年11月25日から、1981年に復元された北辺土塁から西の部分の調査にかかり、2003年12月10日から、復元北辺土塁下の東半部の調査に着手した。調査は、2004年２月13日まで実施した。

（1）土層堆積状況と調査着手経過

当調査区には、西端部に対象地内への出入り口があり、そこに門が立てられていた。出入り口は、開田城を囲む土塁の北西隅部分で、土塁屈曲部を切り土されて築かれていた。西辺土塁の切り土による北端露頭面には、裾部を石垣で擁護されていた。そこに建てられていた門は、長岡京市教育委員会により、「中小路宗隆家長屋門」と名付けられている。同市教育委員会の調査によると、この長屋門は、江戸時代中期に桂宮家から拝領したものと伝わっているという。また、当該地に移築した大工は、棟札から、神足村の藤田儀兵衛・弥介兄弟であることが知られるに至った。この長屋門構築場所周辺には、建設時から現代までの造成土が、厚さ約0.2m前後あり、その上を、部分的にコンクリート舗装されていた。当調査区東半部には、1981年まで、北辺土塁が残存していた（第28図）が、全壊の後、一部が復元されていた。調査前まで保護されていたこの復元北辺土塁の下層に、本来の土塁構築土が僅かでも残っていないかを調べるため、幅約0.5mの調査区を南北方向に設定した。しかし、ほんのごく僅かしか見られず、壊滅状態であることが分かった。これらのことをふまえて、長屋門造成土および、復元北辺土塁造成土を重機により除去し、本格的な調査に移行した。残存西辺土塁北端部の石垣は、断面観察のため除去し、精査し



第26図　G調査区の平面土層変化（1/200）



南壁・西壁
1　撹乱
2　表土　オリーブ黒色〈5Y3/1〉シルト
3　黒褐色〈10YR3/2〉撹乱土
4　浅黄色〈2.5Y7/4〉砂
5　黄灰色〈2.5Y6/1〉砂
6　浅黄色〈2.5Y7/3〉砂
7　黄灰色〈2.5Y5/1〉撹乱土
8　暗灰黄色〈2.5Y5/2〉撹乱土
9　灰黄褐色〈10YR4/2〉シルト（小石含み）
10　にぶい黄色〈2.5Y6/4〉砂礫
11　黒褐色〈2.5Y3/1〉シルト
12　にぶい黄色〈2.5Y6/3〉砂礫
13　黄褐色〈2.5Y5/3〉シルト（小石多量含み）
14　暗灰黄色〈2.5Y5/2〉シルト（小石含み）
15　黄灰色〈2.5Y5/1〉シルト
16　にぶい黄色〈2.5Y6/4〉シルト
17　黒褐色〈10YR2/2〉シルト
18　灰黄褐色〈10YR5/2〉砂礫
19　にぶい黄褐色〈10YR5/3〉砂礫
20　にぶい黄褐色〈10YR5/3〉シルト
21　にぶい黄橙色〈10YR6/3〉砂礫
22　にぶい黄橙色〈10YR6/4〉砂礫（黒色〈10YR2/1〉粘質シルト
・にぶい橙色〈7.5YR7/3〉粘質シルト混り）
23　灰褐色〈7.5Y6/2〉シルト・黒色〈10YR2/1〉粘質シルト
・にぶい橙色〈7.5YR7/3〉粘質シルト小粒混り
24　灰褐色〈7.5YR4/2〉シルト・黒色〈10YR2/1〉粘質シルト
・にぶい褐色〈7.5YR6/3〉シルト混り
25　黒色〈10YR2/1〉粘質シルト・にぶい黄橙色〈10YR7/4〉粘質シルト混り
26　浅黄橙色〈10YR8/4〉粘質シルト（黒色〈10YR2/1〉粘質土
・黒色〈N2/0〉粘質土混り）
27　黒褐色〈7.5YR3/1〉粘質シルト・浅黄橙色〈10YR8/4〉粘質シルト少量混り
28　灰褐色〈7.5YR4/2〉粘質シルト・浅黄橙色〈10YR8/4〉粘質シルト
・黒褐色〈7.5YR3/1〉粘質シルト混り
29　灰黄褐色〈10YR5/2〉シルト（黒色〈10YR2/1〉粘質シルト
・にぶい橙色〈7.5YR7/3〉粘質シルト混り）
30　灰褐色〈7.5YR4/2〉粘質シルト・褐色〈7.5YR4/3〉シルト混り
31　黒褐色〈5YR2/1〉粘質土
32　青灰色〈5PB6/1〉粘質シルト
33　灰黄褐色〈10YR6/2〉砂質シルト
34　灰黄褐色〈10YR4/2〉砂質シルト
35　にぶい黄橙色〈10YR6/4〉砂礫
36　黄褐色〈10YR5/2〉砂質シルト・黒色〈N2/0〉粘質土混り
37　黒色〈N2/0〉粘質土・浅黄色〈2.5Y7/3〉粘質シルト混り
38　淡黄色〈2.5Y8/4〉シルト
39　灰黄色〈2.5Y6/2〉砂質シルト・黒褐色〈5YR2/1〉粘質土混り
40　灰黄褐色〈10YR4/2〉砂質シルト（黒褐色〈7.5YR3/1〉粘質土
・黒色〈N2/0〉粘質土混り）
41　にぶい黄色〈2.5Y6/3〉シルト
42　灰黄色〈2.5Y6/2〉砂質シルト
43　黒色〈7.5YR2/1〉砂質シルト
44　にぶい黄橙色〈10YR6/3〉砂質シルト
45　明黄褐色〈10YR7/6〉シルト
46　灰黄色〈2.5Y7/2〉砂質シルト
47　黒色〈10YR2/1〉粘質土
48　灰黄褐色〈10YR4/2〉シルト
49　黒褐色〈10YR3/1〉シルト
50　黒褐色〈10YR3/2〉シルト
51　黒褐色〈7.5YR3/2〉シルト
52　黒褐色〈7.5YR2/2〉シルト
53　黒色〈7.5YR2/1〉シルト
54　灰黄褐色〈10YR5/2〉粘質シルト
55　黒褐色〈5YR2/1〉粘質土・黄褐色〈7.5YR7/8〉粘質シルト混り
56　黒褐色〈5YR3/1〉粘質土
57　黒褐色〈7.5YR2/2〉粘質シルト
58　黒褐色〈7.5YR3/1〉粘質シルト
59　黒色〈7.5YR2/1〉粘質土
60　黒褐色〈7.5YR3/1〉粘質土
61　灰褐色〈7.5YR4/2〉粘質土
62　黒褐色〈10YR3/2〉細砂
63　黒褐色〈10YR3/2〉粗砂
64　黒褐色〈10YR3/1〉粘質シルト
65　暗褐色〈10YR3/3〉粗砂
66　灰黄褐色〈10YR6/2〉シルト
67　灰黄褐色〈10YR4/2〉砂礫
68　灰褐色〈7.5YR4/2〉粘質シルト
69　黒色〈N2/0〉粘質シルト
70　黒色〈N2/0〉粘質土
71　黒褐色〈7.5YR3/1〉粘質土・黄褐色〈10YR8/6〉粘質シルト混り

北壁
1　オリーブ黒色〈7.5Y3/2〉撹乱土
2　浅黄色〈2.5Y7/4〉砂
3　浅黄色〈5Y7/4〉粗砂撹乱土
4　灰黄褐色〈10YR6/2〉シルト
5　褐灰色〈10YR4/1〉シルト（礫混り）
6　灰黄褐色〈10YR5/2〉シルト（礫混り）
7　にぶい黄色〈2.5YR6/3〉シルト
8　暗灰黄色〈2.5Y5/2〉砂礫
9　黄褐色〈2.5Y5/3〉シルト
10　浅黄色〈2.5Y7/3〉砂礫（シルト混り）
11　黄褐色〈2.5Y5/4〉シルト（小石含み）
12　浅黄色〈2.5Y7/4〉シルト
13　黒褐色〈7.5YR3/1〉シルト
14　黒褐色〈7.5YR3/2〉シルト・黄色〈2.5Y8/6〉シルト混り
15　灰黄色〈2.5Y6/2〉細礫
16　黒褐色〈7.5YR3/2〉シルト
17　黒褐色〈10YR3/1〉シルト・にぶい黄色〈2.5Y6/4〉シルト混り
18　灰黄色〈2.5Y6/2〉砂礫
19　黄褐色〈2.5Y5/4〉シルト
20　灰色〈7.5Y6/1〉シルト
21　褐灰色〈10YR5/1〉砂質シルト
22　黒褐色〈7.5YR3/1〉砂
23　黄灰色〈2.5Y6/1〉粘土
24　灰黄色〈2.5Y7/2〉シルト・明黄褐色〈2.5Y7/6〉シルト（小石混り）
25　黄灰色〈2.5Y6/1〉砂礫
26　灰黄色〈2.5Y7/2〉砂礫
27　灰色〈5Y6/1〉砂礫
28　灰色〈5Y6/1〉シルト（砂礫混り）

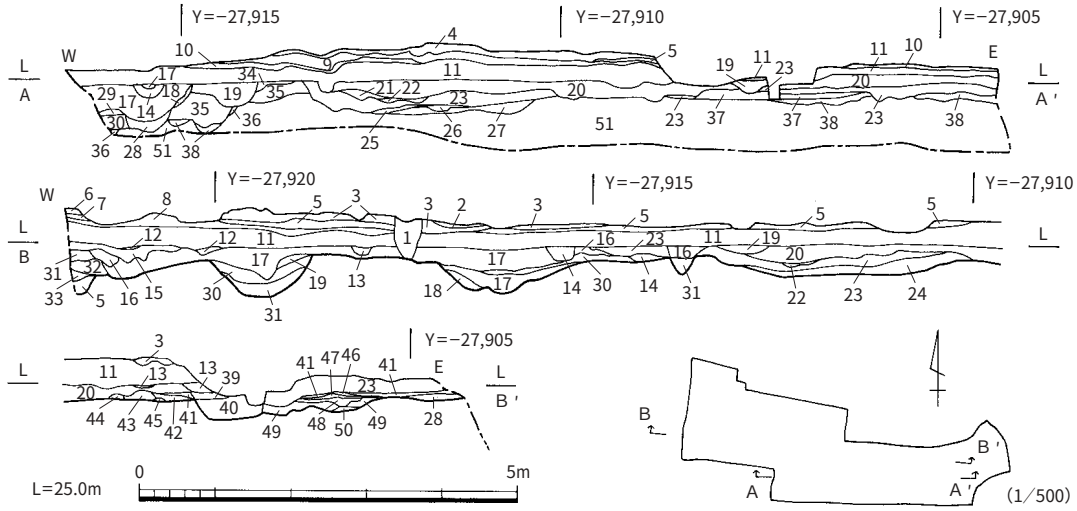
第27図　G調査区土層図（1/100）

た。また北接する道路から、長屋門にはいる入り口部分には、道路への傾斜面に石垣が築かれていたが、石垣の裏込め土を江戸時代以後の所産と判断し、除去した。

（２）検出遺構

検出遺構には、現代の攪乱抗、ごく僅かに残る開田城関係の北辺・西辺土塁構築土と北辺堀（第26・30図）、中世溝群、中世柱穴群長岡京期の溝、古墳時代の溝、弥生時代の竪穴住居と溝や流路などがある（第31図、図版22）。攪乱坑には、当調査区北西隅に看板基礎、南西部に電気配線管埋設溝、北辺中央部に、既存施設解体坑と思われる重機掘削溝、東辺から南辺に沿って、既存施設解体掘削坑、東半部のほぼ中央に北東－南西方向の下水管埋設抗などがあった。

北辺土塁ＳＡ71・西辺土塁ＳＡ70　Ｆ調査区で検出した土塁下の旧表土の上に、僅かに残る土塁構築土を検出した。土塁構築土は、平面で東西方向の帯状に見られ（第26図、図版21(1)）、北辺土塁が西辺土塁に先行して築かれた可能性がある。また西辺土塁東裾に相当する部分には、幅約３ｍにわたって南北方向に砂層が薄く敷かれていた。この位置は、昭和59年の1/500長岡京市道路地図に重ねると、ちょうど当対象地内への進入路位置で、中小路家長屋門があった位置に



1　攪乱　褐灰色〈7.5YR4/1〉砂・粗砂など
2　にぶい黄褐色〈10YR5/4〉砂
3　にぶい黄褐色〈10YR5/3〉シルト（黄橙色〈10YR8/8〉シルト・黒褐色〈10YR3/1〉粒子・灰褐色〈7.5YR4/2〉シルト混り、小石多く含む
4　暗灰黄色〈2.5Y4/2〉シルト
5　灰黄褐色〈10YR6/2〉シルト
6　にぶい黄色〈2.5Y6/3〉シルト
7　灰黄色〈2.5Y6/2〉砂質シルト
8　明黄褐色〈10YR7/6〉シルト
9　灰黄褐色〈10YR4/2〉シルト・浅黄橙色〈10YR8/4〉シルト攪拌土
10　灰黄褐色〈10YR4/2〉シルト・にぶい黄橙色〈10YR7/4〉シルト混り
11　にぶい黄橙色〈10YR6/4〉シルト（中世土器含み）
12　黒色〈N2/0〉粘質土
13　灰黄褐色〈10YR5/2〉粘質シルト
14　灰黄褐色〈10YR4/2〉粘質シルト
15　黒褐色〈7.5YR3/1〉粘質シルト
16　黒色〈7.5YR2/1〉粘質土
17　黒褐色〈7.5YR2/2〉シルト
18　灰黄褐色〈10YR5/2〉シルト
19　にぶい褐色〈7.5YR5/3〉シルト
20　灰褐色〈7.5YR4/2〉粘質シルト
21　褐色〈7.5YR4/4〉シルト
22　にぶい褐色〈7.5YR5/3〉砂（礫含み）
23　黒色〈7.5YR2/1〉シルト
24　黒褐色〈5YR2/1〉粘質土
25　黒褐色〈10YR3/2〉シルト（小石含み）
26　黒褐色〈10YR2/1〉シルト（黒色炭・明赤褐色〈2.5YR5/8〉焼土混り）
27　黒色〈7.5YR1.7/1〉シルト・明赤褐色焼土混り
28　黒色〈7.5YR2/1〉シルト・黄橙色〈10YR8/8〉シルト混り
29　灰褐色〈7.5YR5/2〉シルト
30　黒褐色〈7.5YR3/1〉シルト
31　黒褐色〈7.5YR3/1〉粘質土
32　黒褐色〈10YR3/2〉細砂
33　明褐色〈10YR3/3〉粗砂
34　黒褐色〈5YR3/1〉シルト
35　黒色〈7.5YR2/1〉シルト・黒褐色〈7.5YR2/2〉シルト含み
36　暗灰黄色〈2.5YR5/2〉シルト
37　黒色〈7.5YR1.7/1〉シルト・黄橙色〈10YR8/8〉シルトの５mm互層
38　灰黄褐色〈10YR5/2〉シルト・黄橙色〈10YR8/8〉シルト混り
39　黒褐色〈10YR3/2〉シルト
40　黒褐色〈10YR3/1〉シルト
41　黒色〈N2/0〉炭層
42　黒色〈7.5YR2/1〉粘質土・橙色〈7.5YR6/8〉粘質シルト混り
43　黒褐色〈５YR3/1〉粘質土・明黄褐色〈10YR7/6〉焼土・黄橙色〈7.5YR8/8〉焼土混り
44　にぶい橙色〈5YR6/4〉粘質シルト
45　黒褐色〈7.5YR3/2〉粘質シルト
46　赤褐色〈2.5YR5/8〉焼土（表面暗赤灰色〈10R4/1〉）
47　黒褐色〈10YR3/1〉粘質土・明黄褐色〈2.5Y7/6〉粘質シルト混り
48　黄褐色〈2.5Y5/4〉粘質土・明黄褐色〈2.5Y7/6〉粘質シルト混り
49　にぶい褐色〈7.5YR5/4〉粘質土
50　にぶい黄橙色〈10YR6/4〉粘質土
51　橙色〈7.5YR6/6〉シルト（下位橙色〈7.5YR7/6〉礫）

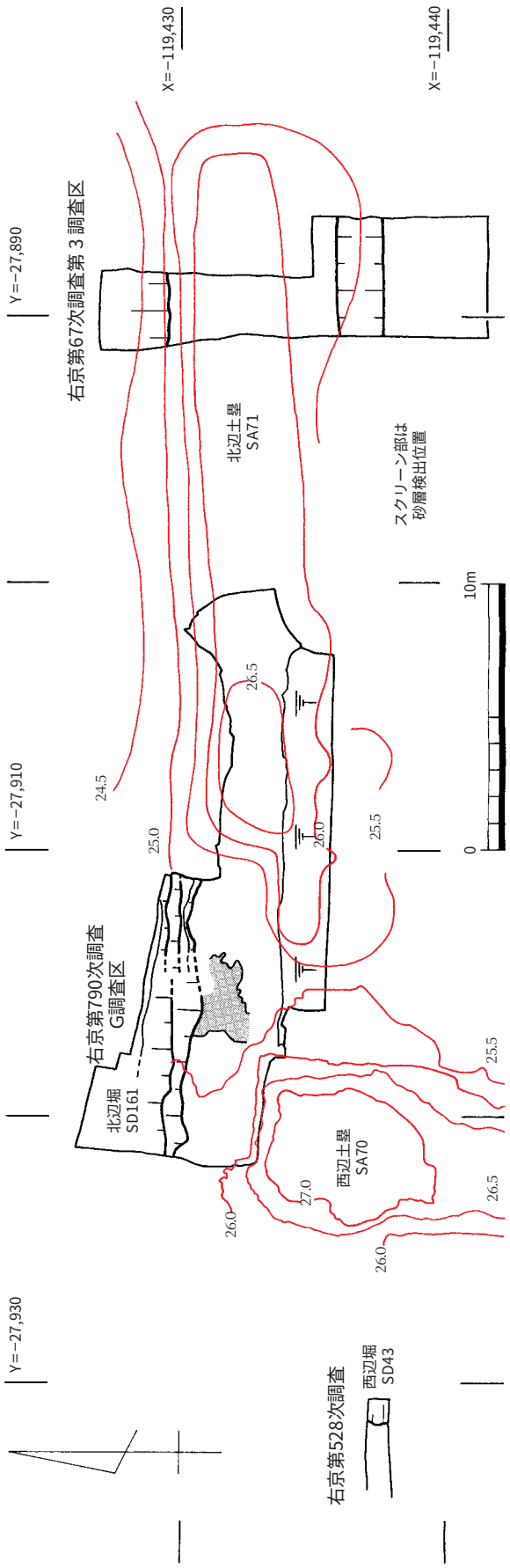
第28図　Ｇ調査区土塁構築土以下の堆積（1/100）

あたる。この位置関係から、これに関わる基礎事業の所産と考えられなくはない。しかし、近代表土層除去後の検出であり、西辺土塁との位置関係から、開田城北出入り口に関わる施設と考えることもでき、その出入り口が現在まで位置を変えずに残存していたという考え方もできる。この砂層は、非常に薄く、出土遺物もなかったことから、時期の確定はできなかった。

第29図は、当調査区と1981年まで残存した北辺土塁、および現存する西辺土塁、さらに周辺部調査区との位置関係を示している。この図からは、北辺土塁の西端から西辺土塁の東辺裾までの途切れ目の位置に、砂層を検出したことが分かり、北門に関わる基礎事業に伴い敷かれた砂層の可能性が指摘できる。また、北辺土塁西端の北半部と西辺土塁北端部の欠損は、長屋門移築時の可能性がある。

今回の調査では、推定北辺土塁南裾部が約１mの深さまで攪乱されており、北辺土塁の幅さえ捉えることができなかった。しかし、長岡京跡右京第67次調査の第３調査区で、幅約6.2mと推定されている。

西辺土塁は、現存土塁北端の露頭面を調査した。この北端部は、西辺土塁で最も高く残っている部分で、現地表面から約２mを超える高さがある。露頭断面（第27図、図版23(2)）は、断面が傾斜する土塁構築土下層と、台形状に積み上げられた土塁構築土上層の、大きく２層に分けられる。下層は、基本的にＦ調査区の西辺土塁構築土の状況と変化無く、西辺堀側に厚く急斜面に、城館内側に薄く緩斜面になるように構築している。また構築土の順位は、土塁構築直前の土層以下の逆転状況と見られ、Ｆ調査区のあり方に類似する。上

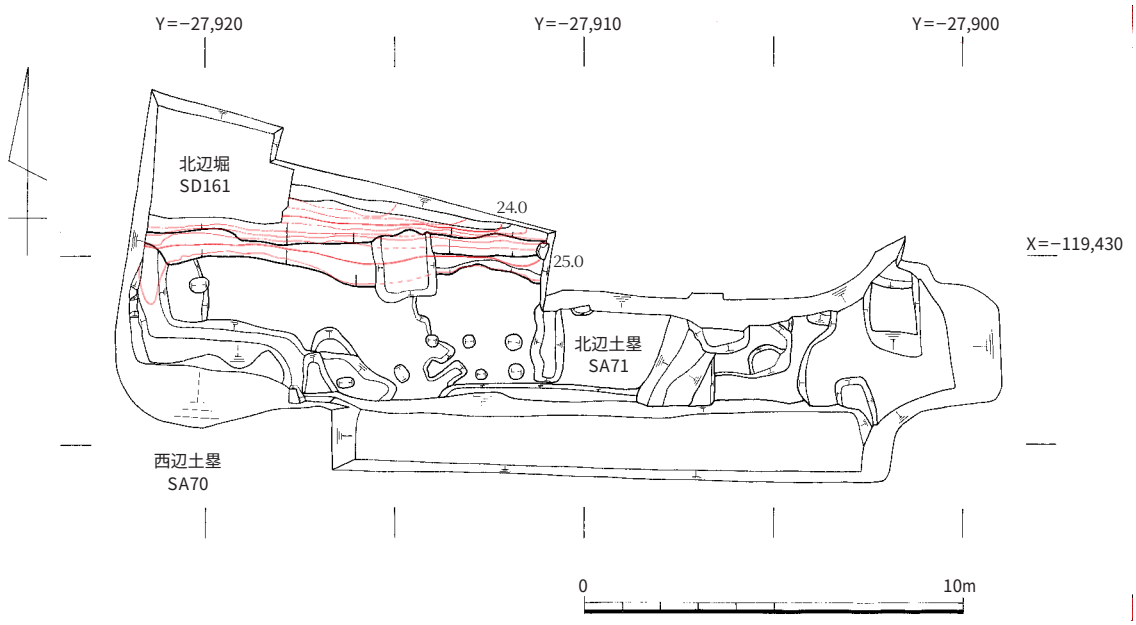


第29図　G調査区と北辺土塁（1/250）

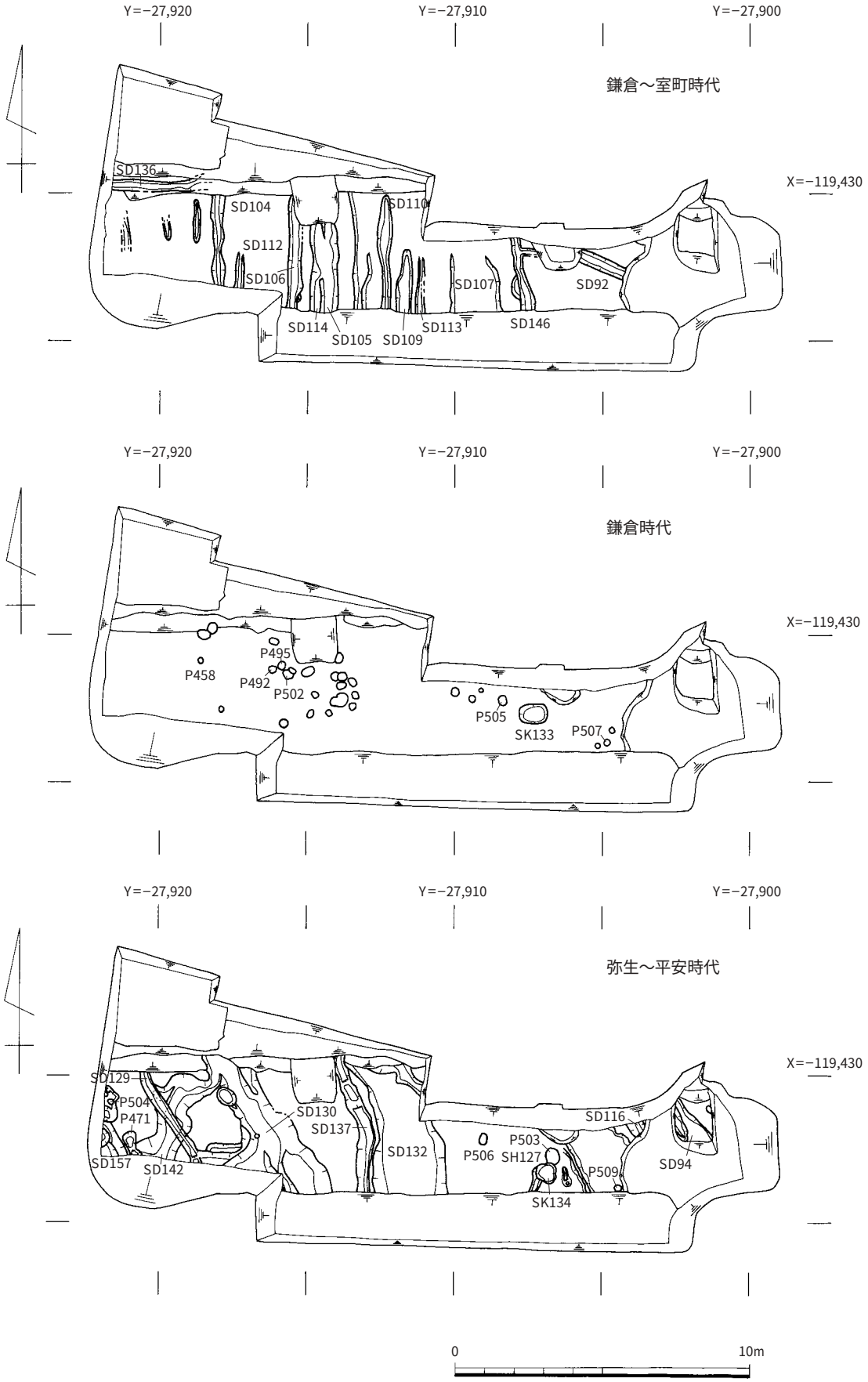
層は、土塁上面に安定した平坦面を確保するための構築土と考えられる。他の調査区では、このような上層の存在を裏付ける痕跡は見られなかった。西辺土塁北端にある上層が、開田城北西隅の特殊な構造であるのか、本来ほぼ四周を囲む土塁上にあったものなのか、明確でない。ただ、上層により確保される土塁上面の幅が約１ｍしかなく、北西隅の土塁上施設の可能性として考えられる隅櫓を築くには狭すぎ、また他の遺存土塁高が１ｍ前後と低いことから、全ての土塁上に盛られていたものと判断した。しかし、これは確定的でなく、西辺土塁と北辺土塁の間で検出した砂層が出入り口の基礎構造だとすれば、その出入り口の防御構造の可能性も捨てきれない。あるいは、上層を構成する３層の厚さや、上から２層目・３層目の有無により、0.4～0.6m程度の差を設けていたのかも知れない。

北辺堀ＳＤ161　当調査区西半部北辺で、北へ落ち込む東西方向の肩部を検出した（図版23(1)）。深さは、土塁構築土直下の旧表土面から約1.8mを測る。埋土は、堀内の堆積と考えられる下層と、江戸時代以後に埋め戻されたと考えられる上層に分けられる（第27図）。下層は、厚さ約0.4mで、基本的に水平堆積である。土質は、シルトを基調に、厚さ約0.1m前後の砂礫層が挟まれている。これらの下層堆積は、水が澱んでいる状況下での堆積と考えられるものがほとんどで、間層の砂礫も、早い流水による堆積とは考えられない。このことは、北辺堀は西小路川を共有していると考えられていた従来の説に否定的と言える結果となった。上層は、入り乱れた堆積状況で、土塁を削平して埋め戻されたと考えられる。この北辺堀は、長岡京跡右京第67次調査の第３調査区でも、北へ落ち込む南肩が検出されており、北辺堀南肩が当調査区からほぼ国土座標にそった東西方向にあることが分かる（第28図）。

鎌倉～室町時代の溝群　土塁構築土直下で、溝群を検出した（第31図上、図版21(2)）。これらの溝群には、南北方向の溝が大多数を占め、他に東西方向の溝ＳＤ163や北西－南東方向の溝ＳＤ92があった。南北方向の溝群では、溝ＳＤ104・106・146が、幅0.4m前後、深さ約0.2mの明確な掘形であるのに対し、他の南北溝は、隣接する溝との境が不明瞭であったり、幅１ｍ前後、深



第30図　G調査区開田城期遺構図（1/200）



第31図　G調査区遺構変遷図（1/200）

さ約0.1mと幅広く浅いものであった。また埋土が類似しており、先後関係は明らかにできなかった。東西溝と南北溝群の関係も、埋土の土質・色調が類似し、先後関係の有無は明らかでない。溝ＳＤ92は、幅0.6m、深さ約0.4mを測り、他の溝群と異質である。埋土も、上層は他の溝群に類似するが、下層は黄色系粘質土と黒色系粘質土の撹拌土であり、明確な違いがある。

鎌倉時代の柱穴群　上記した溝群より古い中世遺構には、柱穴群がある（第31図中央）。直径約0.2m、深さ約0.3m前後のものが多い。遺構残存範囲が、南北約４m、東西約22mと狭かったため、掘立柱建物や柵としてのまとまりを捉えることはできなかった。

西一坊大路西側溝ＳＤ132　東西幅約1.5m、深さ約0.4mの南北溝である。当調査のＤ・Ｆ調査区検出溝ＳＤ83から北に延長した位置にある。出土遺物は少なかったが、長岡京期と考えられ、西一坊大路西側溝と推定できる。

土坑ＳＫ133　東西約１m、南北約0.6mの長方形土坑である。深さは、約0.4mを測る。出土遺物がほとんど無く、時期の決め手に欠く。長辺がほぼ東西方向であることから長岡京期の柱穴の可能性もあるが、中世土壙墓とも考えられる。

溝ＳＤ130　幅約1.2m、深さ約0.4mのＬ字形に屈曲する溝である。出土須恵器から５世紀末の所産と考えられる。当溝の性格は明らかでないが、古墳を巡る周溝の可能性が指摘できる。

溝ＳＤ142　北東－南西方向の蛇行する溝である。幅約1.2m、深さ約0.3mの規模で、出土遺物は少なく、時期は確定できなかった。

土坑ＳＫ134・竪穴住居ＳＨ127　土坑ＳＫ134を中心に、焼け土面が広がっていた。土坑ＳＫ134の埋土には、焼け土や炭混じりの灰層が下層に見られ、竪穴住居の中央炉と考えられる。周辺部の焼け土層は、土坑ＳＫ134を中心に据えた住居の焼失によるものと考えられる。焼け土面には、北西－南東方向の畦上に盛り上がった部分が見られた。この畦状遺構は、住居内の機能区分に起因する可能性がある。当住居の輪郭や周壁溝の位置はよく分からなかったが、柱穴Ｐ506・509が主柱穴であったと考えられる。焼け土面の広がりや主柱穴と考えられる柱穴位置などから、およそ直径８m程度の住居ではないかと考えられる。焼け土の上下堆積から出土した遺物から、弥生時代後期の所産と考えられる。

溝ＳＤ157　調査区南西隅で検出した遺構で、北西－南東方向の溝である。南西肩部は確認できなかったが、幅１m前後になるものと考えられる。深さは約0.5mで、埋土は砂や砂礫層であった。この堆積土の土質から、流路であったと考えられる。この流路は、長岡京跡右京第67次調査の第２調査区で検出された溝ＳＤ6740へと続く可能性が高いと考えられる。その調査では、溝ＳＤ6740の規模は、幅約２m、深さ約1.5mと記録されている。溝底の標高から、基本的に北（北西）から南に流れていたと考えられる。埋土は、砂や砂礫堆積で構成されており、当調査検出の溝ＳＤ157と共通する。また、検出面から溝底までの肩の落ち込みも急傾斜で、類似点の一つに数えられる。遺物は、溝ＳＤ157・溝ＳＤ6740とも共通する特徴の土器類が出土しており、弥生時代後期の所産と考えられる。

第３章　出　土　遺　物

１　土器・瓦類

当調査では、弥生時代後期から近・現代までの土器や瓦類が出土した。しかし、時期的な連続性はなく、時代経過の変遷が捉えられるものではなかった。そこで、時代ごとに区切って代表的な出土土器を掲載することにした。また、ここで扱う時代は、基本的に開田城期以前とした。

（１）開田城期前後の土器

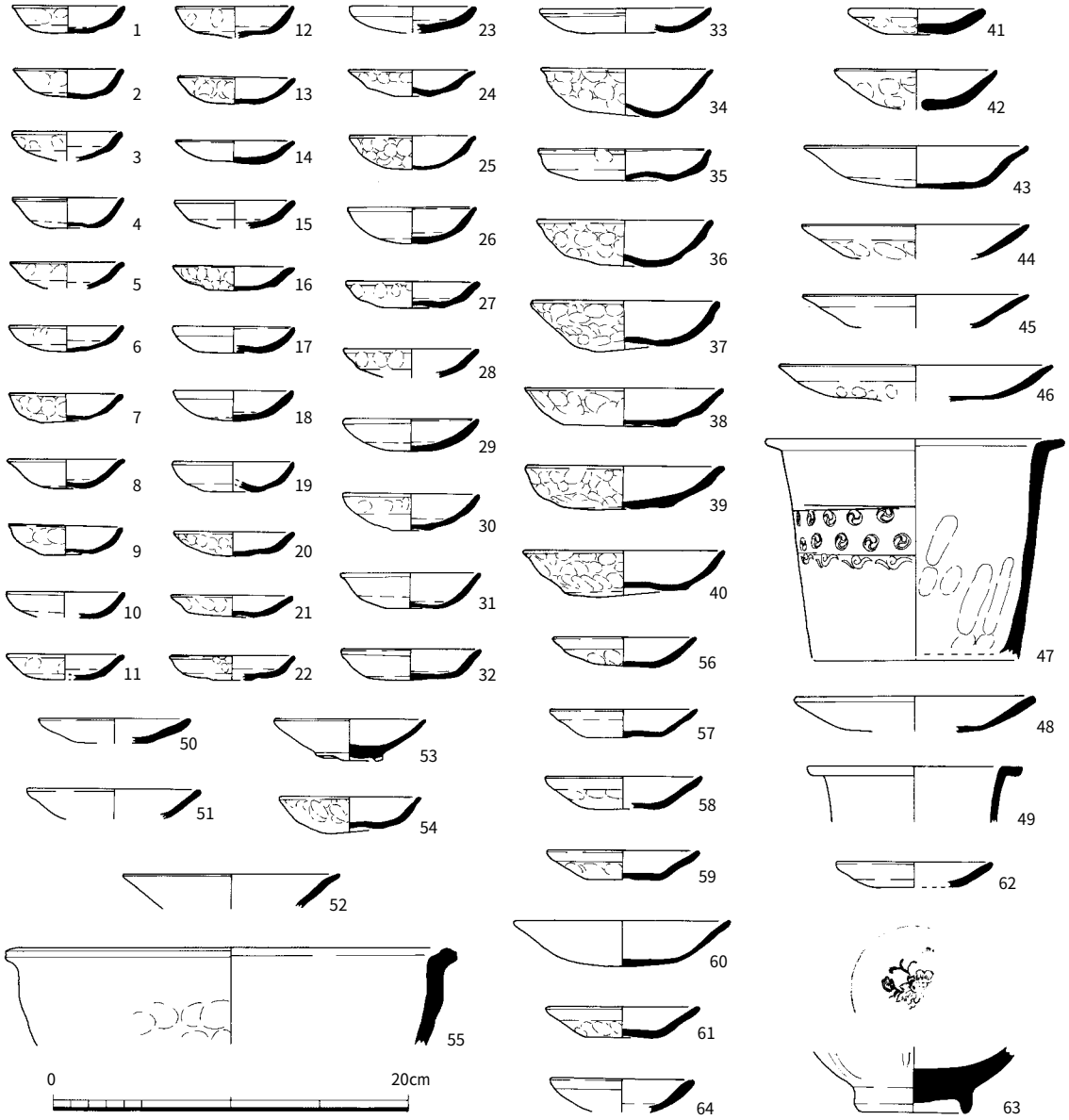
15～16世紀頃の土器（第32図、図版24・25・巻頭図版(2)）は、Ｂ調査区井戸ＳＥ09・土坑ＳＫ18、Ｃ調査区南辺堀ＳＤ05、Ｅ調査区土坑ＳＫ48・西辺堀ＳＤ43、Ｆ調査区西辺土塁ＳＡ70構築土・溝ＳＤ43、Ｇ調査区北辺土塁ＳＡ71構築土などから出土した。その大部分は土師器皿で、伴出した土器類には、古いものも含まれていた。これらの出土土器の中で、土塁構築土出土土器は、開田城造成時以前とすることができる。中でも最も新しいものは、開田城構築期により近い時期に捉えられる。堀下層出土土器は、開田城機能時以後に位置付けられる。しかも、時代背景から、新しくても16世紀後半以前という幅で捉えられる。なお土師器皿分類は、基本的に勝龍寺城土師器皿分類[6]を踏襲した。

井戸ＳＥ09出土土器　土師器の皿（50～52）と鍋（55）、白磁皿（53）などがある。土師器皿は、Ｈ形態（平底から屈曲し、外傾して広がる口縁部をもつもの）で、口径9.8㎝以下の小型（50・51）と、口径約12.2㎝の大型（52）がある。52は、直線的に広がる口縁の端部を外反気味に処理ししている（Ｈ１形態）が、50・51は、外反気味に広がる口縁の端部を内湾気味に処理している（Ｈ２形態）。この違いは、胎土にも共通し、52は石粒の少ない均一な粘土を用いている（１群）のに対し、50・51には、砂粒が混じる。52は胎土１群の中でも、色調がかなり白い特徴をもつ。51には雲母・赤色粒子などが混じるが、きめ細かい粘土を用いている（２群）。50には雲母・石英・長石などが多く砂質感がある（３群）。このような土師器皿の形態的特徴は、15世紀後半から16世紀前半の所産と考えられる。53の白磁皿は、高台の畳付き部を４箇所抉った特徴ある底部をもつもので、全面に施釉されている。内面見込みには、高台と同じ特徴をもつ形に釉が剝がれており、同形態の製品を重ね焼きしたことが分かる。共伴した土師器皿と同時期の所産と考えられる。

土坑ＳＫ18出土土器　土師器皿Ｉ形態（掌上成形の皿で、外面全面に指や掌の圧痕が見られ、口縁部ナデを施さず、内面のみナデ調整を施すもの）の完形品が１点ある（54）。口縁端は水平な正円をなさず歪である。底部から口縁部まで滑らかに内湾し、底部と口縁部の境が不明瞭な形態である。口径約８㎝、器高約2.1㎝を測り、胎土は２群の特徴をもつ。

南辺堀ＳＤ05出土土器　土師器皿のＩ形態が多く、他にＨ形態の29・33とＫ形態（掌上成形の皿で、外面に指や掌の圧痕が残る。口縁部をヨコナデするが、端部は水平正円にならず、かなり歪である。Ｉ形態と比べて厚手。）の６・14・17・18・23がある。これらは大きさにより、1～

33・35と、34・36～40の大小に分けられる。口縁が水平正円でなく、かなり歪なため、詳細な大きさの違いは図に表現しきれなかった。現物比較による観察では、小型品は、口径６㎝前後のもの（１・３～５・７～24・27・28・30～32）と、口径８㎝前後のもの（２・６・25・26・29・33・35）に細分でき、大型品は、口径10㎝前後のもの（34・36）と、口径11㎝前後のもの（37～40）に細分できる。胎土の特徴は、大多数が砂粒の少ない１群の特徴をもつが、52に比べて橙色が強い。胎土に１群以外の特徴をもつものには、６・14・17・18・23・29・33がある。６は、２群の胎土で、口縁部外面に軽いナデが見られる。14は、３群の胎土で、黄橙色に焼き上がり、赤色粒子が多く、特徴ある個体である。17は、51と酷似する３群の胎土で、雲母の含有量が多く、口縁部外面に軽くナデ調整を施している。18は、胎土と成形手法が６と酷似する。23は、３群の胎土で、雲母が多く含まれている。形態は、他に比べて厚手で、外面に口縁部ナデが施されている。29は、２群の胎土で、雲母の細粒が多く、赤色粒子も少し含まれている。形態は整っており、



第32図　開田城期前後の土器実測図（1/4）

ほぼ水平な正円に近い口縁に成形している（Ｈ１形態）。33は、２群の胎土で、赤色粒子や雲母を僅かに含む。口縁部は外反気味に広がり、端部は内湾気味に処理している（Ｈ２形態）。土師器皿は図化した以外にかなりの量が出土したが、他の器形に図化できる同時期の土器類はなかった。これらが出土した遺構が、開田城南辺堀下層堆積であることから、1470（文明２）年頃以後で、15世紀末から16世紀初頭の一括性が高い土器群と考えられる。

土坑ＳＫ48出土土器　土師器皿（41～46）と瓦器火鉢（47）が出土した。土師器皿は、Ｈ１形態で、胎土が１群で白色～橙灰白色の44～46と、Ｈ２形態で３群の41・43、Ｋ形態で３群の42がある。42の内面には、ハケメ調整が施されている。口径は、９㎝前後である。43は、口径12.5㎝前後である。44・45は口径約12.8㎝、46は口径15.4㎝である。44～46は、形態の特徴と胎土が52に類似し、41・43は50・51に、42は 6・18・23に類似する。47の火鉢は、平底から直線的に立ち上がる筒状の体部をもち、口縁部は逆Ｌ字形に屈曲して短く水平に張り出す。体部のほぼ中位には巴文のスタンプが２列に巡らされ、その上下に文様帯区画としての沈線が各１条配され、その下段に間隔を空けずに雲文スタンプを１列巡らせている。底面の破損が大きく、脚台の有無は明らかでない。これらの土器群は、同時期の一括性が高いと考えられ、整った容姿の皿Ｈ１（44～46）が土師器皿の半数を占めることから、16世紀中葉から後葉と考えられる。

西辺堀ＳＤ43出土土器　Ｅ調査区西辺堀下層からは、土師器皿Ｈ１形態（48）や、陶器鉢の口縁部と思われるもの（49）などが出土した。48は、１群の胎土で、口径約13.5㎝を測る。

Ｆ調査区西辺堀下層からは、土師器皿Ｈ１形態（62）と青磁碗（63）などが出土した。62は、２群の胎土で、形態や調整手法も56・57などに類似する。口径は、約8.9㎝を測る。口縁部には油煙が付着しており、灯明皿として使用されていたことが分かる。器体は炭素を吸収し、色調は、明褐灰色に発色している。63は、厚い底部をもつもので、外面に蓮弁を配し、内面見込みに草花文の印刻が施されている。施釉は厚く、緑灰色に発色している。

当遺構出土土器は、出土量が少なく、しかも鎌倉時代の細片が多かった。青磁碗は、時期が遡る可能性がある。他の遺物は、出土遺構の性格から、1470（文明２）年頃以後で、15世紀末から16世紀初頭頃と考えられる。

西辺土塁ＳＡ70構築土出土土器　土塁構築土出土遺物の中で、最も新しい特徴を示す土器群が、56～61の土師器皿である。いずれもＨ形態で、２群の胎土である。口径8.1～8.9㎝の小型（56～59・61・65）と、口径12.2㎝の大型（60）がある。小型品は、いずれも橙灰白色で、精美な容姿に仕上げられている。これらは口縁部内面のヨコナデが明瞭に残り、底部からの屈曲も鋭い特徴も共通する。形態と調整手法の特徴から、Ｈ１形態に捉えられるが、58・59は、口縁部にＨ２形態の特徴を残している。61の口縁端部には、一箇所に油煙が付着している。60は、橙灰色の、Ｈ２形態である。56～61・65は、出土遺構の性格から、開田城構築時以前の所産と考えられ、1470（文明２）年以前の年代が与えられる。

北辺土塁ＳＡ71構築土出土土器　土師器皿Ｈ１形態（64）などが出土した。胎土は２群で、口径約８㎝の小型品である。容姿・調整手法とも、他のＨ１形態小型品に通じる。出土遺構の性格

から、開田城構築時以前の所産と考えられ、1470（文明２）年以前の年代が与えられる。

（２）平安・鎌倉時代の土器・瓦類

鎌倉時代の土器・瓦類（第33・34図、図版25・26・28）は、Ｅ調査区井戸ＳＥ85・西辺堀ＳＤ43、Ｆ調査区土坑ＳＫ73・井戸ＳＥ86・溝群（ＳＤ102、108、118、128）・柱穴群（Ｐ356、372、390、397、404、420、450、451、454、463）・西辺土塁ＳＡ70構築土、Ｇ調査区北辺土塁ＳＡ71構築土などの他、Ｂ調査区柱穴群や土坑などから出土した。

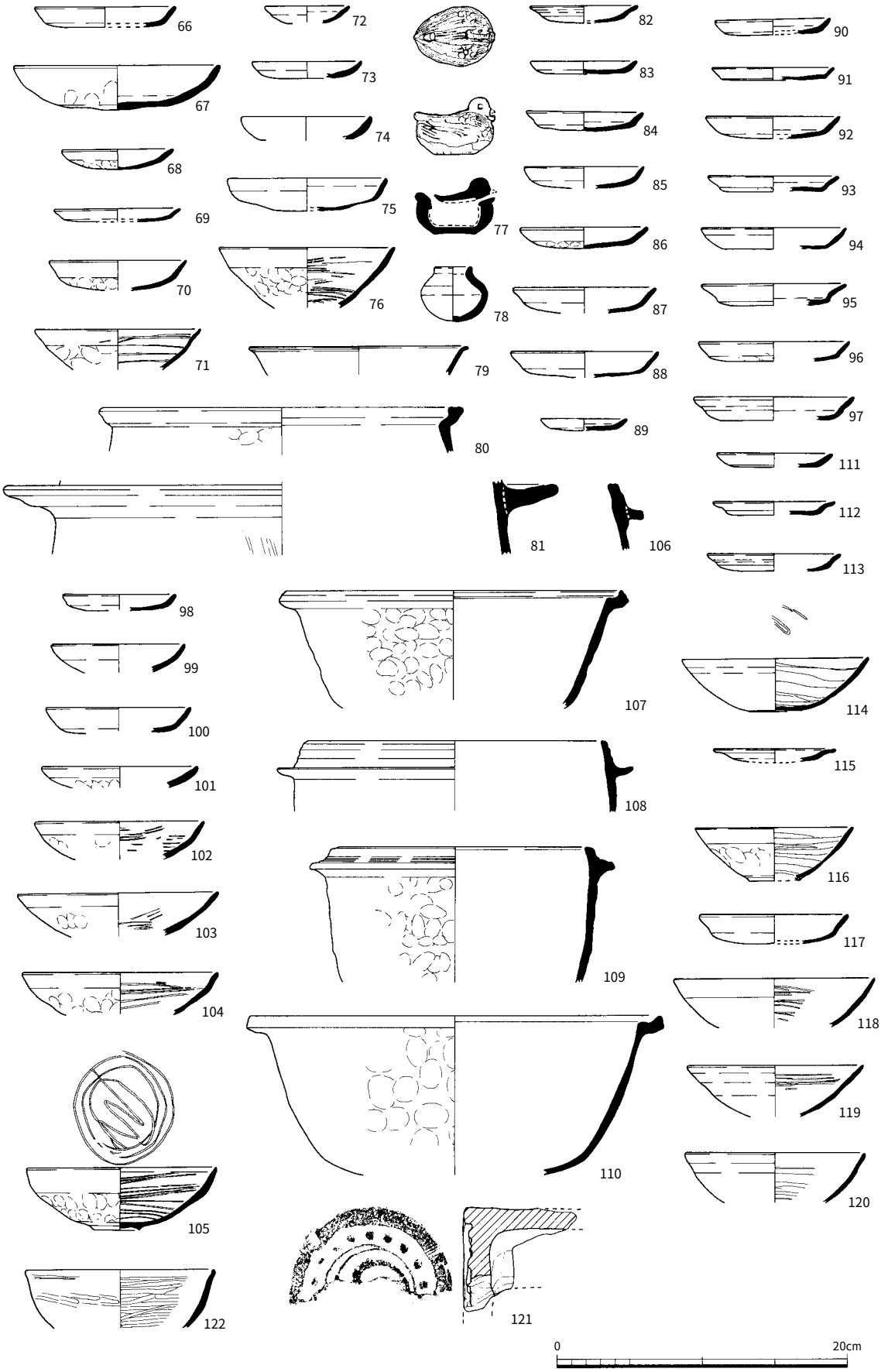
平安時代の土器は、Ｄ調査区柱穴Ｐ442やＦ調査区溝ＳＤ108から出土したものなどがある。

井戸ＳＥ85出土土器　土師器皿と瓦器椀などが出土した。土師器皿は、口径約８㎝前後の小型（68・69）と、約9.4㎝の大型（70）に区分できる。口縁部は、強いヨコナデにより外反気味に短く立ち上がらせている（Ｇ形態）。69は、器壁が薄くつくられている。瓦器椀（71）は、器壁の厚さ約2.5㎜で、均一につくられたもので、口縁端部は強く撫で、尖り気味に丸くおさめる（Ｃ形態）。内面には、細く粗いヘラミガキが施されている。口径は11.4㎝を測る。

西辺堀ＳＤ43出土土器　土師器皿、瓦器椀、瓦器羽釜、瓦器鉢などが出土した。土師器皿は、Ｇ形態が多くあるが、図化できるものはなかった。瓦器椀（123）は、口縁部Ｃ形態で、器壁は薄く、内面のヘラミガキは粗い。口径は、13.2㎝を測る。羽釜には、口径約16㎝の小型品（124）と、口径約26㎝の大型品（125）がある。いずれも直立する口縁部の外面に強いヨコナデを施し、口縁端面は強いヨコナデで鋭く止める。124の鍔部は、低い台形の突帯状を呈し、125の鍔部は、厚さ８㎜程度で、約2.4㎝張り出し、端部は丸く処理する。瓦器鉢は、底径約30㎝の大型品底部片で、底面に石英を主とした砂粒が全面に見られる。体部外面の下端近くには１帯の櫛描直線文が巡らされ、１箇所に円形浮文が加飾されている。

土坑ＳＫ73出土土器　土師器皿・小型壺・鍋、瓦器椀・羽釜、白磁皿・碗、陶器水滴などが出土した。土師器皿は、いずれもＧ形態で、口径８㎝前後の72・73、口径11㎝前後の74・75に区分できる。小型壺（78）は、口径2.6㎝、器高3.8㎝の小型品で、球形に近い体部に短く立ち上がる口縁部をもつ。色調は、瓦器断面のように灰白色で、砂粒は少ない。鍋（80）は、直立に近い体部から屈曲させて受口にしたもので、口径約25㎝を測る。橙灰色に焼かれている。瓦器椀（76）は、器壁が厚さ３㎜前後と厚く、口縁部口縁端部は丸くおさめるＢ形態を呈する。内面のヘラミガキは細く粗い。口径は、約12㎝を測る。羽釜（81）は、直径約30㎝の体部に厚さ約1.2㎝の鍔を約４㎝張り出す。端部は丸く処理する。白磁皿（79）は、厚さ約３㎜前後の薄い器壁で、内湾する器体の口縁端部を外反させ、丸く処理する。釉は、灰白色に発色している。この白磁皿は、西辺土塁裾に掘られた溝ＳＤ122からの紛れ込みの可能性があり、16世紀頃まで降る可能性がある。白磁碗は小片で図化できなかったが、太い玉縁口縁をもつものである。釉は、白色に発色し、貫入や釉ハゼが見られる。水滴（77）は、褐釉製品と思われるもので、カモなどの水鳥を意匠にしている。上嘴を欠くが、ほぼ完形で、背部と口部に穿孔がある。胸部と両翼の付け根の部分には爪形文を鱗状に配し、両翼や体部は櫛描で羽を表現している。

井戸ＳＥ86出土土器　土師器皿、瓦器椀・羽釜などが出土した。土師器皿は、Ｇ形態（98～

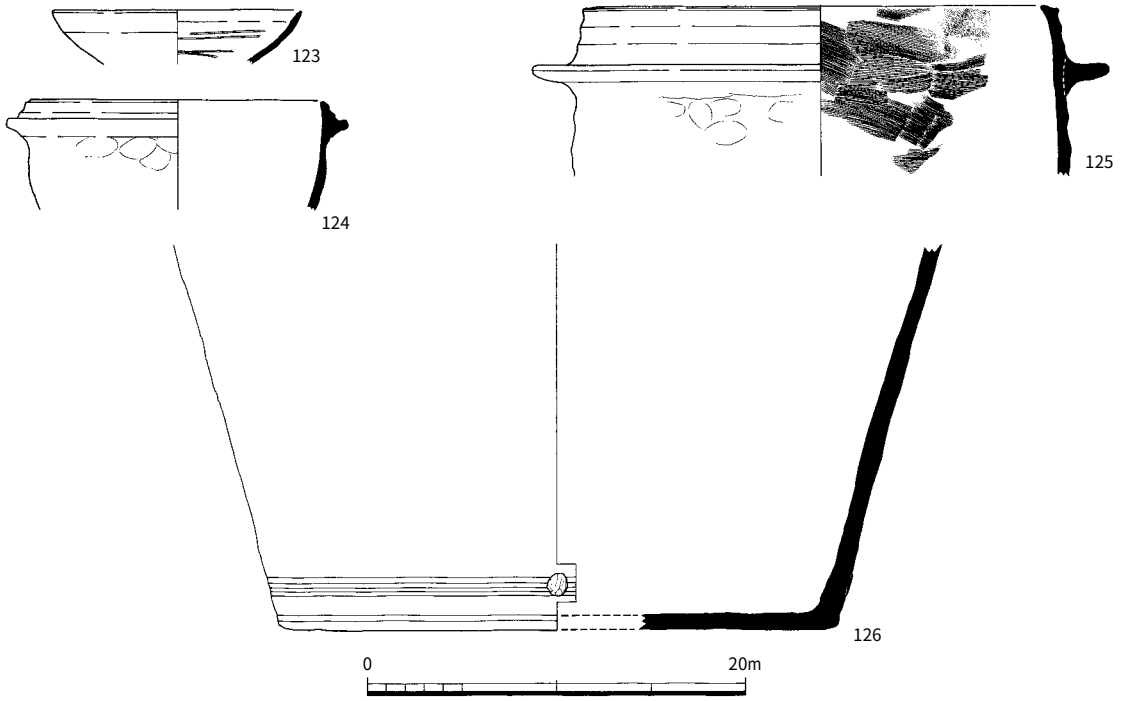


第33図　平安～鎌倉時代の土器・瓦実測図（1/4）

100）が大部分を占め、101はH形態になる可能性がある。101は、西辺堀ＳＤ43からの紛れ込みの可能性がある。G形態は、口径7.8cmの小型品（98）と、口径10cm前後の大型品（99・100）に分けられる。瓦器椀（102～105）は、いずれも器壁が３mm前後とやや厚く、口縁部B形態で、内面のヘラミガキは粗い。102は口径11.6cm、103～105は口径13～13.6cmを測る。105は、内面のヘラミガキが太さ約１mm前後と太く、内面見込みのミガキは鋸歯状に施す。底部には、断面三角形の低い高台が、歪な形状で貼り付けられている。口径13cm、器高4.4cmを測る。羽釜（106）は、厚さ約５mmの鍔部が、約１cm張り出し、断面長方形を呈する。口縁部の外面には強いナデを施し、端部はナデ調整で面をつくりだしている。口径20cm前後になると思われる小型品の小片である。

溝群出土土器　溝ＳＤ102からは、土師器皿G形態（91）などが出土した。91は、口径8.4cmを測る。溝ＳＤ108からは、土師器皿（115）と瓦器椀（116）などが出土した。土師器皿（115）は、口縁部が水平近くにまで外反して広がり、端部を内側に巻き込むように丸く処理したE形態である。平安時代の、いわゆる「て」の字皿である。口径約8.5cmを測る。瓦器椀（116）は、口縁部C形態で、器壁が薄く、内面のヘラミガキは細く粗い。底部には高さ１mmに満たない断面三角形の高台を巡らす。口径約11cm、器高3.7cmを測る。溝ＳＤ118からは、土師器鍋（110）などが出土した。110は、受け口状口縁部をもつもので、口径28.1cm、器高10.9cmを測る。黄灰色の器壁外面に煤が付着する。溝ＳＤ128からは、土師器皿G形態（97）などが出土した。口径11cmを測る。

柱穴群出土土器　柱穴Ｐ356からは、土師器皿G形態（89・90）などが出土した。89は小片で、口径は不確定要素が強い。90は、口径約８cmを測る。柱穴Ｐ372からは、瓦器椀（120）などが出土した。120は、口縁部C形態で、薄い器壁で、内面には細く粗いヘラミガキが施されている。



第34図　西辺堀ＳＤ43出土土器実測図（1/4）

口径12.5㎝を測る。柱穴Ｐ390からは、土師器皿Ｇ形態（95）などが出土した。95は、口径約10㎝を測る。柱穴Ｐ397からは、土師器皿Ｇ形態（92）などが出土した。92は、口径約9.3㎝を測る。柱穴Ｐ404からは、瓦器羽釜（109）などが出土した。109は、Ｅ調査区西辺堀ＳＤ43出土の小型羽釜（124）に類似する容姿で、口径17.8㎝を測る。柱穴Ｐ420からは、瓦器椀（119）などが出土した。119は、口縁部Ｃ形態で、器壁が薄く、内面には粗いヘラミガキを施す。柱穴Ｐ450からは、土師器皿Ｇ形態（111から113）や瓦器椀（114）などが出土した。111の土師器皿は、口径約８㎝で、口縁部が短く立ち上がる。112・113の土師器皿は、口径8.5㎝前後で、口縁部が水平近くにまで広がる。瓦器椀（114）は、口縁部Ｃ形態で、器壁が薄く、内面のヘラミガキは細く粗い。底部には、高さ１㎜以下の不定型な役立たない高台をも40つ。口径12.9㎝、器高3.6㎝を測る。柱穴Ｐ451からは、土師器皿Ｇ形態（117）や瓦器椀（118）などが出土した。土師器皿（117）は、口径10.3㎝を測る。瓦器椀（118）は、口縁部Ｃ形態で、器壁は薄く、内面のヘラミガキは細く粗い。柱穴Ｐ454からは、土師器皿Ｇ形態（96）などが出土した。96は、口径10.4㎝を測る。柱穴Ｐ463からは、土師器皿Ｇ形態（93・94）などが出土した。93は、口径９㎝、94は口径10㎝前後である。

西辺土塁ＳＡ70構築土出土土器・瓦　土師器皿・鍋、瓦器羽釜（108）、白磁碗、軒丸瓦（121）などがある。土師器皿（82～88）は、全てＧ形態で、口縁部が水平近くにまで開くもの（82・84）と、外傾する立ち上がりをもつもの（83・85～88）がある。口径は、7.4㎝前後のもの（82・83）、８～９㎝のもの（84～86）、10㎝前後のもの（87・88）がある。土師器鍋（107）は、外傾して広がる器体の上端に、屈曲する受口をつくり出したもので、110と同形態である。灰白色の器体外面に煤が付着する。口径は、約22.8㎝を測る。瓦器羽釜（108）は、口縁部外面に強いヨコナデを施すもので、端部には、外傾する端面をつくり出している。鍔部は、厚さ約５㎜で、約1.5㎝張り出し、端部は丸く処理する。口径は、約20㎝を測る。白磁碗は小片で図化できなかったが、太い玉縁口縁をもつものである。釉は、明オリーブ灰色に発色する。軒丸瓦（121）の瓦当面は、直径11㎝で、直径約6.15㎝の内区に右巴文、幅約1.5㎝の外区内縁に珠文を配している。外区外縁は幅約１㎝、高さ約３㎜を測る。巴数は３に、珠文数は16に復元できる。丸瓦部の内面には、布目圧痕が残る。当軒瓦は、開田城構築直前の15世紀末までの時間幅が想定でき、他の土器類より時代が降る可能性がある。

北辺土塁ＳＡ71構築土出土土器　瓦器皿や土師器皿などが出土した。瓦器皿（66）は、口縁部を強く撫でて平底から屈曲させ、外反気味に立ち上がらせている。内面には、ヘラミガキを施す。口径は、9.7㎝を測る。土師器皿（67）は、底部から滑らかに内湾させて口縁部となり、底部との境が不明瞭な個体で、口縁部はヨコナデを施し、端部は丸く処理する（Ａ形態）。口径約14.7㎝を測る。

柱穴Ｐ442出土土器　黒色土器Ａ類（122）などがある。口径は小片のため確定できないが、平安時代の椀または杯と考えられる。当調査では、数少ない平安時代の土器であり、115の土師器皿にともなう時期と考えられる。

（３）長岡京期前後の土器・瓦類

長岡京期の土器・瓦類（第35図、図版26・28）は、Ｄ調査区溝ＳＤ41・西二坊大路西側溝ＳＤ83・溝ＳＤ97・土坑ＳＫ101、Ｅ調査区柱穴Ｐ327、Ｆ調査区西二坊大路西側溝ＳＤ83・溝ＳＤ108・土坑ＳＫ136・土坑ＳＫ141・西辺土塁ＳＡ70下層、Ｇ調査区西辺土塁ＳＡ70下層・西二坊大路西側溝ＳＤ132などから出土した。

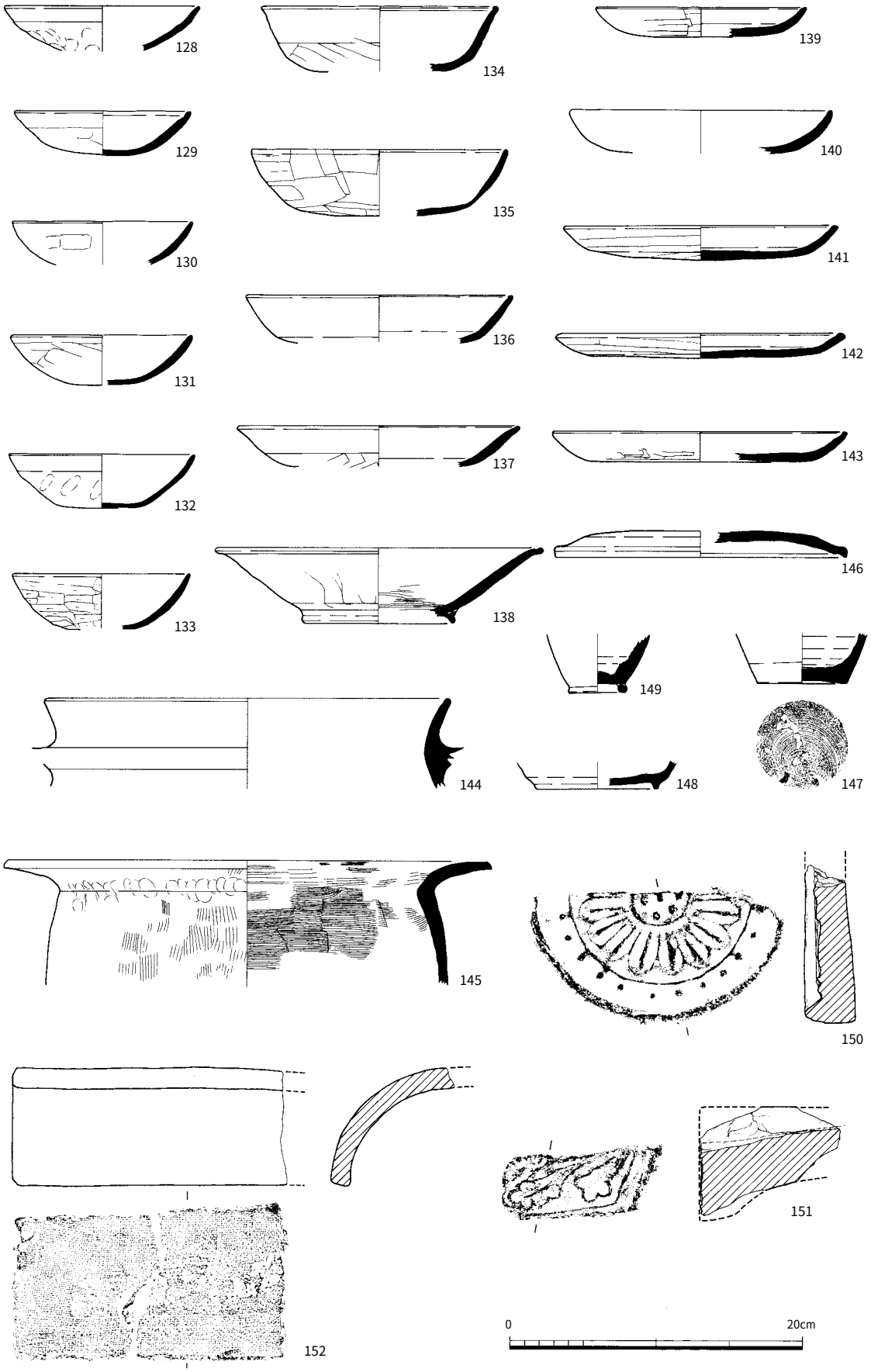
溝ＳＤ41出土土器　土師器皿などが出土した。140は、底部から滑らかに内湾して立ち上がる口縁部をもつ皿Ａで、口縁部は肥厚させずに丸く止める。口径約18㎝、高さ約３㎝を測る。外面の傷みが激しく、調整不明。

西二坊大路西側溝ＳＤ83・132出土土器・瓦　Ｄ調査区からは土師器椀Ａ（129）・皿Ａ（141・142）、須恵器杯Ｂ（148）・杯蓋（146）・壺（147）、軒瓦（150）などが出土した。Ｆ調査区からは、土師器杯Ａ（136）、須恵器壺Ｍ（149）などが出土した。Ｇ調査区からは、土師器皿Ａ（139）、杯Ａ（137）・羽釜（144）などが出土した。土師器椀Ａ（129）は、外面を底から口縁端までヘラケズリ調整する（ｃ手法）。口縁端部には、油煙が付着している。口径12.1㎝、器高3.1㎝を測る。土師器杯Ａ（136・137）は、底面をヘラケズリ調整し、口縁部には幅広くヨコナデを施している（ｂ手法）。口径18㎝前後で、137は、図より口縁部の外傾角が立ち上がり、口径も縮む。136の底面には、ヘラ記号と思われる１本の直線が見られる。土師器皿Ａ（139・141・142）は、いずれもｃ手法で調整する。139は、口径14.4㎝、器高２㎝を測る。141は口径18.8㎝、器高2.4㎝、142は口径19.8㎝、器高1.8㎝を測る。土師器羽釜（144）は、角閃石を多く含む生駒西麓産で、鍔部から外反する口縁部をもつ。口縁端部は丸く処理する。口径は、約27㎝を測る。須恵器杯Ｂには大小あり、148は小型品である。須恵器杯蓋（146）は、口縁部を屈曲させて、端部を下方に摘み出すように少し肥厚させて端面をつくり出したもので、口径19.8㎝を測る。壺には、糸切り底の底部（147）と、高台を貼り付けた底部（149）がある。147の底面には、糸切り後にヘラの刺突が並んだ部分がある。記号なのか、偶然なのか明らかでない。149は、壺Ｍになると思われる。軒丸瓦（150）の瓦当面は、平城宮6133Ｄ型式の蓮華文である。器表面は黒灰色、断面は灰白色に焼かれている。

溝ＳＤ97出土土器　土師器椀Ａなどが出土した。130は、口径12.3㎝のｃ手法による椀Ａである。本来、西二坊大路西側溝埋没土器であった可能性がある。

土坑ＳＫ101出土土器　土師器椀Ａ（131・132）などが出土した。131はｃ手法で、口径12.7㎝、器高3.5㎝を測る。132は、外面の口縁端部にヨコナデ調整を施し、以下の器壁には、底部まで成形時の指や掌により押さえた凹凸をそのまま残す（ｅ手法）。器表面の残存状況が悪く、詳細な観察はできないが、外面のごく一部に、粗いヘラミガキの痕跡が残る。口径約12.7㎝、器高3.7㎝を測る。

柱穴Ｐ327出土土器　土師器皿Ａが、全体の形をとどめて出土し、ほぼ完形品に復元できた（143）。口径20.4㎝、器高２㎝を測る。調整手法はｃ手法で、口縁端部は内側に丸く肥厚させている。



第35図　長岡京期前後の土器・瓦実測図（1/4）

溝ＳＤ108出土土器　土師器椀Ａ（128）・杯Ａ（135）・盤Ｂ（138）などが出土した。128の椀Ａは、ｅ手法で、口径約14.5㎝を測る。口縁部の外傾角は、図示より立ち上がる。135の杯Ａは、口径16㎝のｃ手法調整である。138の盤Ｂは、大きく外傾して広がる口縁部の外面を、縦方向にヘラケズリしている。底部には、断面台形の低い高台が、張り出し気味に貼り付けられている。口径22.5㎝、器高5.2㎝を測る。

土坑ＳＫ136出土瓦　丸瓦などが出土した。152は、内面に布目圧痕を残す。色調は、黄灰色に白く焼かれている。

土坑ＳＫ141出土土器　土師器甕の口縁部（145）が出土した。口径約32.8㎝を測る。体部から鋭く屈曲して大きく外反する口縁部をもつ。端部は、僅かに上方へ肥厚させて外傾する面をつくりだしている。体部外面は粗い目のタテハケ、体部内面は細かい目のヨコハケを施している。口縁部は、内面に粗い目のヨコハケを施して、内外面をヨコナデしている。胎土の粒子は細かく滑らかで、黒色チャート・石英などの粗い砂粒や赤色粒が混じる。色調は、表面橙灰色で白っぽく、断面黒色になっている。

西辺土塁ＳＡ70下層出土土器・瓦　Ｆ調査区から土師器椀Ａ（133）、土師器杯Ａ（134）、軒平瓦（151）が出土した。このうち土師器２点（133・134）は、土塁下層の中世包含層（中世溝群検出面の構成土層）出土であり、出土地点から、133は溝ＳＤ108、134は土坑ＳＫ136に伴う遺物の可能性がある。133は、ｃ手法で、口径12.2㎝、器高3.8㎝を測る。134はｂ手法で、口縁端部を内側に巻き込むように丸く処理し、内面側に沈線が巡る。口径18.2㎝、器高4.4㎝を測る。他にＧ調査区からは、緑釉陶器カマド（127）などが出土した。黄灰色のきめ細かい素地に、淡緑色の薄い釉がかかる。軒平瓦（151）は、平城宮6801Ａ型式の飛雲文である。器表面黒灰色、断面灰白色に焼き上がっている。

（４）飛鳥・奈良時代の土器

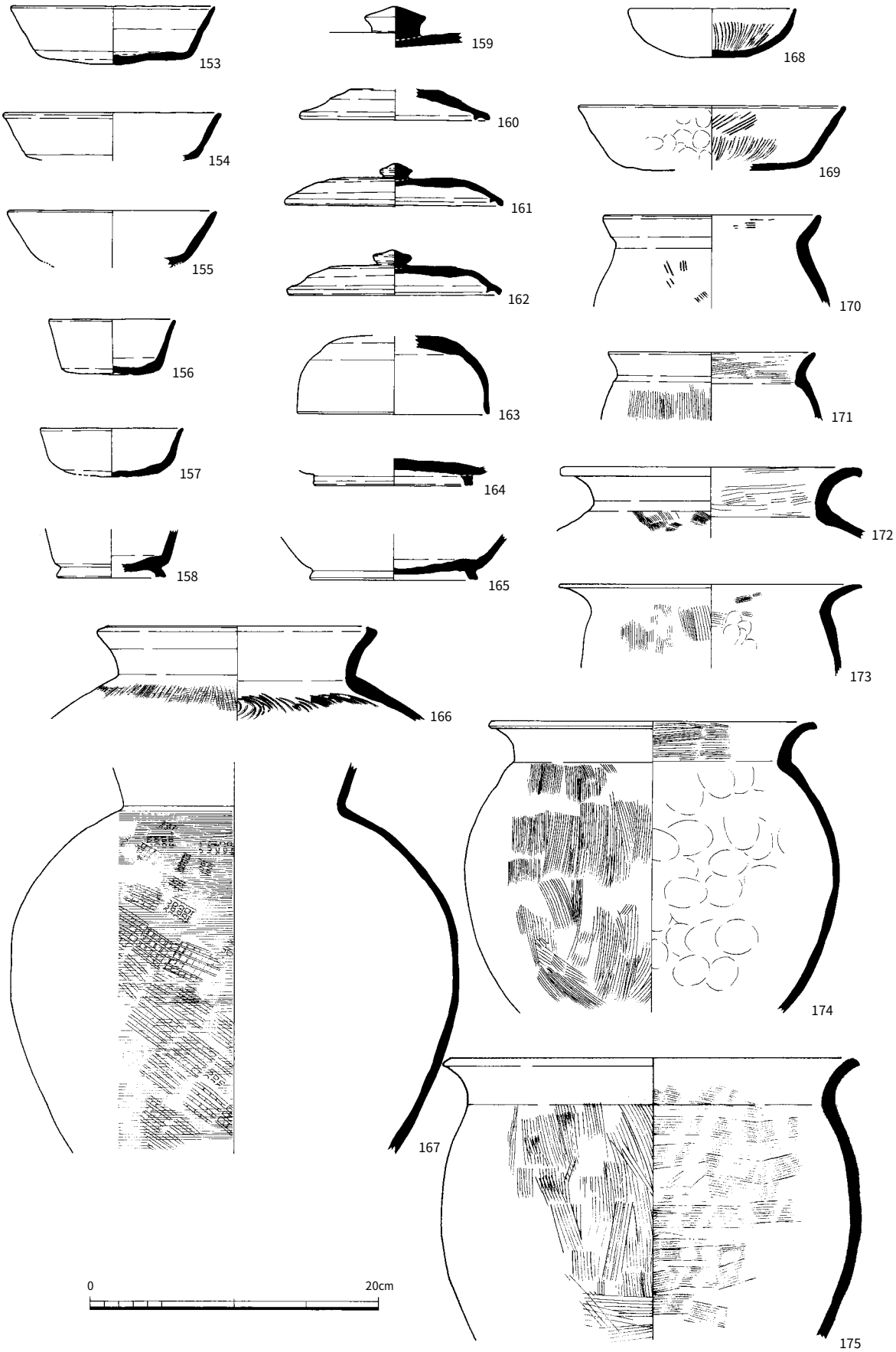
飛鳥・奈良時代の土器（第36図、図版27）は、Ｄ調査区土坑ＳＫ96・溝ＳＤ98・長岡京跡西二坊大路西側溝ＳＤ83、Ｆ調査区溝ＳＤ108・柱穴Ｐ475・土坑ＳＫ136・西辺土塁ＳＡ70下層、Ｇ調査区溝ＳＤ130・北辺土塁ＳＡ71下層などから出土した。

土坑ＳＫ96出土土器　須恵器杯Ｂ（158）、杯蓋（159）などが出土した。158は、底径7.6㎝の小型品で、高台が張り出す。器表面は青灰色、断面は鈍い橙褐色で硬く、外面に褐色の自然釉がかかる。159は、直径約4.2㎝のつまみ部である。淡灰色で硬く、器表面は滑らかである。

溝ＳＤ98出土土器　須恵器杯Ｂなどが出土した。155は、口径14.5㎝で、高台部を欠く。灰白色で、やや軟質。

西二坊大路西側溝ＳＤ83出土土器　須恵器杯Ｂなどが出土した。165は、底径11.6㎝で、灰白色に焼き上がり、焼きはやや軟質。

溝ＳＤ108出土土器　須恵器甕などが出土した。168は、体部外面を粗い格子目のタタキで成形した後、カキメ調整を施している。内面は、丁寧なナデ調整で仕上げている。淡灰色に焼き上がっている。ここに掲載したが、体部外面の特徴や伴出土器から、長岡京期以後の所産である可能



第36図　飛鳥～奈良時代の土器実測図（1/4）

性がある。

柱穴Ｐ475出土土器　須恵器杯Ｂなどが出土した。164は、底径11cmの底部片で、断面台形の低い高台をもつ。淡灰色に硬く焼き上がっている。

土坑ＳＫ136出土土器　土師器甕などが出土した。172は、「Ｃ」字形に外反する口縁部をもつもので、端部を僅かに下方に肥厚させて狭い端面をつくり出している。体部は、外面に細かいタテハケ、内面にナデを施す。口縁部は、内面に粗いヨコハケ整形後、内外面をヨコナデ調整する。色調は黄橙色で、粒子の細かい粘土に石英・長石砂粒や赤色粒が混じる。

西辺土塁ＳＡ70下層出土土器　須恵器では、杯Ａ（153・154・156）、杯蓋（160～162）、壺蓋（163）、土師器では、杯Ｃ（169）、甕（171・173・174）などが出土した。153は、口径10.3cm、器高4.2cmを測る。暗灰色、硬質に焼き上がっている。154は、口径15.2cm、器高3.3cmを測る。灰白色で、やや軟質に焼き上がっている。156は、口径8.9cm、器高3.9cmの小型で深い器形である。灰白色・硬質で、黒色粒子が多い。160は、口径13.2cmで、つまみ部を欠く。口縁部には、身受けの短い返りをもつ。色調は灰色で、天井部に緑褐色の自然釉がかかる。160・161は、口径14.7～15cm、器高3.1cmで、暗灰色、硬質である。163は、口径13.4cm、器高5.4cmで、灰色に焼き上がっている。169は、口径18.6cm、器高4.5cmで、口縁部内面に放射状暗文が２段に配されている。外面は、口縁部上半だけをヨコナデするａ手法である。口縁端部は、内側に巻き込むように丸く処理し、内面に沈線が巡る。明黄橙色で、胎土はきめ細かく、長石細砂粒が混じる。胎土の特徴から、搬入土器と考えられる。171は、体部から外反気味に短く立ち上がる口縁部をもち、端部は尖り気味に丸くおさめる。体部外面はタテハケ、体部内面はナデ調整で、口縁部には内面ヨコハケ後にヨコナデを施す。173は、体部から外反して水平近くにまで広がる口縁部をもつ。橙灰白色で、粒子の細かい粘土素地に、石英・チャート・赤色粒子が混じる。長胴形態になると考えられる。174は、172に類似する形態特徴をもつ。

溝ＳＤ130出土土器　土師器甕などが出土した。170は、体部から屈曲して内湾しながら短く広がる口縁部をもつ。橙褐色で、胎土にチャート・石英砂粒が多く含まれる。

北辺土塁ＳＡ71下層出土土器　須恵器杯Ｇ（157）・甕（166）、土師器杯Ｃ（168）・甕（175）などが出土した。157は、口径9.9cm、器高3.4cmで、暗灰色、硬質に焼き上がっている。166は、体部外面に縦方向の平行タタキ目、内面に同心円当て具痕をもつもので、口径19.4cmを測る。口縁部は短く外傾して立ち上がる。端部は、内側に摘み出すように僅かに拡張して端面をつくり出す。灰色に硬く焼き上がっている。168は、内面に放射状暗文をもつもので、外面は、口縁部上端だけをヨコナデするａ手法である。口縁端部は、内側に巻き込むように丸く処理し、内面に沈線が巡る。明黄橙色で、胎土はきめ細かく、長石細砂粒が混じる。胎土の特徴から、搬入土器と考えられる。175は、体部から滑らかに外反して広がる口縁部をもつものである。体部外面はタテハケ、体部内面と口縁部内面はヨコハケを施し、口縁部内外面はヨコナデ調整する。端部は、外面側を摘み出すように僅かに拡張して端面をつくり出している橙灰白色で、少量の雲母が混じる胎土をもつ。

（５）古墳時代の土器

古墳時代の土器（第37図、図版27））は、Ｆ調査区土坑ＳＫ140とＧ調査区溝ＳＤ130などから出土した。図化できたのは須恵器のみで、土師器は明らかでない。

土坑ＳＫ140出土土器　須恵器杯H（178）、杯H蓋（177）、高杯（176）などが出土した。176は、短脚高杯の柱状部片で、円形透かしを３箇所に穿っている。外面は、カキメの後ロクロナデ調整を施している。177は、天井部と口縁部の境の外面に明瞭な段をもつ。口縁端部は、凹面をなす。口径12.4cm、器高4.8cmを測る。178は、口径10.4cm、器高5.2cmで、端部には沈線が巡る。

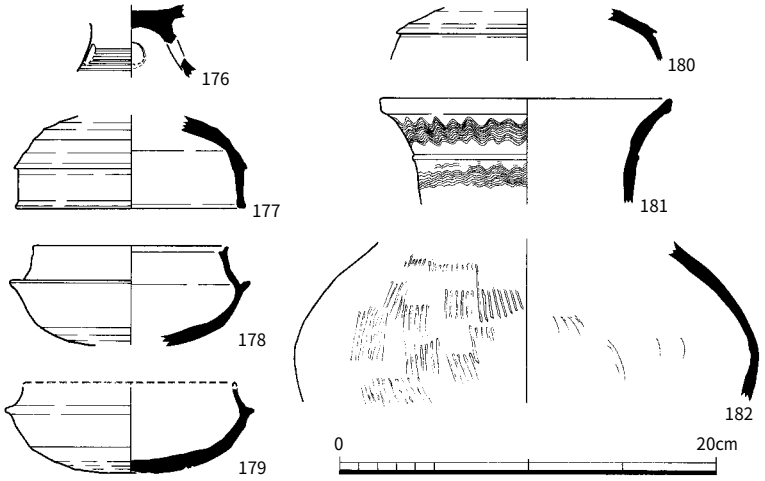
溝ＳＤ130出土土器　須恵器杯H（179）、杯H蓋（180）、甕（181・182）などが出土した。179は、口縁端部を欠くが、口径約11cm前後、器高4.5cm前後に推定できる。底部へラケズリのロクロ回転は、左回りである。180は、扁平な天井部をもつ蓋で、口縁端部を欠く。181・182は同一個体の可能性が高い。口縁部外面には、２帯の櫛描波状文を巡らせ、その間に低く鋭い断面三角形の突帯を配している。体部外面には、縦方向の平行タタキ目、内面には無文の当て具痕が見られる。内面は、丁寧なナデ調整で仕上げている。

（６）弥生時代の土器

弥生時代の土器（第38図、図版27）は、Ｄ調査区溝ＳＤ98、Ｅ調査区竪穴住居ＳＨ47、Ｇ調査区溝ＳＤ157・竪穴住居ＳＨ127などから出土した。

溝ＳＤ98出土遺物　数点の弥生土器が出土した。195は、壺の口縁部と考えられるもので、筒状の頸部に、大きく外傾する口縁部が付く。口縁端部は、僅かに上方に摘み上げるように肥厚させて端面をつくる。頸部内面にはヨコハケ、外面にはタテハケで調整する。この他は細片で、図化できなかった。

竪穴住居ＳＨ47出土遺物　弥生土器の小片が出土したが、図化できるものは少なかった。器形には、壺（183・184・188～190）、甕（187・191・193・194）、鉢（192）、高杯（185・186）などがある。壺の口縁部（183・184）は、いずれも二重口縁の広口壺である。183には、口縁の屈曲部と端部の外面に、刻目が巡る。また外面には、丁寧なヘラミガキが施されている。壺底部片には、小さい平底をもつものが多く（188・189）、底面中央が円形に窪んだもの（190）も見られる。高杯には、脚柱状部裾に円形透かしが３箇所に穿孔されているもの（185）と、柱状部の中空がほとんど無いもの（186）がある。甕は、外面に横または右上がりの斜め方向の平行タタキ目をもつも

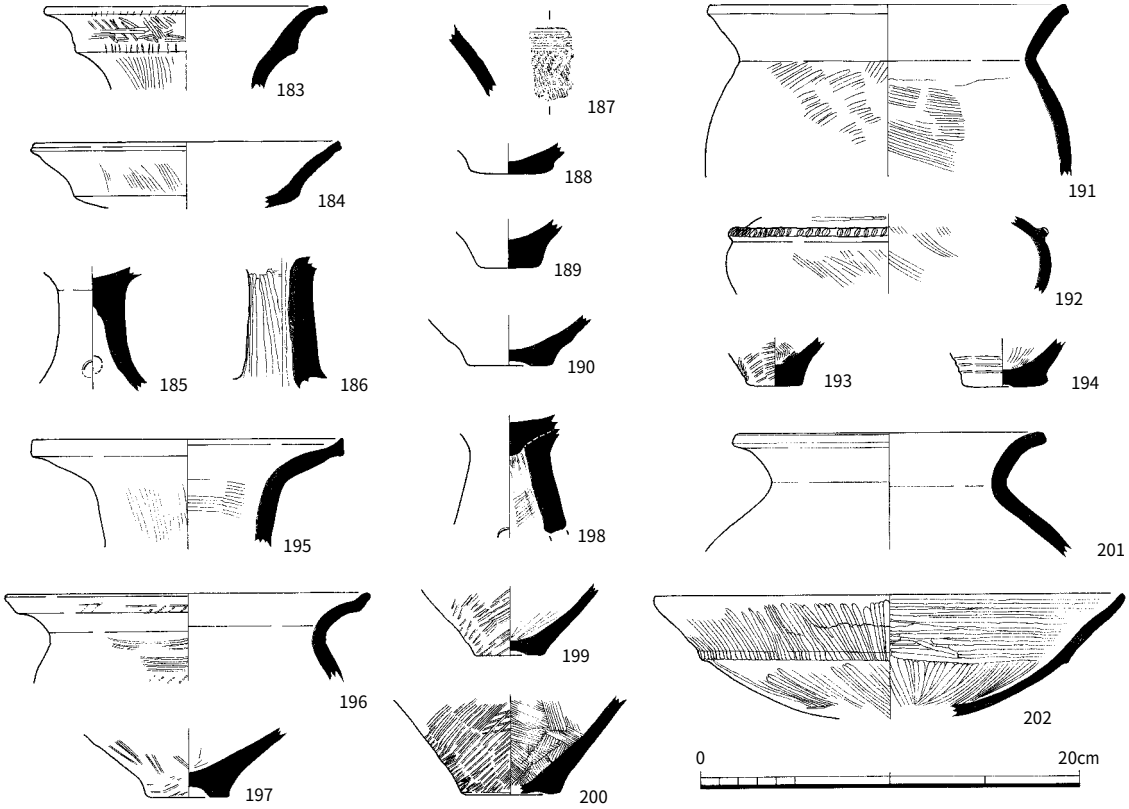


第37図　古墳時代の土器実測図（1/4）

のが多い（191・193・194）。また、体部外面上半部を、櫛描直線文と列点文で飾るもの（187）も少量ある。口縁部は、体部から「く」の字状に屈曲し、端部は肥厚させずに端面をもっておわるものがある（191）。鉢には、大きく膨らんだ体部に、刻目突帯を巡らすもの（192）がある。187や192は、近江地域の影響がうかがえる。

溝ＳＤ157出土遺物　甕（196・199）、壺（197）、高杯（198）などの弥生土器が出土した。196は、受け口状に屈曲する口縁部をもち、端部は丸くおさめている。口縁部外面には、櫛刺突による列点文が、体部上端には櫛描直線文が配されている。近江の影響を色濃く残す形態である。197の底部は、底面中央が窪む底部片で、外面は右上がりの並行タタキ成形後、タテハケ調整を施している。199の底部片は、外面を右上がりの並行タタキのままとしている。198の高杯脚部は、右上がりの並行タタキ成形後、丁寧なナデ調整で仕上げている。杯部中央は、円盤充填により、脚部の穴を埋めている。柱状部から裾部への屈曲部には、３個の透かしが配されている。

竪穴住居ＳＨ127出土遺物　弥生土器の壺（201）、甕（200）、高杯（202）などが出土した。壺（201）は、体部から滑らかに外反する口縁部をもつもので、端部は、肥厚させずに丸く処理している。体部内面はヨコハケ、外面はナデの後ヘラミガキを施している。200の甕底部片は、外面に右上がりの並行タタキ、内面にヨコハケが見られる。202は、高杯の杯部で、口縁部が全周する。杯部と口縁部の境には、外面に突帯が巡り、内外面のヘラミガキも区別していて、境が明瞭である。内湾している皿状の杯部から、外反して口縁部が広がり、端部近くで僅かに内湾させて、端部は丸くおさめる。ヘラミガキは、口縁部内面のみ横方向に施し、杯底部の内外面と口縁部外面には縦方向のヘラミガキを施している。



第38図　弥生時代の土器実測図（1/4）

２　石器・石製品類

石器・石製品類（第39～41、図版28(2)・29）には、旧石器時代、弥生時代、古墳時代、鎌倉時代、開田城期などのものがある。主なものには、剥片、砥石、石造物がある。

（１）旧石器時代の石器類

旧石器時代の所産と考えられるものには、サヌカイトの剥片（203～205）やチャートの剥片（206）がある。203は、重さ1.492ｇの剥片で、楔形石器の可能性がある。Ｆ調査区西辺土塁ＳＡ70構築土から出土した。204は、重さ5.342ｇの剥片である。Ｆ調査区西辺土塁ＳＡ70構築土から出土した。205は、片面に礫面を残し、裏面にポジティブな大剥離面のある横長剥片で、重さ8.020ｇを量る。Ｆ調査区西辺土塁ＳＡ70構築土から出土した。206は、赤橙褐色のチャート剥片で、重さ4.653ｇを量る。Ｅ調査区開田城西辺堀ＳＤ43から出土した。

（２）弥生時代の石器・石製品類

弥生時代の所産と考えられる粘板岩の剥片（207）や砂岩製の砥石（213）などがある。207は、重さ8.556ｇの小片で、Ｆ調査区西辺土塁ＳＡ70構築土から出土した。213は、長方形に近い形状の自然の礫を用いたもので、広い面と長側面に使用痕が見られる。Ｇ調査区柱穴状遺構Ｐ503から出土した。

（３）古墳時代の石製品類

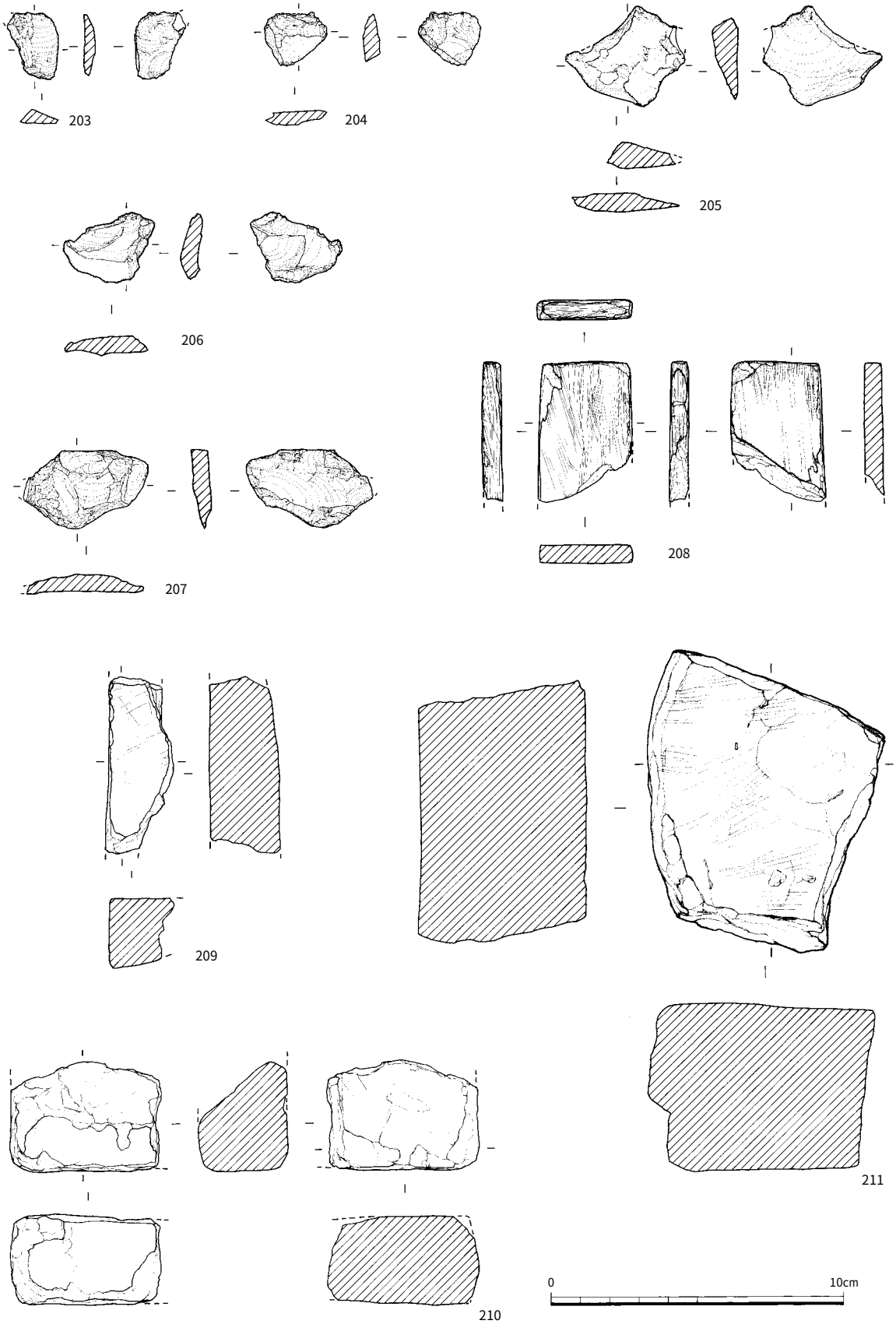
古墳時代の遺構から出土したものには、砥石の破片（211）などがある。211は、砂岩の自然石を用いたもので、広い面に使用痕が見られる。Ｇ調査区溝ＳＤ130下層から出土した。

（４）鎌倉時代の石製品類

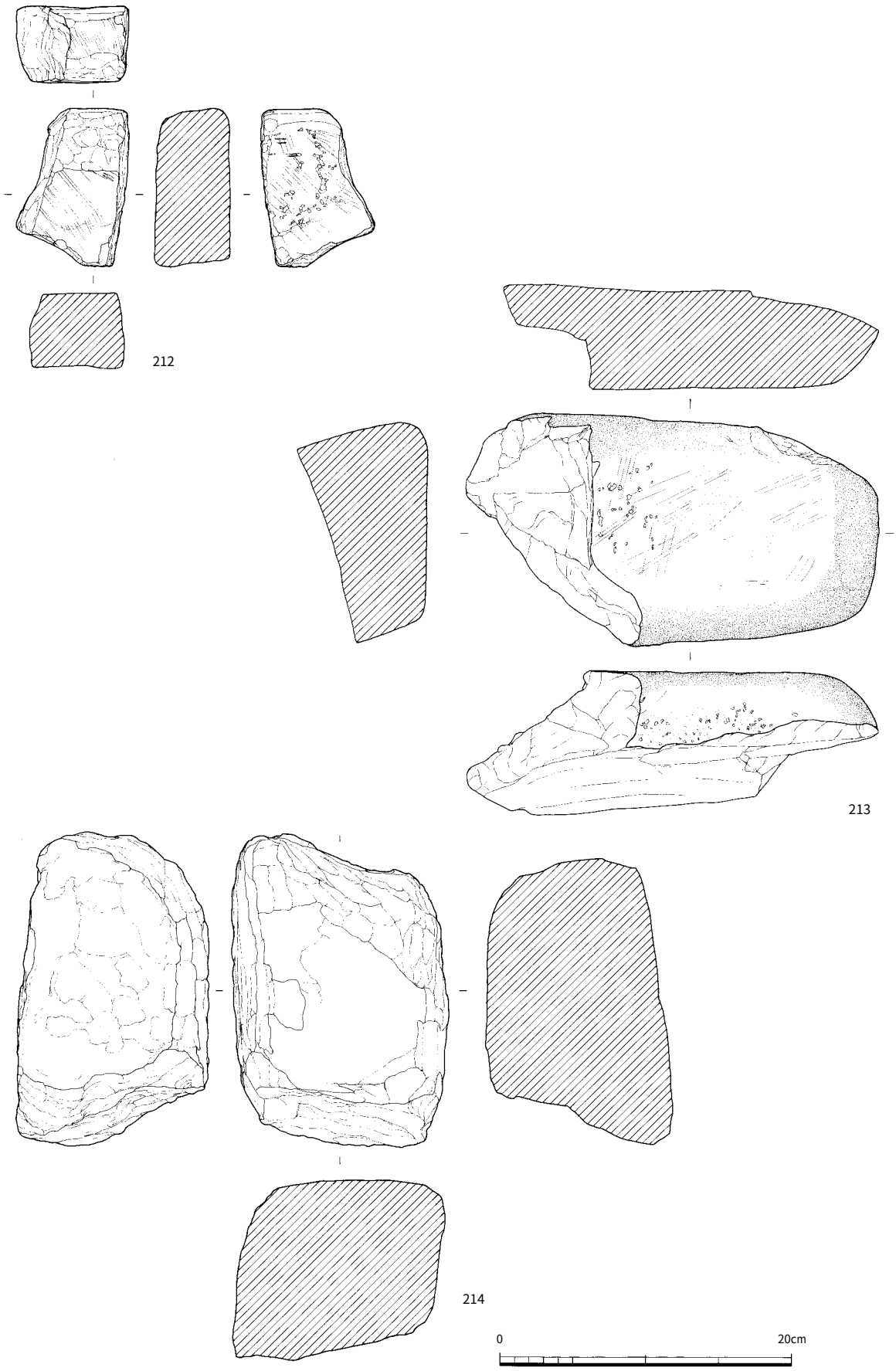
鎌倉時代の遺構から出土したものには、砥石（208～210）などがある。208は、粘板岩を長方形に加工した扁平な製品で、欠損する片側を除いて、各面に使用痕が見られる。使用面はきわめて滑らかで、鉄製品の仕上げ用と考えられる。Ｂ調査区柱穴Ｐ120から出土した。伴出遺物が無く、所属時期を決めがたいが、開田城以前の中世段階の所産と考えられる。209は、砂岩製の破片である。Ｇ調査区北辺土塁ＳＡ71下層から出土した。210は、４面に鑿の痕が残る破片である。表面が赤褐色から黒色に変色しており、火を受けた可能性がある。石材は、斑糲岩かと思われる。Ｇ調査区溝ＳＤ146から出土した。

（５）開田城期の石製品類

開田城期の砥石（212）・石造物（214・215）などがある。212は、細かい粒子の砂岩製破片で、表裏面と１側面に使用痕が見られる。使用痕のある１側面には、赤褐色に変色した部分があり、火を受けたと考えられる。Ｂ調査区井戸ＳＥ09から出土した。214は、花崗岩製の石造物片と考えられるものである。Ｂ調査区井戸ＳＥ09の井戸側に組まれていた石材の一つである。表面の風化が激しく、取り上げの段階で表面や角がかなり崩れた。本来、一辺約12㎝の立方体で、五輪塔地輪部の可能性がある。215は、凝灰岩製の石造物である。Ｂ調査区井戸ＳＥ09の井戸側に組み込まれていた。形状は、幅・厚さが約17㎝の角柱状に加工され、１端に直径約15㎝、高さ約３㎝

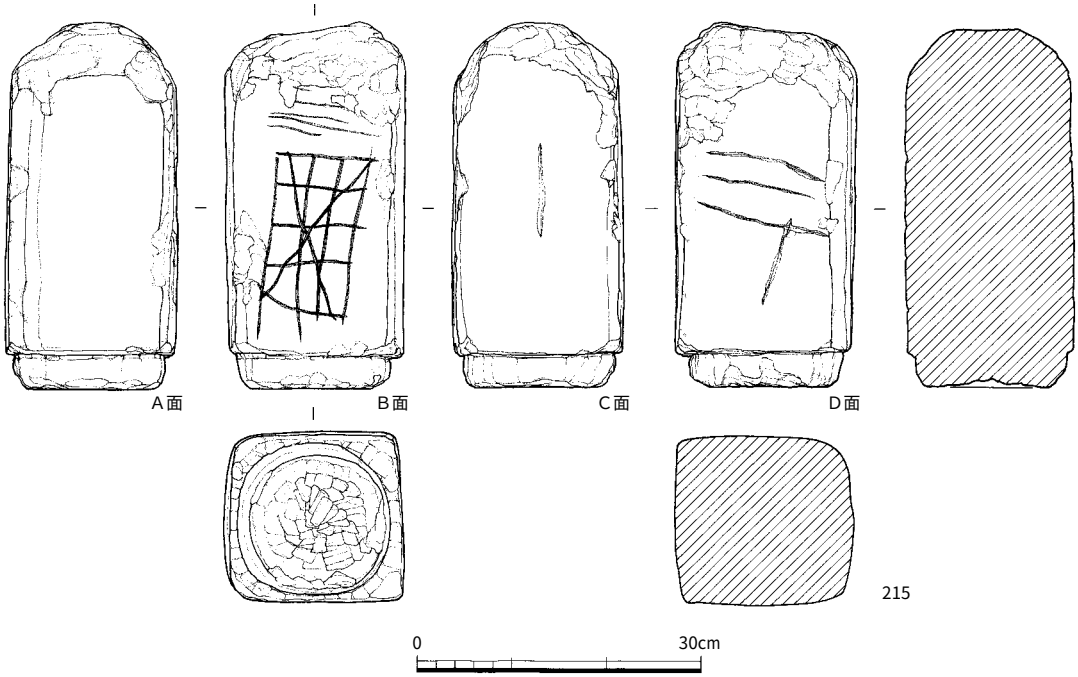


第39図　石器・石製品実測図（1/2）



第40図　石製品実測図（1/4）

の円形出枘を削り出している。柱状部の各側面は、平坦に仕上げられている。出枘のある部分では、出枘の円周部は滑らかな面に調整されているが、端面には鑿痕を残している。このような整形痕の有無から、出枘側が下になり、立てられていた可能性が高いと考えられる。角柱の形状に加工した凝灰岩を、立てて用いる構造物としては、橋の欄干などが考えられる。215の石造物は、柱状部の四隅の内、１角（第41図Ａ面からＤ面への折れ曲がり部分）は角が取れ、滑らかな丸い角になっている。この部分は、井戸側の外上側になる状態に組まれていた。従って、井戸側に使用している段階に、角が磨り減る可能性は少ない。Ｄ面は、井戸側内面側に組まれていたため、井戸内の水などにより、表面が滑らかになっている。他の表面は、出枘部分と、柱状部の隣接する２面（Ｃ・Ｄ面）が制作時の状況を良く残していて、Ａ面は、磨り減りによる滑らかな面になっている。この状況は、出枘をつくり出す行程以前に、Ａ面を上にした配置で地覆石として使用されていた可能性が考えられる。１角の摺り減りは、地覆石の端の部分に用いられていたためと考えられる。他の特色には、柱状部を構成する４側面の内、３面に線刻がある。１面には、１本の縦線がほぼ中央に刻まれ、その面の両隣接面には、複数の線が刻まれている。中でもＢ面は、碁盤目状の線に×の線を重ねて刻まれていて、興味深い。碁盤目状に配した線刻は、縦４本、横５本の直線からなり、九字の形状に似ている。現在に伝わるまじないの中で、九字は、旅中安全祈願や、霧を晴らすのに使われたり、他の字や絵などと組み合わせて、多様なまじないに用いられているらしい。Ｂ面の線刻も、こういった類かも知れない。３面に刻まれた線を、まじないまたは戯画と解釈した場合、Ｂ～Ｄ面が地表面に現れていたとき、つまり橋の欄干などに用いられていた段階にしるされたものと考えられる。このように215の石造物は、地覆石から欄干に転用され、線刻が施された後に井戸側の石材として用いられた可能性がある。この変遷の最終期は開田城期とできるが、初期の時期は確定できなかった。



第41図　石造物実測図（1/8）

３　金属製品類

金属製品には、鉄製品と青銅製品がある（第42図、図版28(2)）。鉄製品は、開田城期、鎌倉時代、長岡京期、飛鳥時代などの釘・刀子・鏃などがある。青銅製品には、鎌倉時代以後の銅銭・装飾金具などがある。出土遺構は、Ｂ調査区井戸ＳＥ09・掘立柱建物ＳＢ62Ｐ８・焼土坑ＳＫ13－Ｂ・中世遺物包含褐灰色シルト層、Ｄ調査区土坑ＳＫ96、Ｆ調査区西辺堀ＳＤ43・土坑ＳＫ73・西辺土塁構築土層、Ｇ調査区撹乱抗52・溝ＳＤ107・北辺土塁構築土層などである。

（１）奈良時代の金属製品

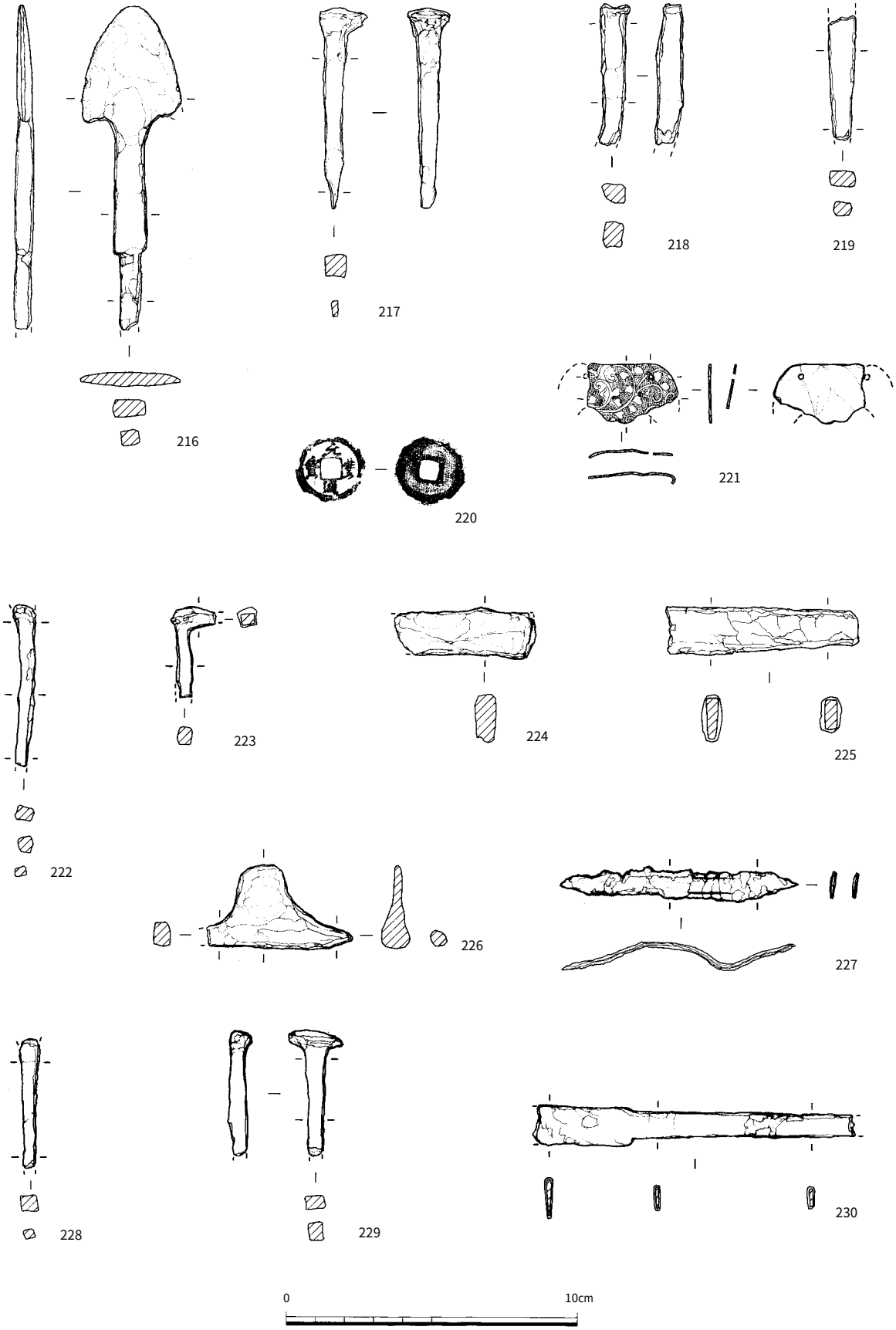
奈良時代の土器に伴って出土した鉄製品には、Ｄ調査区土坑ＳＫ96出土の鉄鏃（216）がある。杉山秀宏氏の古墳時代鉄鏃分類[7]に従えば、鏃身部は三角形平造、頸部は直線状角関、茎部は有頸方形の諸特徴をもつ。関部や篦被部は、鋭く明瞭である。鏃身部幅3.4㎝、鏃身長3.7㎝、頸部幅１㎝、頸部長4.7㎝、頸部厚さ0.5㎝、茎部幅0.5㎝、茎部長さ2.7㎝以上、茎部厚さ0.4㎝、を測り、残存する全重量は、17.190ｇを量る。長岡京期の鉄鏃は、右京第77次調査西一坊大路東側溝ＳＤ7701や右京第365次調査西一坊大路西側溝ＳＤ01などから出土している。西一坊大路東側溝から出土した鉄鏃[8]には、平根式（三角形鏃）と斧矢式（方頭鏃）がある。平根式鉄鏃は、鏃身幅3.4㎝、鏃身長3.8㎝、鏃身厚さ0.9㎝、茎部の幅と厚さ0.6㎝、長さ９㎝で、鏃身部の計測値が216と類似する。相違点は、関部の有無である。西一坊大路西側溝ＳＤ01から出土した鉄鏃[9]は、鏃身幅1.9㎝、鏃身長２㎝、鏃身厚さ0.5㎝、茎部の幅と厚さ0.6㎝、茎部長3.5㎝以上で、216より小さく、関部が無い。この他、長岡京跡右京第530次調査では、南栗ヶ塚遺跡中世土坑ＳＫ06から柳葉形鉄鏃が１[10]点、右京第538次調査では、今里遺跡奈良時代落ち込みＳＸ10から柳葉形鉄鏃１点が出土している[11]。このように、長岡京跡西一坊大路東側溝から出土してるものが最も類似している。

（２）長岡京期の金属製品

長岡京期と考えられる金属製品には、Ｄ調査区土坑ＳＫ101出土鉄釘がある。約0.7㎝角、長さ５㎝の身部片である。他に、鉄釘頭部片も出土した。

（３）鎌倉時代の金属製品

鎌倉時代の土器類に伴って出土した金属器には、Ｆ調査区土坑ＳＫ37出土の鉄製刀子（225）や、Ｇ調査区溝ＳＤ107から出土した鉄釘（219）などがある。225は、刃部から柄部にかけての破片で、重さ12.774ｇを量る。刃部から柄部への移行は滑らかで、段を設けていない。219は、厚さ約４㎜の身部片で、最大幅約９㎜から先細りになる。刀子の柄先端部などの可能性も考えられる。重さ4.980ｇを量る。他に、Ｂ調査区近世包含層から出土した銅銭（220）なども、鎌倉時代の所産である可能性がある。220は、1047年初鋳の北宋銅銭「元豊通寶」で、重さ約1.776ｇを量る。220の銅銭は、出土状況から、近世段階までの使用が考えられるが、大量に輸入され流通した鎌倉～室町時代の可能性が高いと判断して、ここに含めた。他の金属器類は、鎌倉時代の遺構や開田城土塁構築土から出土したものであることから、鎌倉時代以前の所産とすべきかも知れない。



第42図　金属製品実測図（1/2）

（４）開田城期前後の金属製品

開田城期と考えられる金属器には、Ｂ調査区井戸ＳＥ09出土の板状青銅製品（227)、Ｂ調査区掘立柱建物ＳＢ62Ｐ８出土の鉄製刀子（230)、Ｂ調査区焼土坑ＳＫ13－Ｂ出土の鉄釘（229)、Ｆ調査区西辺堀ＳＤ43出土の鉄釘（222）・不明鉄製品（226）などがある。227は、幅0.9㎝、厚さ0.08㎝、長さ8.6㎝の板状残片である。表面には青錆が著しく、元来の形状は不明。重さは、4.073ｇを量る。230は、身部から柄部にかけての長さ約11㎝の破片で、重さ7.373ｇを量る。背部の厚さは0.2㎝、背部から刃部の幅は1.4㎝、柄部幅は最大0.9㎝から先細りになる。229は、５㎜角の身部をもつ頭部片で、重さは4.710ｇを量る。222は５㎜角の身部片で、重さ3.060ｇを量る。226は、火打ち金状の形態をしたもので、直線部が厚さ７㎜あり、最も分厚い。重さは、9.248ｇを量る。他に、Ｆ調査区西辺土塁構築土内から、身部の太さ0.6㎝角、長さ4.8㎝の鉄釘身部片や、太さ0.4㎝角の身部をもつ鉄釘片、幅0.5㎝、厚さ0.3㎝、長さ2.2㎝の鉄片、幅2.5㎝、厚さ0.7㎝、長さ2.5㎝の鉄片、1.5㎝角、厚さ0.4㎝の鉄片などが出土した。Ｇ調査区北辺土塁構築土からは、幅0.7㎝、厚さ0.6㎝、長さ5.2㎝の鉄釘片、身部が0.6㎝角、長さ4.8㎝の鉄釘片、身部0.4㎝角、長さ2.5㎝の鉄釘片などが出土した。これらはいずれも、開田城期の遺構から出土したことから、ここに含めたが、北辺土塁構築土から出土したものをはじめ、時期が遡る可能性もある。

（５）時期不明の金属製品

所属時期の明らかにできなかった金属製品には、Ｂ調査区近世包含層出土鉄釘（228)、Ｆ調査区西辺土塁構築土から出土した鉄製刀子片（224）や鉄釘（223)、Ｇ調査区攪乱抗出土鉄釘（217)、Ｇ調査区北辺堀上層出土銅製金具（221)、Ｇ調査区北辺土塁構築土から出土した鉄釘（218）などがある。228は、５㎜角の身部をもつ身部片で、重さ2.874ｇを量る。224は、幅1.5㎝、厚さ0.5㎝で、長さ５㎝まで残る板状破片である。重さは14.905ｇを量る。クラックが激しく、計測数値が正確でない。223は、幅５㎜、厚さ４㎜、重さ2.722ｇの身部片で、直角に屈曲している。217は、上面1.4㎝角の頭部に、0.7㎝角の身部をもつ。重さは、19.377ｇを量る。221は、唐草文が描かれた銅製飾り金具の一部と考えられる。唐草の隙間には、細かい円形凸基が列ぶ。１箇所に釘孔が観察できる。重さ1.626ｇを量る。218は、７㎜角の身部をもつ破片である。重さは8.316ｇを量る。ほかに、Ｂ調査区近世包含層から出土したものに、幅2.7㎝、長さ2.2㎝、厚さ約0.1㎝の板状で、鉄斧のように上下の一角を折り曲げた帯金具のような鉄製品もある。Ｆ調査区近代土器包含層から出土したものに、上面が1.4㎝角の頭部で、0.6㎝角の身部をもつ鉄釘片などがある。これらの内、217は近代まで降る可能性もあるが、中世土器類を搬出していることから、鎌倉時代以後の所産と捉えておきたい。土塁構築土から出土した金属器類は、開田城構築時以前の所産と考えられる。その他の金属製品は、近世以前の所産としなければならないが、開田城期のものが含まれている可能性もある。このように、当調査で出土した金属器類は、伴出土器からの時期確定が困難なものが多い。

第４章　ま　と　め

１　開田城跡について

（１）開田城の名称と実年代

開田城に関する文献は、『大乗院寺社雑事記』文明２（1470）年４月18日の条に、「昨日自八幡来者相語、於西岡日々合戦、開田城并勝龍寺城、山名弾正（是豊）并丹波勢責之云々、」とあるのが唯一である。ところが、『山崎八幡宮文書』には、「去十四日、於西岡、鶏冠井、青龍寺合戦之時、当所住人等致忠節、数輩被疵之旨、山名霜台（是豊）注進到来、尤以被感思食訖、弥抽戦功者、可有恩賞之由、所被仰下也、仍執達如件、　文明二年四月廿一日　下野守（布施貞基）　肥前守（飯尾之種）　山崎住人中」とある。この両文献から、開田（カイデン）城と記されたものは、実は鶏冠井（カイデ）城のことで、八幡の人が勘違いをしたか、または奈良興福寺の大乗院門跡尋尊が聞き違えて記した可能性が高いとされている。そして、漢字で開田城と記していることから、開田城は実在していた城であったからこそ、極めて音のよく似たカイデンと誤解されて書かれ[12]たものであり、その名は広く知られていたと考えられる。ちなみに、両文献に記された勝龍寺城は、『野田泰忠軍忠状』にも「一、同（文明２年）四月十四日、於勝龍寺搦手北之口、合戦仕、安富又次郎相供、焼落馬場并古市、御感状在之、」とあり、勝龍寺城を攻めた丹波勢（東軍）の中に、野田泰忠が参戦していたことが分かる。このように、開田城に直接関与する文献は、皆無に等しいが、『大乗院寺社雑事記』の開田城が誤記されたものであったとしても、開田城の存在を肯定的に捉えることが許されよう。そして、文明２年４月14日現在において、西軍の配下にあったことが推測できる。さらに、開田城の年代は、応仁・文明の乱の最中の1470（文明２）年の１点を前後するある程度幅を持たせた時期、すなわち、15世紀後半から16世紀前半頃と推測できる。

（２）開田城の位置

次に開田城の位置と城館の主について探る必要がある。まず、先の文献から、勝龍寺城や鶏冠井城のある近傍であろうことは確実である。そして、開田の大字名は当調査地周辺を指し、この範囲内が有力な候補となる。木下良氏は、大字開田内にある小字名と地形変化の観察から、小字内開本にある仁和山小法院三尊寺周辺の約70間四方を堀で囲む寺院を中心とした城郭で、長岡天満宮宮司中小路氏の屋敷のある小字城ノ内の土塁で囲まれた東西約40間、南北約30間（当調査対象地域）をも、城の構造を持つと推[13]定されている。1978年に小字城ノ内で調査を担当した山本輝雄氏は、小字名と調査成果から、堀と土塁で四周を囲む小字城ノ内の90m四方の方形区画を中心的施設とし、小字内開本を含む東西約250m、南北約130mの範囲に広がると想[14]定した。竹岡林編の「日本城郭大系」では、土豪中小路氏の居館が、畠山義就の西岡占拠と同時に城郭となり、三尊寺も城郭の一部として利用されたと推[16]測している。山下正男氏は、京都市内と周辺部の城館を集成するにあたり、中小路氏を城主とする開田城Ａと、天正年間に焼失した三尊寺跡地に構築し

た郭として開田城Ｂを想定[16]した。その後山本氏は、「乙訓文化」で、小字城ノ内の土塁と堀で囲まれた方形区画を城跡とし、東方の三尊寺を含む内開本周辺は中世環濠集落と位置付けている[17]。この説は、中井均氏の解釈に近い。中井氏は、小字城ノ内の範囲は開田城の城下集落と考えられ、小字内開本の三尊寺を囲む区画と共に、大阪府日置荘遺跡を例に、開田の国人の館でもある開田城を中心に、集落や寺院をいくつかの堀で区画した構造と考えられている。そして城主となる国人は、15世紀末から文献に現れる中小路氏としている[18]。このような考察の積み重ねにより、今回の調査対象地は、本来中小路氏の居する開田城、あるいは畠山義就西岡占拠による西軍の配下に置かれた開田城の中核部と考えられる。

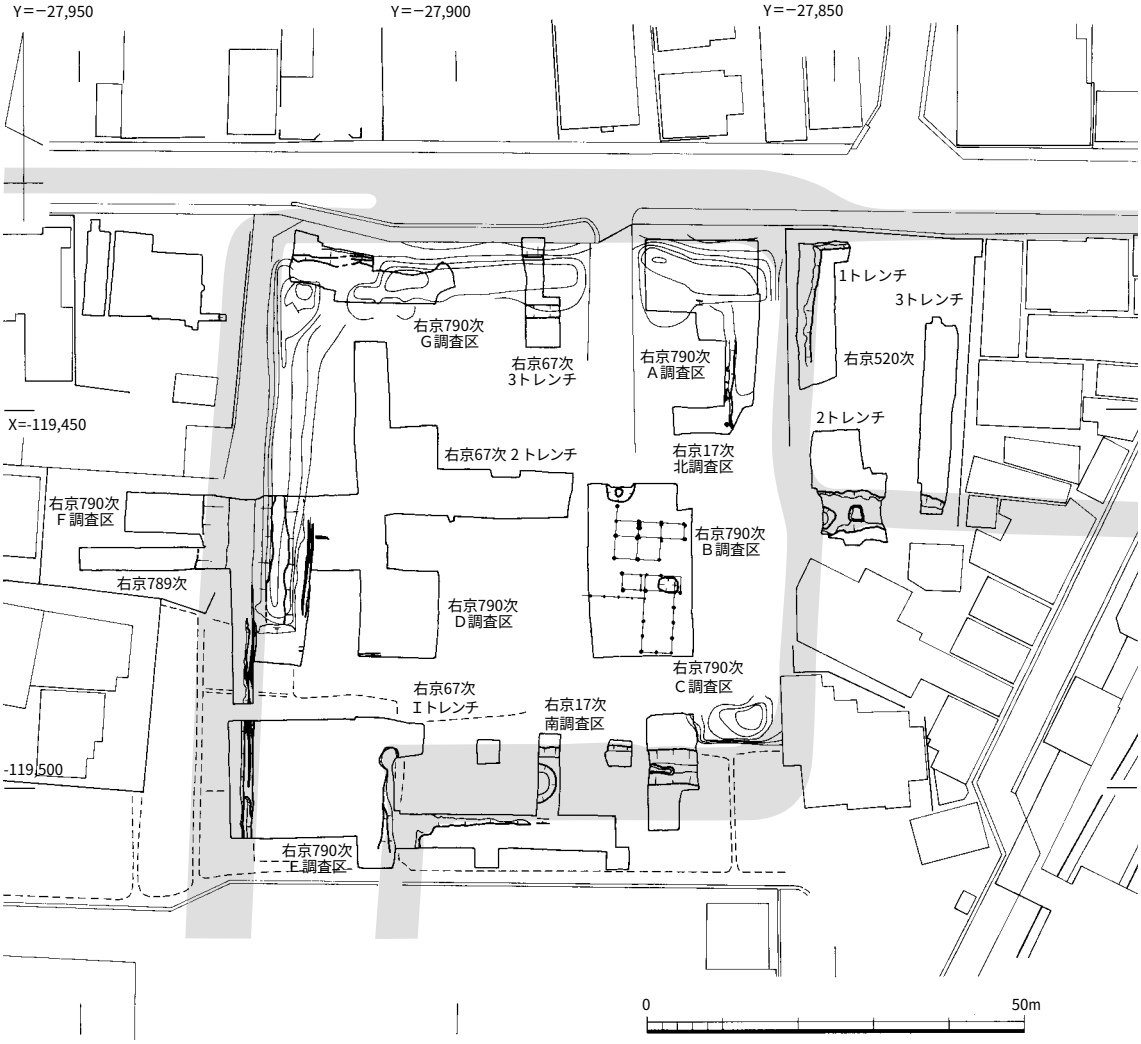
（３）開田城の構造

開田城跡に関する今回の調査での検出遺構には、北辺堀と北辺土塁、西辺堀と西辺土塁、南辺堀と南辺土塁、城館内施設などがある。（第43図）

まず全体像について見ておきたい。当調査地付近の水田畦畔を含む道路による区画は、東西方向がほぼ国土座標に即しているのに、南北方向は、国土座標の南北より北で東に約２°ほど振れている。つまり、東西基準線と南北基準線が、直行しない区画になっている。これは、東西方向が長岡京条坊の区画基準を踏襲し、南北方向のみ条里区画とされたためと解釈されている。開田城北辺堀は、ほぼ長岡京の五条大路南辺の推定位置にある。条里坪名は、長福寺文書や小字名十一・十三の位置などから、千鳥式坪並びに具体的に復元[19]されている。これによると、当調査地は六条長井里二十坪にあり、開田城西辺堀が十七坪と二十坪の境に、北辺堀が十九坪との境に位置する。条里の南北基準線は、北で約２°前後東に傾いており、開田城西辺土塁・西辺堀および城館内建物や柵などの向き、つまり北で東に約２～３°の傾きに極めて近い。また、ほぼ四周を囲む土塁により区画された範囲は、約70m四方であることから、条里ひと坪（約109m四方）の約2/3坪を占有している。このことは、開田城が、六条長井里二十坪の北西角を基点に、条里地割りの南北方向を基準に、その地割りに規制されて築かれたものであることを示している。

次に、平面形態と規模について整理しておく。表紙のスケッチは、1922～1981年頃の土塁の残存状況を、地図や写真を基に描き、堀は今までの発掘調査成果の一部を描き加えて、鳥瞰視したものである。開田城の周囲は、ほぼ四周を堀で囲んでいるが、南西隅は、西辺堀と南辺堀が接続せず、約16mの幅で南に張り出す構造になっていた。つまり、西辺堀ＳＤ43は、南辺堀ＳＤ05との接続推定位置でも止まらずに南へ直線的に延び[20]、南辺堀ＳＤ05は、西辺堀ＳＤ43との接続推定位置の手前約16m東の位置で止まり、南に屈曲して南北方向の堀ＳＤ164になっている[21]ことが明らかになった。この張り出し部は、南門に関係する防御機能を備えた施設に関係すると考えられる。今までの発掘調査でえられた成果から、土塁構築土下の旧表土面レベルを基に、各堀・土塁の規模を推定復元すると、以下の数値が想定できる。北辺堀ＳＤ161は、幅約５m、深さ約1.8m、東西長約80mで、さらに東の区画の北辺堀（長岡京跡右京第520次調査）となり、深さ約2.4mでのびている。西辺堀ＳＤ43は、幅約８m、深さ約1.5m、南北長90m以上でさらに南にのびる。南辺堀ＳＤ05は、最大幅約10m、最大深さ1.9m（但し北辺から約4.2m幅で深く、南部は深さ約

1.2mと浅くなる二段落ち）、東西長約58m。東辺堀ＳＤ02は、当調査対象地東辺の地境の形状から、ほぼ東辺中央で約２m前後東に張りいだしていると思われ、その北半部（屈曲部より北）が幅約５m、深さ約1.5m（右京第520次調査から復元）、南北長約44m、南半部は未調査であるが、南北長約37mと推定できる。またこの屈曲部に、東にのびる堀（右京第520次調査）ＳＤ01が取り付く。堀ＳＤ01は、幅約６m、深さ約2.2～2.6mと深い。南辺堀ＳＤ05西端から南にのびる堀ＳＤ161は、幅約５m、深さ約１m、長さ約20mを超えると推定できる。土塁は、本来の高さを推定するのは困難なため、残存高と併記することにする。北辺土塁ＳＡ71は幅約6.2m、高さ約2m（1981年までの最大残存高約1.6m）、東西長約58mで、北辺土塁ＳＡ71西端と西辺土塁ＳＡ70との間に北門があった可能性がある。西辺土塁ＳＡ70は、幅約６m、高さ約２m（残存高南部1.2～北端部２m）、南北長約65m（但し残存南北長約49mで、南辺土塁ＳＡ67の西延長部まで構築とした場合）。南辺土塁ＳＡ67は、幅約６m（残存幅約5.2m）、高さ約２m（東端部最大残存高約1.6m）、東西長約55m（残存東西長約10m）。東辺土塁ＳＡ171は、幅約６m、高さ約２m（長岡京跡右京第17次調査での残存高約0.8m）、南北長約66m（但し、東辺堀に沿って、南北間のほぼ中央で東に約２m屈曲）と推定できる。



第43図　開田城の調査区配置図（1/1000）

内部構造については、撹乱・削平が激しく、十分に掌握できたとは言えない。しかし、部分的な配置関係は押さえることができた。それは、石組みの井戸側構造の井戸ＳＥ09と数棟の掘立柱建物が、城館内南東部に南北に列んで検出できたことである。建物の一つ（掘立柱建物ＳＢ64）に、カマドと考えられる長方形の焦土面を持つ土坑（ＳＫ13－Ｂ）が取り付く構造と考えられることから、厨と考えられる。従って、城館内南東部は、炊事、調理、洗浄などの日常生活に欠かせない空間として利用されていたものと考えられる。

２　長岡京跡について

当調査では、西二坊大路西側溝の位置と、右京六条三坊一町の宅地内施設の一部が明らかになった。西二坊大路西側溝（ＳＤ83・132）の南北中軸は、国土座標第Ⅵ系で、Ｄ・Ｆ調査区（ＳＤ83）Ｘ＝－119,470地点でＹ＝－27,911.8、Ｇ調査区（ＳＤ132）Ｘ＝－119,6432.5地点でＹ＝－27,911.8と、ほぼ南北軸に合う。この溝は、Ｄ・Ｆ調査区とＧ調査区の間で実施された長岡京跡右京第67次調査第２トレンチでも、長さ約20mにわたって直線的に検出されている（ＳＤ6733）。Ｆ・Ｇ調査区でえられた国土座標の数値は、長岡京跡右京第26次調査で検出されたＸ＝－118,450.5地点での西二坊大路西側溝ＳＤ2601の中軸座[22]標値Ｙ＝－27,912.2や、長岡京跡右京第90次調査で検出したＸ＝－119,586.5地点での西二坊大路西側溝ＳＤ9039の中軸座標数[23]値Ｙ＝－27,911.695に近似している。さらに長岡京跡右京第789次調査で推定された数[24]値（Ｙ＝－27,912）が、正しかったことをも裏付けた。またこの溝の西肩から約4.4m西で、掘立柱建物（ＳＢ160）を検出した。他にも、柱穴が検出できたが、柵や建物としてのまとまりに捉えられなかった。とはいえ、右京六条三坊一町の宅地内施設の一部であることは確かであり、土地利用を考察する上で、貴重な役割を担う成果といえる。また右京六条二坊十六町の一部にあたるＢ調査区でも、掘立柱建物と思われる柱穴群などがあった。このように、長岡京跡に関しては、条坊制や宅地利用について検討する上で、欠かせない遺構群が検出できた。

３　開田城ノ内遺跡について

開田城ノ内遺跡に関しては、弥生時代後期、古墳時代後期、飛鳥～奈良時代前期、平安時代、鎌倉時代、室町時代の一部の状況が明らかになった。遺構には、弥生時代後期の竪穴住居群、古墳時代の土坑や溝、奈良時代の建物群、平安時代や鎌倉時代の柱穴群、鎌倉時代後期から室町時代の畑作跡と思われる溝群等があった。出土遺物は、土器類や瓦類などが主であったが、鉄鏃や、軒瓦の出土は、特筆すべきものと言える。各時代の成果を、ここでまとめることはできなかったが、それぞれにおける集落などの具体的施設配置状況を把握できた。

最後に、現地調査および整理にあたって、井ヶ田良治、井上寛治、植松清志、上村和直、小倉英樹、梶川敏夫、國下多美樹、小森俊寛、坂下勝美、玉城玲子、中井均、中西裕樹、仁木宏、原山充志、村井伸也、山本雅和の各氏（敬称略。五十音順）をはじめ、日本史研究会、長岡京跡連絡協議会構成組織および参加者、物集女城勉強会参加者、乙訓の文化遺産を守る会（順不同）などからご指導、ご助言をいただいた。記して感謝したい。

注１）　山本輝雄「開田城址発掘調査略報」『長岡京ニュース』第14号　1979年
２）　未報告
３）　木村泰彦「右京第520次調査概報」『長岡京市センター年報』平成８年度　1998年
４）　岩ｆ　誠「右京第528次調査概報」『長岡京市センター年報』平成８年度　1998年
岩ｆ　誠「長岡京跡右京第528次調査概要」『長岡京市報告書』第36冊　1997年
５）　木村泰彦「長岡京跡右京第789次調査概要」『長岡京市報告書』第46冊　2004年
６）　岩ｆ　誠「長岡京跡右京第163次調査概要」『長岡京市報告書』第17冊　1986年
岩ｆ　誠「勝龍寺城発掘調査報告」『長岡京市センター報告書』第６集　1991年
７）　杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」橿原考古学研究所『橿原考古学研究所論集』第八　1988年
８）　山本輝雄「長岡京跡右京第77次調査概要」『長岡京市報告書』第９冊　1982年　実測図未掲載
木村泰彦・小田桐淳「長岡京時代」長岡京市『長岡京市史』資料編一　1991年　鉄製品に実測図掲載
９）　小田桐淳・中島皆夫「長岡京跡右京六条二坊二町・三町の調査」『長岡京市センター報告書』第10集 1997年 図未掲載
10）　原　秀樹「右京第530次調査概要」『長岡京市報告書』第13冊　1999年
11）　岩ｆ　誠「右京第538次調査概報」『長岡京市センター年報』平成８年　1998年
12）　木下　良「西岡地方における城館と防御集落」法律文化社『京都社会史研究』1971年
13）　注12）に同じ
14）　注１）に同じ
15）　武岡　林他編「開田城」新人物往来社『日本城郭大系』　1980年
16）　山下正男「京都市内およびその周辺の中世城郭」『京都大学人文科学研究所調査報告』35　1986年
17）　山本輝雄「開田城」乙訓の文化遺産を守る会『乙訓文化』特集号　乙訓の城をあるく　1987年
18）　中井　均「乙訓の中世城館」長岡京市『長岡京市史』本文編一　1996年
19）　百瀬ちどり「乙訓郡の条里」長岡京市『長岡京市史』本文編一　1996年
20）　当調査Ｅ調査区の成果
21）　長岡京跡右京67次調査成果、当調査Ｅ調査区でも再確認
22）　高橋美久二他「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」『京都府概報』1979　1979年
高橋美久二他「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」『京都府概報』1980第２分冊　1980年
23）　岩ｆ　誠「長岡京跡右京第90次調査概要」『長岡京市報告書』第９冊　1982年
24）　注５）に同じ

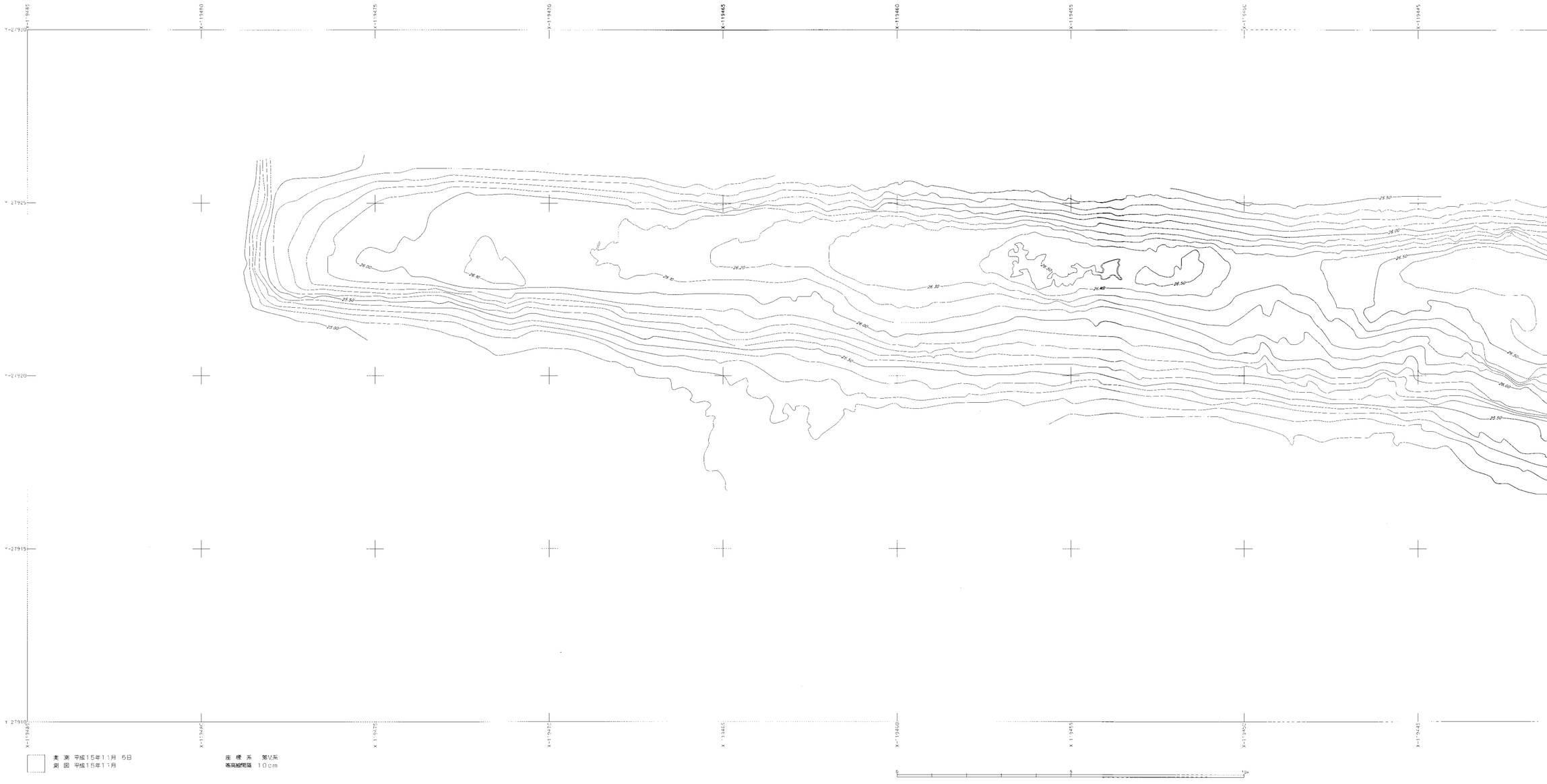
付表－１　報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうあとうきょうだい790じはっくつちょうさほうこく
書　　名	長岡京跡右京第790次発掘調査報告
副　書　名	
シリーズ名	長岡京市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第46集
編著者名	岩崎　誠　山本輝雄
編集機関	財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター
所　在　地	〒617－0853　京都府長岡京市奥海印寺東条１０－１

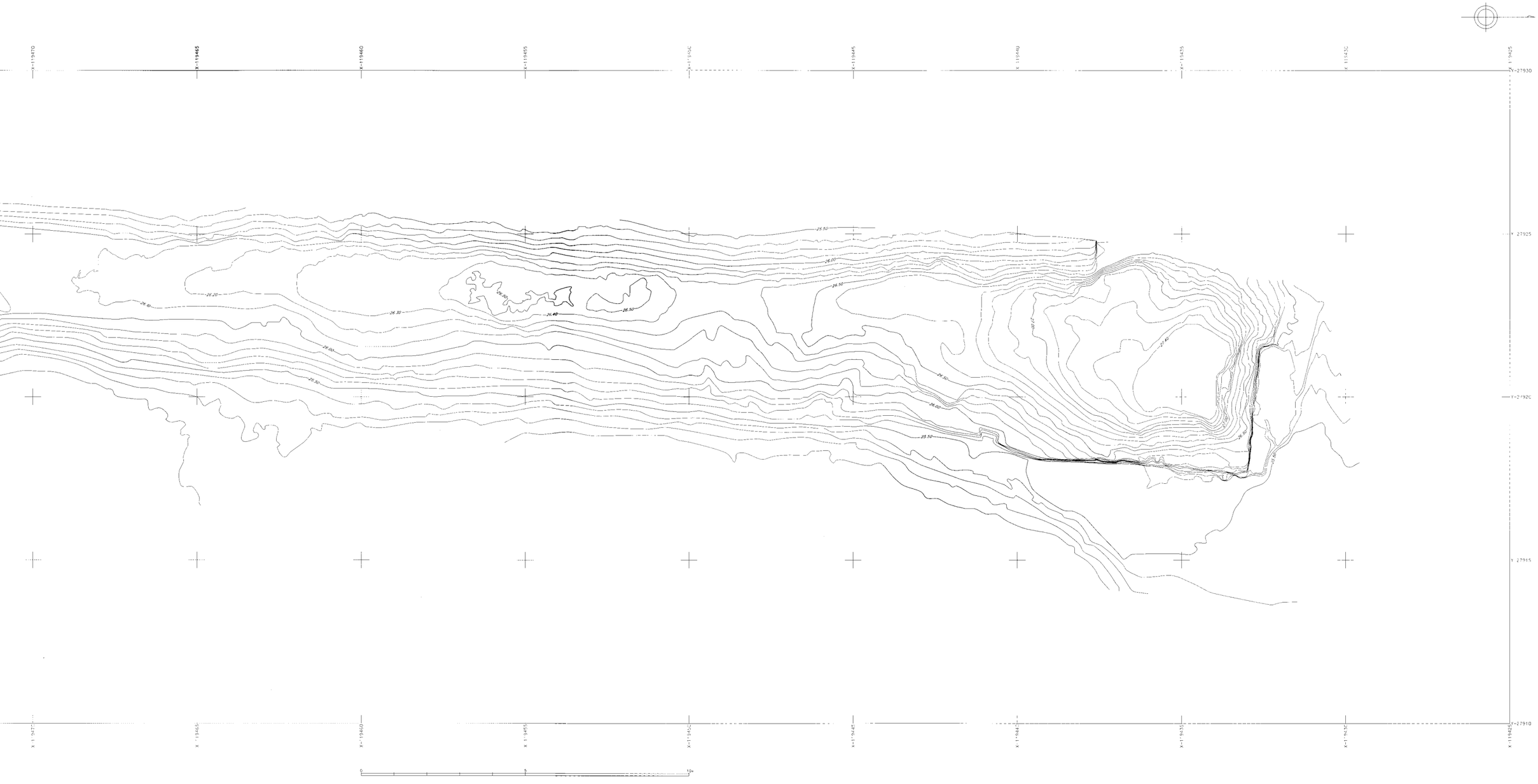
所収遺跡名	所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
ながおかきょうあと 長岡京跡（右京第790次）	ながおかきょうし 長岡京市 てんじんいっちょうめ 天神一丁目 313-1、313-4	26209	107	34°55′22″	135°41′41″	20031006～20040213	1387㎡	共同住宅建設工事
かいでんじょうあと 開田城跡			74					
かいでんしろのうちいせき 開田城ノ内遺跡			73					

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
開田城ノ内遺跡	集　落	弥生時代 古墳時代 奈良時代 鎌倉時代	竪穴住居、溝、流路 土坑・溝 掘立柱建物 井戸、柱穴	弥生土器 須恵器、鉄鏃 須恵器 土師器、陶磁器、瓦器	焼失住居有り。
長岡京跡	都　城	長岡京期	西二坊大路西側溝	須恵器、土師器、軒瓦	右京六条三坊一町の建物検出。
開田城跡	城　館	室町時代	掘立柱建物、井戸、土塁、堀、柵	土師器	城館南西隅に南張り出しを確認。井戸の石組みに石造物使用

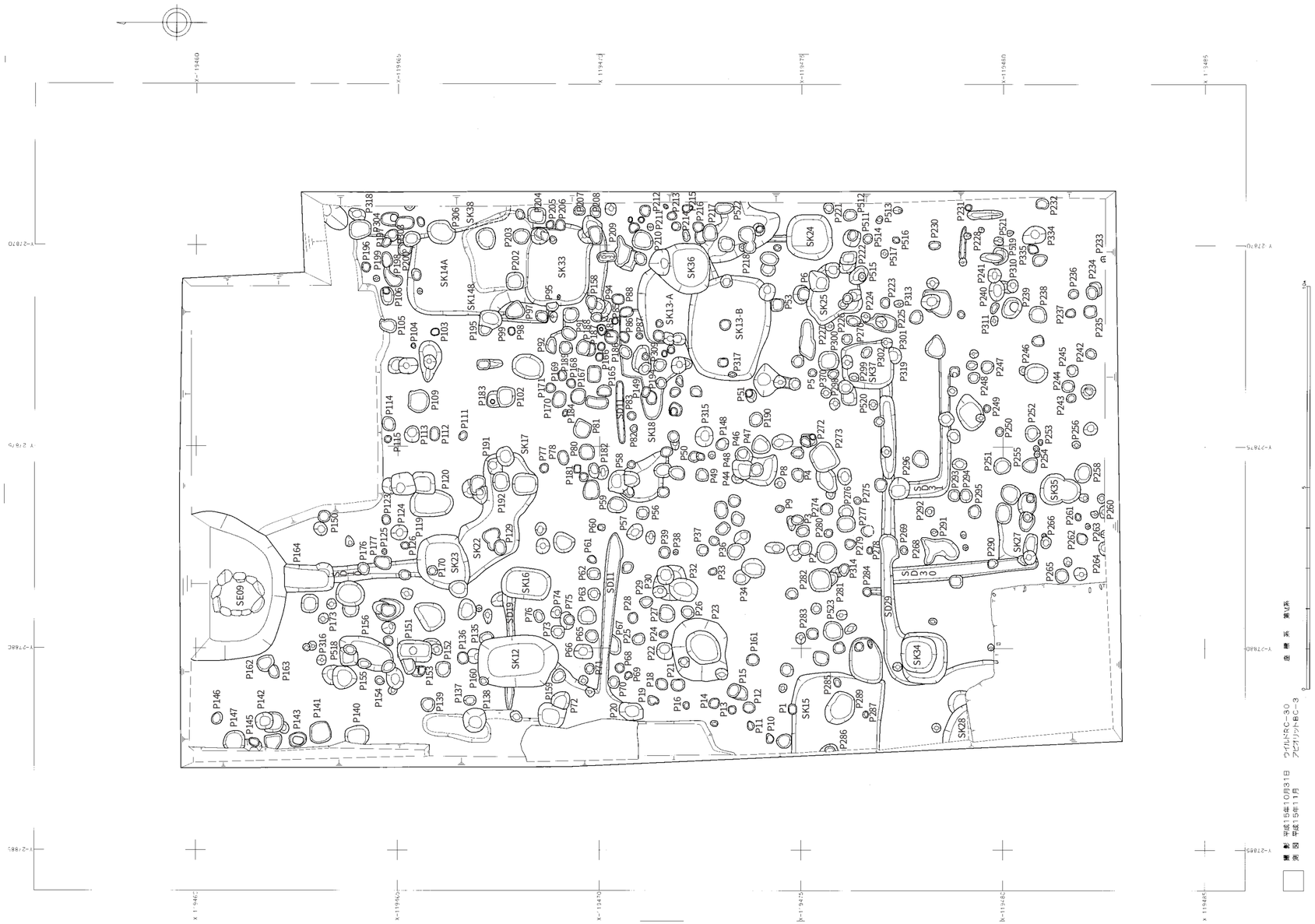
緯度、経度の座標系には、国土座標旧座標系を使用した。



第44図　西辺土塁調査前地形図（1/100）



第44図　西辺土塁調査前地形図（1/100）



第45図　B調査区検出遺構図(1/100)

図　　版

（1）開田城調査全景（合成空中写真）

（2）調査地全景（南東から）

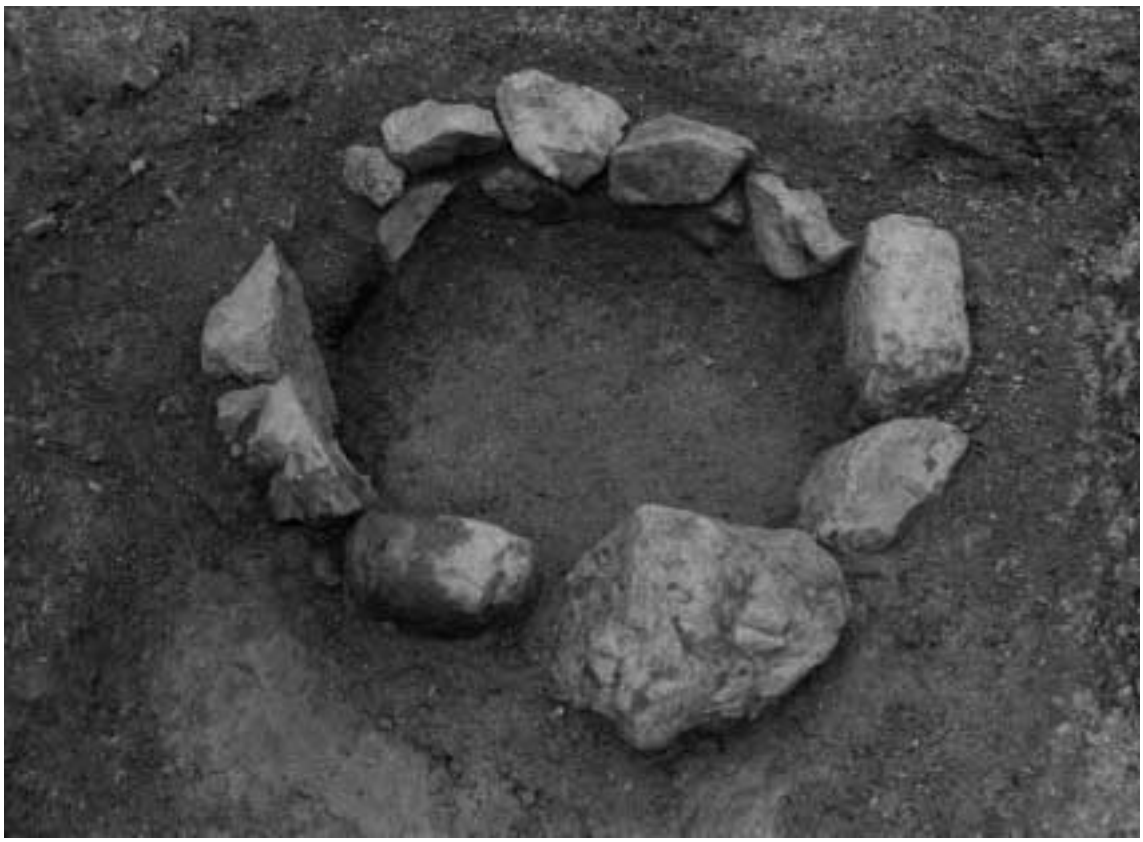
長岡京跡右京第790次調査

図版一

（1） A調査区全景（南から）

（2） B調査区全景（北から）

（１）井戸ＳＥ09（北から）

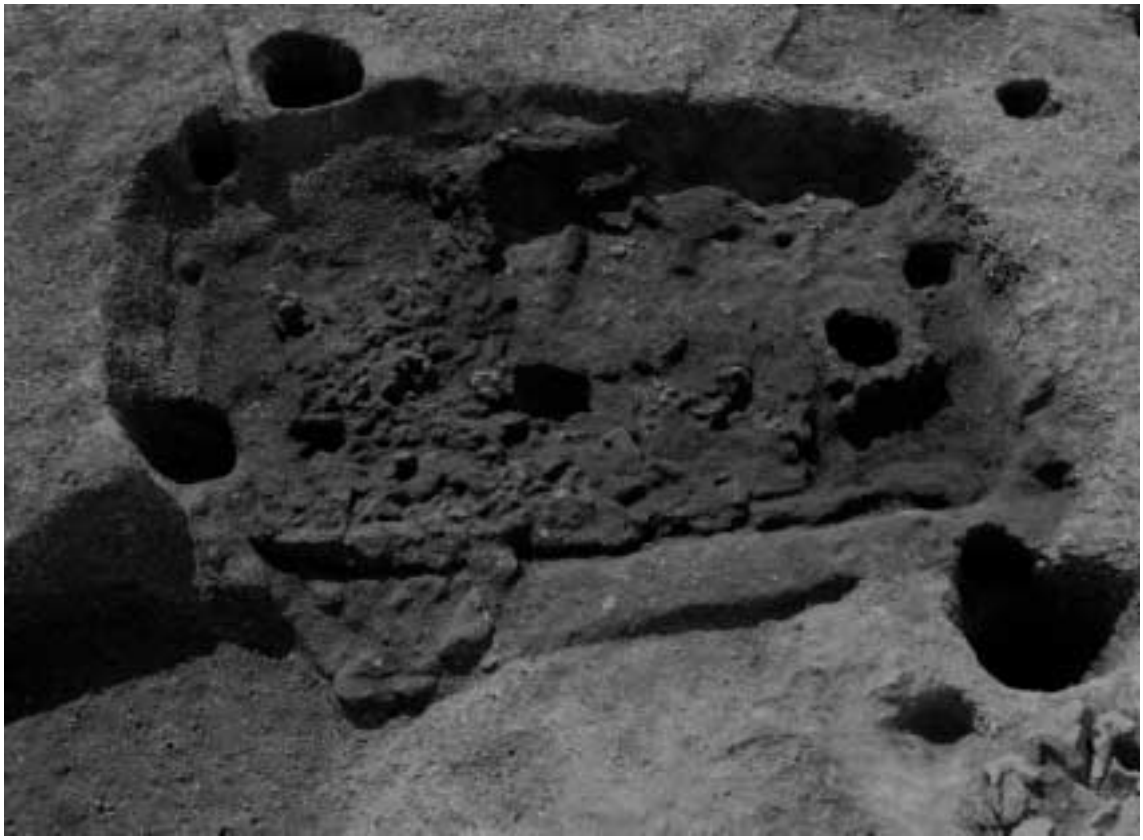


（２）井戸ＳＥ09 石組み（北西から）

図版四

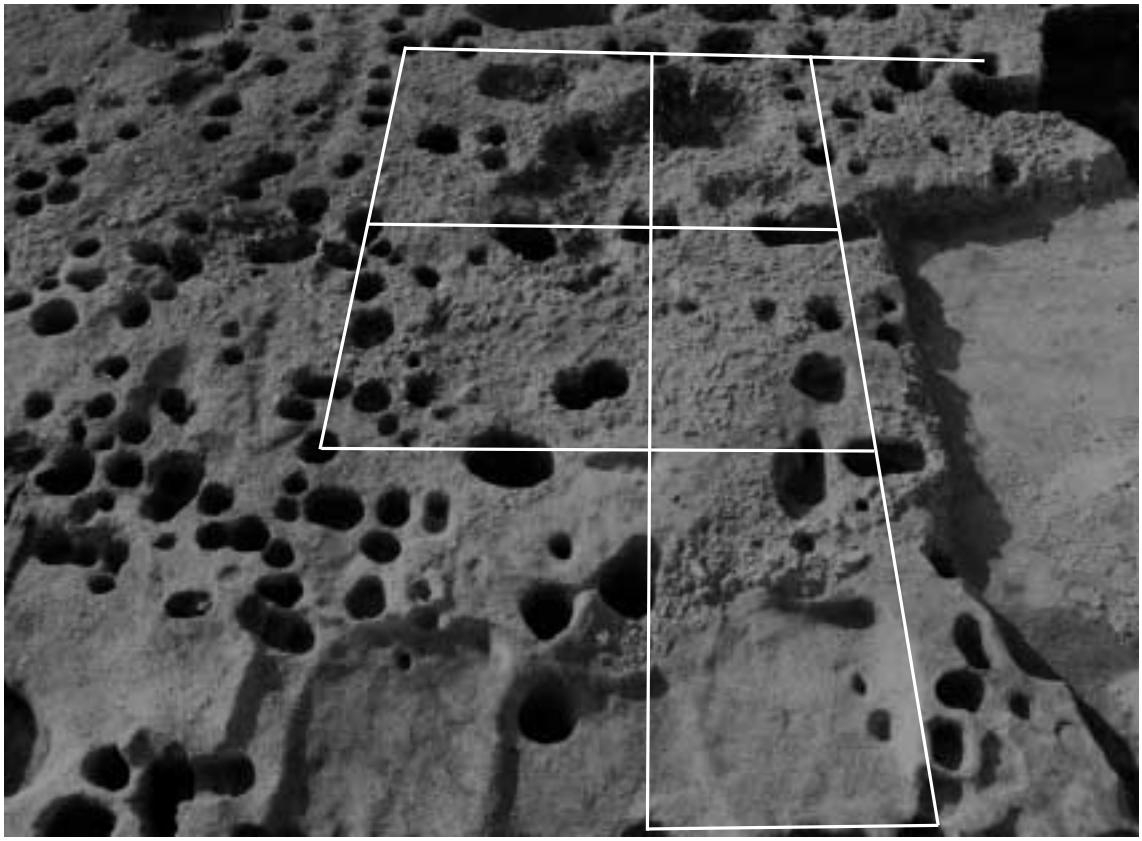
（1） 井戸ＳＥ09 石造物出土状況（南東から）

（2） 土坑ＳＫ18 （北西から）

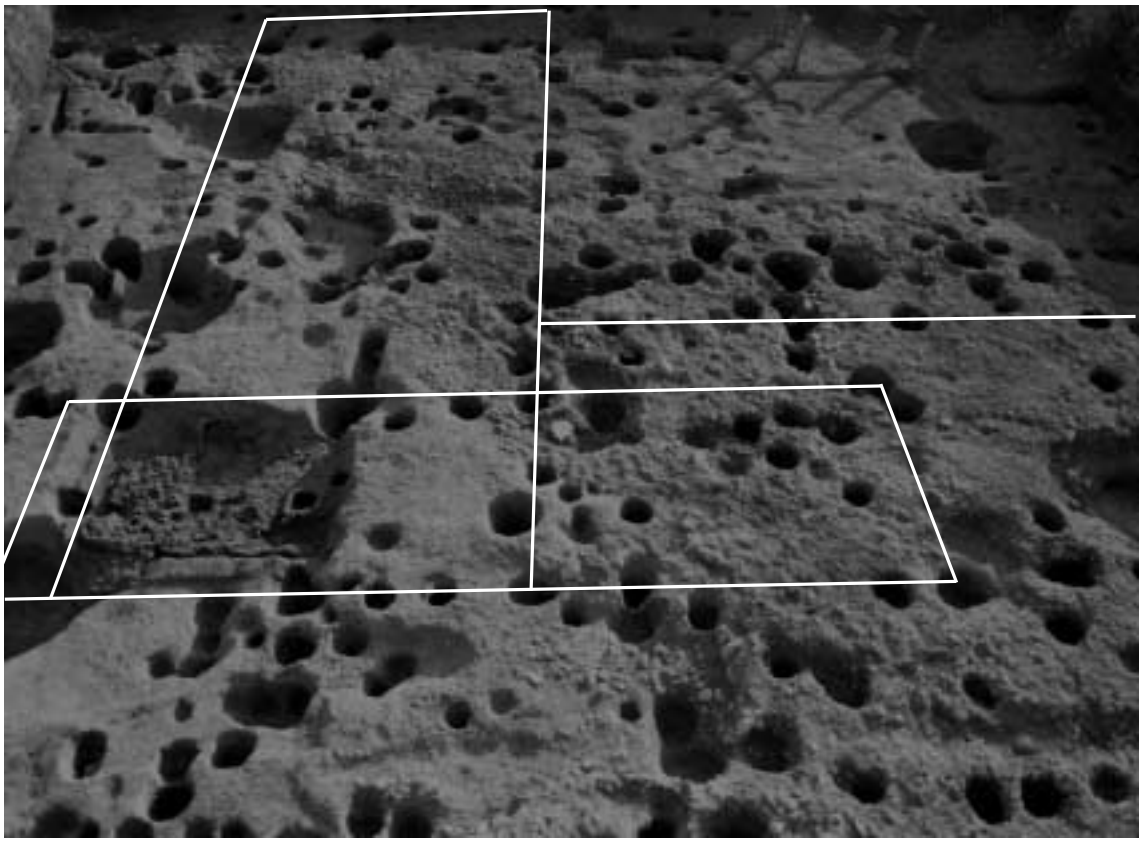


（１）焼土坑ＳＫ13－Ｂ焼土面（北から）

（２）焼土坑ＳＫ13－Ｂ貼り床面（北から）



（1）掘立柱建物ＳＢ62（東から）



（2）掘立柱建物ＳＢ64（北から）

（１）土坑ＳＫ12（北から）

（２）土坑ＳＫ12 断面（東から）

図版八

（1） Ｃ調査区と南辺土塁ＳＡ67（南西から）

（2）南辺土塁ＳＡ67と南辺堀ＳＤ05 断面（西から）

（１）南辺土塁ＳＡ67（南西から）

（２）南辺土塁ＳＡ67 断面（北から）

長岡京跡右京第790次調査

（1） D調査区と西辺土塁ＳＡ70南端（東から）

（2） E調査区全景（南西から）

（１）Ｅ調査区全景（北東から）

（２）竪穴住居ＳＨ47（北から）

長岡京跡右京第790次調査

（1） Ｄ・Ｆ調査区東半部（北東から）

（2） 西辺土塁裾の溝ＳＤ１２２（北から）

（１）西辺土塁ＳＡ70調査前全景（南東から）

（２）Ｄ・Ｆ調査区全景（南東から）

（1） 土坑ＳＫ73 集石状況（南東から）

（2） Ｆ調査区全景（西から）

（１）西辺土塁ＳＡ70 調査前の残存状況（南から）

（２）西辺土塁ＳＡ70 全景（南から）

（1） 西辺土塁ＳＡ70 調査前の残存状況（南西から）

（2） 西辺土塁ＳＡ70（南西から）

（１）Ｆ調査区北端の西辺土塁ＳＡ70 横断面（南から）

（２）Ｆ調査区北端の西辺堀ＳＤ43 断面（南から）

（1） Ｆ調査区北端の西辺土塁ＳＡ70と西辺堀ＳＤ43の断面（南から）

1、断ち割り状況（南から）

2、南畦断面（南から）

3、北畦断面（北から）

（2） 西辺土塁ＳＡ70断ち割り状況と西半部横断面

1、北畦断面（北から）

2、南畦断面（北から）

（1）西辺土塁ＳＡ70 東半部横断面

1、南端部断面（東から）

2、中央部断面（西から）

3、北半部断面（東から）

（2）西辺土塁ＳＡ70 縦断面

長岡京跡右京第790次調査

（1） 西辺土塁下層（北から）

1

2

3

（2） 西辺土塁中層遺構（1－北から、2－北から、3－南東から）

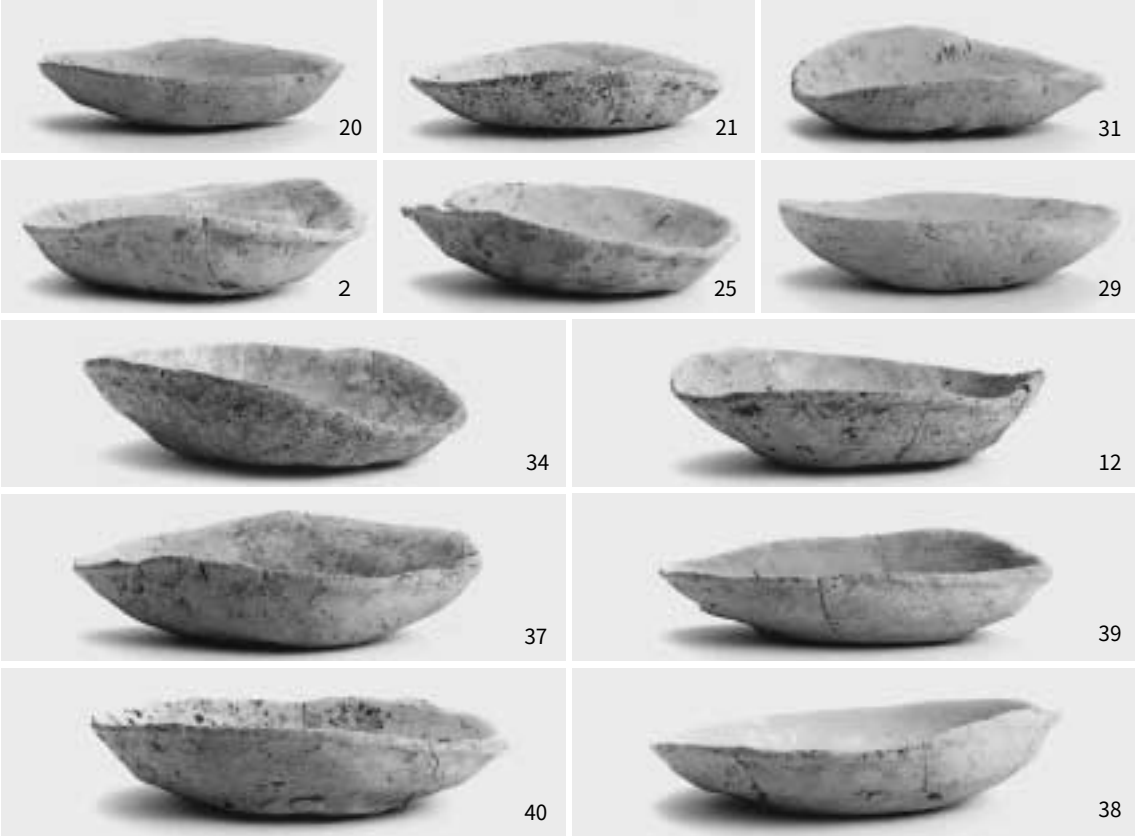
（１）Ｇ調査区全景（東から）

（２）Ｇ調査区中層全景（南東から）

（2） G調査区下層完掘全景（南東から）

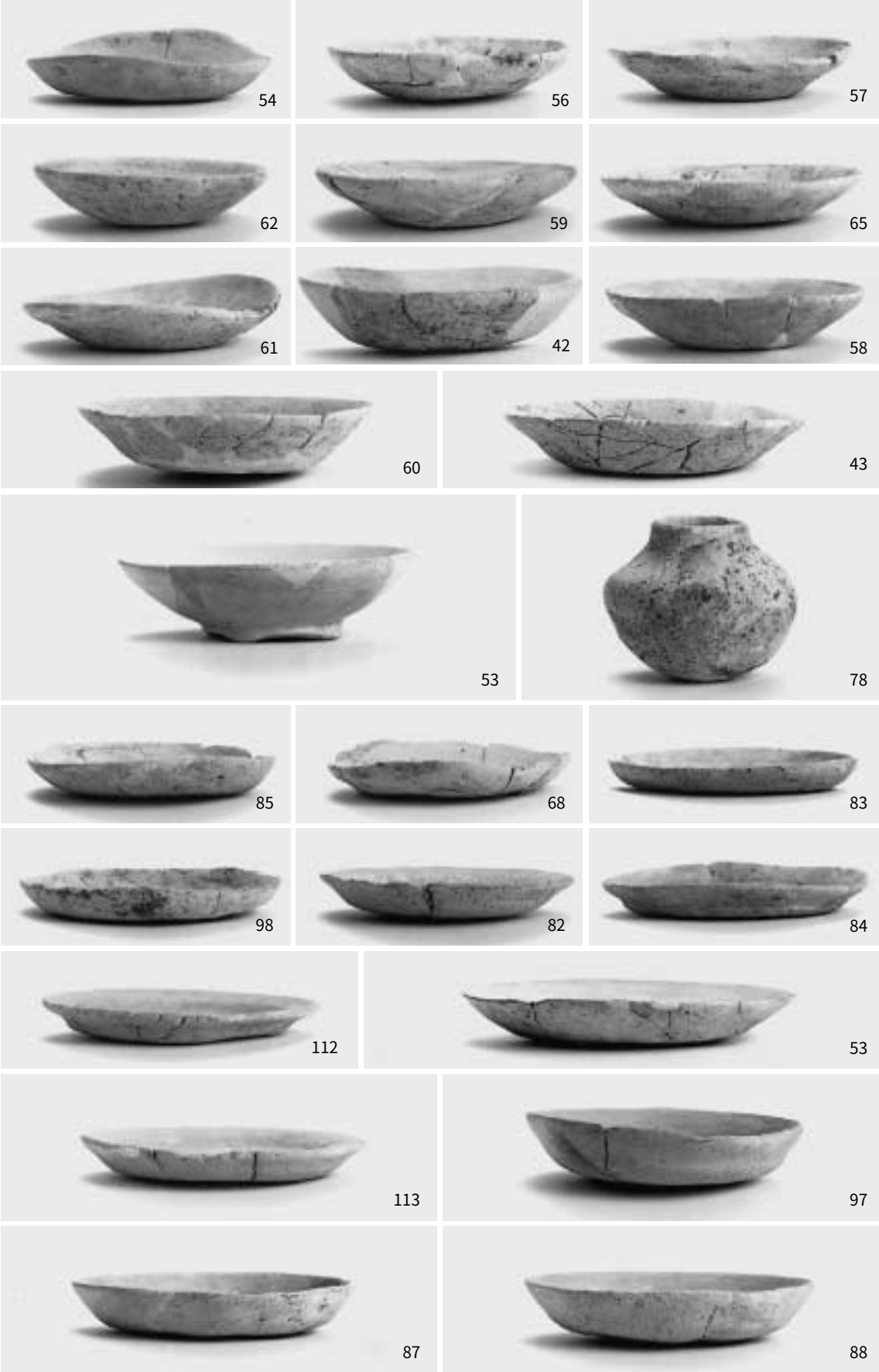
（１）北辺堀ＳＤ161（北東から）

（２）西辺土塁ＳＡ70 北端断面（北から）



（1） 南辺堀ＳＤ05出土土師器皿

（2） 土坑ＳＫ48出土一括土器



白磁皿、土師器小型壺、土師器皿

長岡京跡右京第790次調査

76

114

47

105

134

129

169

131

140

132

141

133

142

瓦器鉢・椀、土師器椀・皿・杯

161

162

163

178

179

153

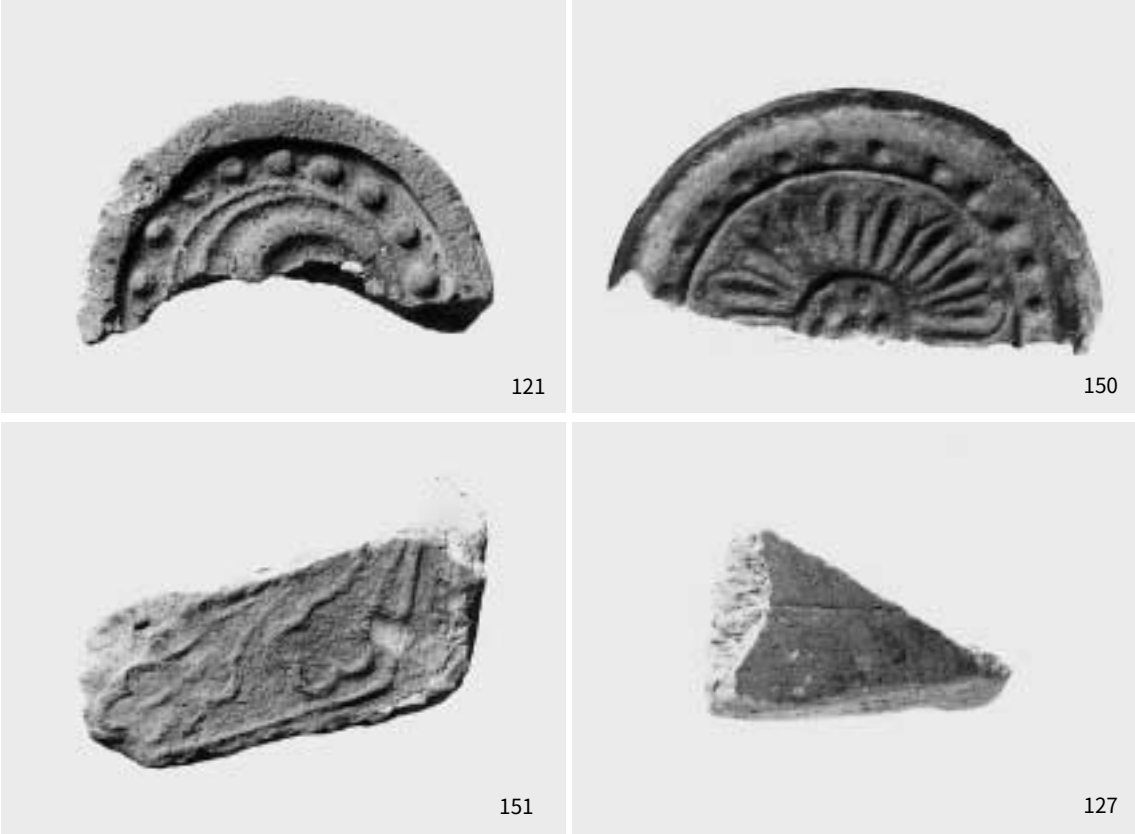
156

157

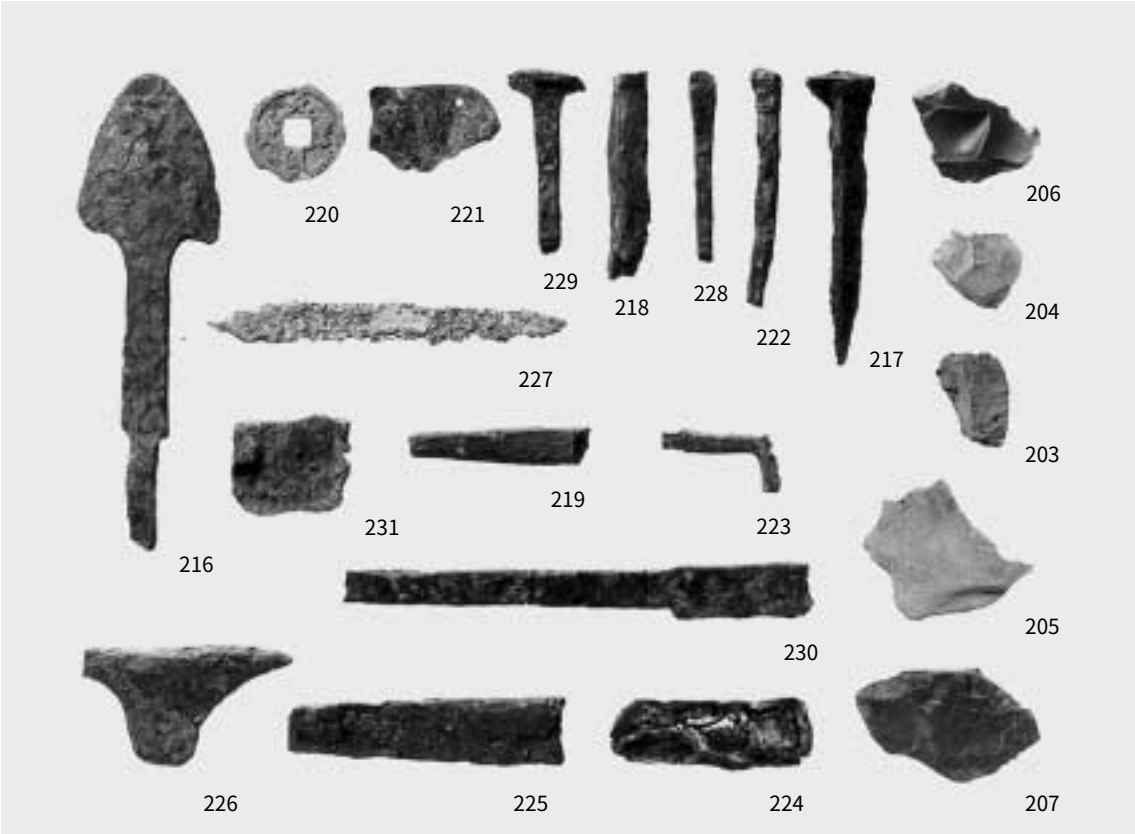
202

167

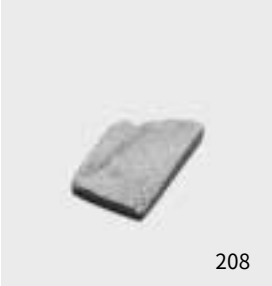
須恵器、弥生土器



（1） 軒瓦、緑釉陶器



（2） 金属器、石器類



砥石・石造物

長岡京跡右京第790次発掘調査報告
長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第46集

平成17 (2005) 年６月28日　印刷
平成17 (2005) 年６月30日　発行

編集発行　財団法人　長岡京市埋蔵文化財センター
〒617－0853　京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の１
電話　075－955－3622
FAX　075－951－0427
印　　刷　株式会社　図書印刷　同 朋 舎
〒600－8805　京都市下京区中堂寺鍵田町２
電話　075－361－9121（代）
FAX　075－371－0666